

(二二二) 遺産の分配を問ふ者に答へらる。其事の教訓(イ)神に依らざる富の空しき事(一三二)。

民の中の一人主に謂へり、師よ、我兄弟に我と遺産を分つことを命せよ。彼は之に謂へり、人よ、誰か我を立てて、爾等の裁判官或は分配者と爲したる。

聖福音史

是に於て彼等に謂へり、慎みて貪を防げ、蓋人の生命は其所有の饒なるに因らざるなり。又譬を設けて彼等に謂へり、或富める人に田畝の善く實れるあり。彼自ら付りて曰へり、我何を爲さんか、蓋我が作物を藏ひべき處なし。又曰へり、我斯く爲さん、我が倉を毀ちて、更に大なる者を建て、斯の中に我が悉くの穀物と貨物とを聚めて、我が豊に謂はん、幾と爾には多年の爲に畜へたる多くの貨物あり、息み、食ひ、飲み、樂めど。然れども神は彼に謂へり、無智なる者よ、今夜爾の豊を爾より索めん、然らば爾が備へし所の者は誰に歸せんか。凡そ己の爲に財を積み、神に於て富まざる者は是くの如し。

(ロ) 慮る勿れ。(二二一三三)。

又其門徒に謂へり、故に我爾等に語ぐ、爾等の生命の爲に何を食ひ、爾等の身体の爲

に何を衣んと慮る勿れ。生命は糧より大にして、身体は衣より大なり。試に我を思へ、彼等は稼かず、穡らず、倉もなく、納屋もなし、而して神は之を養ふ、爾等は鳥より貴きこと幾何ぞ。

且爾等の中誰か慮りて、其身の長一尺だに延ぶるを得ん。然らば至と小き事すら能せざるに、何を其餘の事を慮る。

聖福音史

試に百合の如何にか長するを思へ、勞かず、紡がず、然れども我爾等に語ぐ、ソロモンも其榮華の極に於て、其衣猶此の花の一に及ばざりき。今日野に在り、明日墟に投げらるる草にも、神は斯く衣すれば、況んや、爾等をや、小信の者よ。故に爾等何を食ひ、或は何を飲まん、と求むる勿れ、亦思ひ煩ふ勿れ、蓋此れ皆世の異邦人の求むる所なり、爾等の父は此等の者の爾等に必要なるを知る。惟神の國を求めよ、然らば此れ皆爾等に加はらん。

(ハ) 財を天に積み。(二二一三四)。

小き群よ、懼るる勿れ、蓋爾等の父は爾等に國を賜はんことを喜べり。爾等の所有を售りて、施濟を爲せ、己の爲に古びざる、盡きざる財を天に備へよ、彼處には盜賊



近づかず、蓋爾等は、蓋爾等の財の在る所には、爾等の心も在らん。

(三) 主を待ちて儼醒すべし。(三五一四〇)。

爾等の腰は帯せられ、爾等の燈は燃ゆべし。爾等は其主が婚筵より歸るを俟ちて、彼來りて門を叩く時直に彼の爲に啓かんとする人人に似るべし。主來りて其諸僕の儼醒するを見れば、彼等福なり、我誠に爾等に語ぐ、彼自ら腰に帯し、彼等を席坐せしめ、前みて彼等に供事せん。若し第二更に來り、又第三更に來りて、彼等の是くの如きを見れば、其諸僕福なり。

史音福聖

若し家主盜賊の何の時に來るを知らば、儼醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり。故に爾等も己を備へよ、蓋爾等が意はざる時に人の子來らん。

(ホ) 主を待ちて忠實なる可し。(四一四八)。

ペトル主に謂へり、主よ、此の譬は我等に言ふか、抑衆人に言ふか。主曰へり、孰か忠にして智なる家宰、其主が諸僕の上に立てて、時に臨ひて、彼等に定量の糧を與へしむる者たる、主の來る時彼が斯く行ふを見れば、其僕福なり。我誠に爾等に語ぐ、彼を立てて、其一切の所有を督らしめん。



然れども若し其僕心の中に、我が主の來るは遅からん、と曰ひて、僕婢を打ち、食ひ飲み且酔へば、乃俟たざる日、知らざる時に、其僕の主來りて、彼を斷ち、彼を不忠の者と同じき分に處せん。

其主の旨を知りて備へず、其旨に順ひて行はざりし僕は、多く扑たれん、知らずして罰に當る事を行ひし者は、少く扑たれん。凡そ多く與へられし者は、多く促されん、多く託せられし者は、更に多く索められん。

(二二二) 注意的の教訓 (イ) 主よりの火と劍。(四一五三)。

我火を地に投せん爲に來れり、此の火の已に燃ゆんことを、我望むこと幾何ぞ。我に受くべき洗禮あり、其成るに至るまで、我愛に迫ること如何ばかりぞ。

爾等は我和平を地に與へん爲に來れり、と意ふか、我爾等に謂ふ、然らず、即分離なり。蓋是より後、一家に五人分離して、三人は二人に、二人は三人に敵せん、父は子に、子は父に敵し、母は女に、女は母に敵し、姑は其婦に、婦は其姑に敵せん。

(ロ) 何ぞ此の時を別たざる。(五四一五七)。

又民に謂へり、爾等雲の西より起るを見れば、直に言ふ、雨ふらんと果して然り。風の

史音福聖





南より吹くを見れば言ふ暑くならんと果して然り。偽善者よ、爾等天地の面を別つ

を知りて、何ぞ此の時を別たざる。且爾等何ぞ己に依りて、宜しき所を判断せざる。

(一) 途中に在りて釋しを得よ。(五八―五九)。

爾を訟ふる者と偕に有司に往く時途中に在りて彼より釋を得んことを勉めよ、恐らくは彼爾を曳きて裁判官に至り、裁判官爾を下吏に付し、下吏は爾を獄に下さん、我爾に語ぐ、爾毫釐だに償はずば、彼より出づるを得ず。

(一二三) 悔改の教訓 (イ) ビラトが其血を祭物に雜へしガリレヤ人

の事の報知。(一―五三)。

其時數人來りて、ビラトが其血を其祭物に雜へしガリレヤ人の事を主イエイスに告げたり。彼は之に答へて曰へり、爾等此のガリレヤ人は斯く苦を受けし故に悉くのカリレヤ人より多く罪ありしと意ふか。我爾等に語ぐ、然らず、乃爾等若し悔改せずば、皆是くの如く亡びん。或は彼のシロアムの塔倒れて殺されし十八人は悉くのイエエルサリムに居る者より多く罪を負ひたりと意ふか。我爾等に語ぐ、然らず、乃爾等悔改せずば、皆同じく

聖福音史

亡びん。

(ロ) 實を結ばざる無花果樹よりの教訓。(一六―一九)。

又譬を設けて曰へり、或人其葡萄園に植えたる無花果樹ありしに、來りて、之に果を求むれども得ざりき。遂に園丁に謂へり、視よ、我三年來りて、此の無花果樹に果を求むれども得ず、之を斫れ、何ぞ徒に地を塞ぐ。園丁彼に對へて曰く、主よ、今年も之を容して、我が其周圍を掘りて、肥料を置くを待て、或は果を結ばん否すば、後に之を斫らん。

(一二四) 安息日に、偪みて伸ぶる能はざる婦を愈さる。(一〇―一七)。

安息日に主は一の會堂に在りて教を宣べたり。爰に十八年病の鬼を患ふる婦あり、偪みて、少しも伸ぶ能はざりき。主イエイス之を見て、呼びて之に謂へり、婦よ、爾は其の病より釋かれたり。乃手を彼に按せれば、彼直に伸びて、神を讚榮せり。會堂の宰主イエイスが安息日に醫を施ししを愠りて、民に謂へり、工作を爲すべし。日は六日あり、其中に來りて醫されよ、安息の日に於てせざれ。主彼に答へて曰へり、偽善者よ、爾等各安息日に於て其牛或は驢を槽より解き、之を

聖福音史



牽きて飲はざるか況やアウラムの女なる此の婦十八年サタナに縛られたる者の結を安息の日に於て解くべからざりしか。彼が之を言ふ時彼に敵する者は皆愧ぢ衆民は彼が凡の光明なる行事を喜べり。

(二二五) 芥種の譬 (一八―三ノ)。

彼曰へり神の國は何に似たるか我之を何に譬へん。是れ芥種人取りて其園に播きたる者の如し乃長じて大なる樹となり天空の鳥其枝に棲り。又曰へり神の國を何に譬へん。是れ酵の如し婦之を取りて三斗の麪の中に納れしに悉く發酵するに至れり。

(二二六) 救はるる者寡きかとの問に答へらる。 (三二―三〇ノ)。

主イエス諸の邑及び村を経て教を宣べイエルサリムに向ひて行けり。或彼に謂へり主よ救はるる者寡きか。主イエス彼等に謂へり力を竭くして窄き門より入れ蓋我爾等に語く多くの者は入るを求めて得ざらん。家主起きて門を閉ぢて後爾等外に立ちて門を叩きて曰はん主よ主よ我等の爲に啓け彼爾等に答へて曰はん我爾等が笑れよりするを識らず。其時爾等曰はん我爾等の前に食

飲し爾亦我等の嚮に教へたり。然れども彼曰はん我爾等に語く我爾等が笑れよりするを識らず凡そ不義を行ふ者は我より離れよ。時に爾等アウラム、イサアク、イアコフ、及び諸預言者が神の國に在り己が外に逐はるを見て彼處に哭き切齒せん。東より西より北より南より人來りて神の國に席坐せん。祝よ後なる者の先となり先なる者の後となることあらん。

(二二七)

イロド爾を殺さんと欲す此を離れよと言ふに答へらる。 (三二―三五ノ)。

當日或フアリセイ等就きて彼に謂へり出でて此を離れよ蓋イロド爾を殺さんと欲す。彼は之に謂へり往きて彼の狐に告げよ祝よ我今日及び明日魔鬼を逐ひ出だし醫を施し第三日に終らん。然れども今日明日及び次の日に我行くべし蓋し預言者のイエルサリムの外に亡ぶるは有らざるなり。

イエルサリムよイエルサリムよ預言者を殺し爾に遣されし者を石にて撃つ者よ、我幾次か母鶏が其雛を翼の下に集むる如く爾の諸子を集めんことを欲したれども爾等は欲せざりき。祝よ爾等の家は虚しくして爾等に遣されん。



我爾等に語り、今より後主の名に因りて来る者は祝福せらるると云ふ時に至るまで、爾等我を見ざらん。

(二二八)「ファリセイ」人の家に於て食せらる。(イ) 此處にて水腫病者を醫さる。(ルカ一四)。

主イエス安息日に一の宰なる「ファリセイ」の家に入りて、餅を食ふことありしに、人彼に窺へり。爰に水腫病を疾める人の彼の前に立てるあり。主イエス律法師及び「ファリセイ」等に問ひて曰へり、安息日に醫を施すは宜しきか。彼等默然たり。其時主は其人に觸れて、之を醫して去らしめたり。又彼等に謂へり、爾等の中誰にか鱧或は牛の井に陥ることあらんに、安息の日にも直に之を曳き出ださざらんか。彼等之に對ふる能はざりき。

(ロ) 筵席の席順の教訓。(ルカ一四)。

招かれたる者の首座を擇べるを見て、壁を設けて彼等に謂へり、爾人より、婚筵に招かれん時、首座に坐する勿れ、恐らくは爾より尊き者の招かるありて、爾と彼とを招ぎし者來りて、爾に謂はん、斯の人に座を譲れど、其時爾羞ぢて、末座に就かん。乃

聖福音史

招かれん時、往きて末座に坐せ、爾を招ぎし者來らん時、爾に、友よ、上座に進めと言はん爲なり、其時爾同席者の前に於て榮あらん。

蓋凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら卑くする者は高くせられん。

(ハ) 午餐に招く可き者の教訓。(ルカ一四)。

又彼を招ぎし者に謂へり、爾午餐或は晚餐を設くる時、爾の朋友をも、兄弟をも、親戚をも富める鄰をも、招ぐ勿れ、恐らくは彼等も亦爾を招きて、爾報を受けん。乃筵を設くる時、貧乏、廢疾、跛者、替者を招げ、然らば彼等が爾に報ゆる能はざるに因りて、爾福なり、義者の復活の時に爾報を得んとすればなり。

(二三〇)(ニ) 大なる晚餐の壁。(ルカ一四)。

彼と偕に席坐する一人、此を開きて彼に謂へり、神の國に於て餅を食はん者は福なり。彼は之に謂へり、或人大なる晚餐を設けて、多くの者を招ぎたり。晚餐の時に及び、其僕を遣して、招かれたる者に謂へり、來れ、蓋一切已に備はれり。彼等皆同じく辭したり。第一の者曰へり、我田地を買ひたり、往きて之を見んことを要す、請ふ、我が辭するを允せ。他の者曰へり、我牛五耦を買ひたり、之を試ん爲に



往く請ふ我が辭するを允せ。又他の者曰へり我妻を娶りたり是の故に来る能はず。

其僕歸りて之を主に告げたれば家主怒りて其僕に謂へり速に邑の衝と巷とに出でて貧乏癯疾跛者替者を此に引き來れ。僕曰へり主よ爾の命せし如く行ひたれども尙餘れる座あり。主は僕に謂へり道路及び藩籬の間に出入らんことを説得して我が家に盈たしめよ。蓋我爾等に語ぐ彼の招かれたる人は一も我が晩餐を嘗めざらん。蓋召されたる者は多けれども選ばれたる者は少し。

(二三一) 途上の教訓。「イ」肉親を離れて十字架を任ふ可き事。  
(二五―一四七)

衆くの民主と偕に行けるに彼は顧みて之に謂へり人若し我に來りて其父母妻子兄弟姉妹又己の生命をも惜まずば我が門徒と爲るを得ず。己の十字架を任ひて我に従はざる者も亦我が門徒と爲るを得ず。

(二三三)「ロ」建塔・戦争・鹽の譬。(二八一―三四ノ)。  
蓋爾等の中孰か塔を建てんと欲して先づ坐して其資金の之を成すに足れるかを

計らざらん。恐らくは其基を置き終ること能はずは見る者皆彼を晒ひて曰はん。此の人建て始めて終ること能はざりきと。或は何れの王か出でて他の王と戦はん。先坐して一萬を以て夫の二萬を率ひて來り攻むる者に敵するを得るかを籌らざらん。然らずば敵の尙遠く在る時彼使を遣して和を請はん。是くの如く爾等の中凡そ其有てる所を捨てざる者は我が門徒と爲るを得ず。

(二三三) 罪人に對する神の仁慈の譬。「イ」亡はれし羊の事。「ロ」失はれし金錢の事。(一―一〇五ノ)。

鹽は善き物なり然れども鹽若し其味を失はば何を以て之を鹹くせん地にも肥料にも宜しからず惟之を外に棄つ。耳ありて聴くを得る者は聴くべし。

稅吏及び罪人等は主イエスに聽かん爲に皆彼に近づけり。「フアリヒイ」等と學士等と之を怨みて曰へり彼は罪人等を納れて之と共に食す。彼此の譬を設けて彼等に謂へり。



者を獲るに至るまで之を尋ねざらんや之を獲て喜びて己の肩に任ひ家に歸りて其友及び隣を呼び集めて彼等に謂はん我と共に喜べ蓋我は亡はれし羊を獲たりと。

我爾等に語く是の如く天には一の悔い改むる罪人の爲の喜は悔改を要せざる十九の義人の爲の喜に勝らん。

或は何の婦か金銭十枚ありて其一枚を失はば燈を燃し室を掃ひ獲るに至るまで勤めて尋ねざらんや之を獲て其友及び隣を呼び集めて曰はん我と共に喜べ蓋我は失ひし金銭を獲たりと。

聖福音史

我爾等に語く是の如く神の使等の前には一の悔い改むる罪人の爲に喜あり。

(一三四) 譬の續き、「ハ」放蕩なる子の事。(ルカ一三二)。

又曰へり或人に二の子あり其次子父に謂へり父よ我が得べき産業の分を我に與へよ父其産業を彼等に分てり。幾日も經ざるに次子は其得たる者を盡く集めて遠き地に旅行し彼處に放蕩に生活して其産業を浪費せり。盡く耗ししに及びて其地に大なる饑饉起り彼始めて乏しきを覺えたり。乃往き



聖福音史

て其地の住民の一に身を寄せたれば其人彼を田に遣して豕を牧はしめたり。彼は豕の食ふ豆莢を以て其腹を充たさんと欲したれども彼に與ふる者なかりき。遂に自ら省みて曰へり我が父には幾何かの傭人の糧に餘れるあるに我は飢えて亡ぶ。起ちて我が父に往きて之に謂はん父よ我天及び爾の前に罪を獲たり既に爾の子と稱へらるるに堪へず我を傭人の一の如く爲せど。

乃起ちて其父に往けり。尙遠く在りし時其父彼を見て憫み趨り前みて其頸を抱きて彼に接吻せり。子は之に謂へり父よ我天及び爾の前に罪を獲たり既に爾の子と稱へらるるに堪へず。

然れども父は其諸僕に謂へり最も美しき衣を出だして彼に衣せよ指環を其手に履を其足に施せ且肥えたる積を牽きて之を幸れ我等食ひ樂しまん。蓋此の子は死して復生き失はれて又得られたり。是に於て彼等樂しめり。

適其長子田に在りしが歸りて家に近づける時樂と舞とを聞きたれば一の僕を呼びて是れ何事ぞと問ひしに彼曰へり爾の弟來りしなり爾の父は其恙なくして彼を得たるに因りて肥えたる積を幸りたり。



長子怒りて入るを欲せざりき。其父出でて彼に勸めしに、彼父に答へて曰へり、視よ、我多年爾に事へて、未だ嘗て爾の命に違はざれども、爾未だ嘗て小山羊を我に與へて、我を友と共に樂しましめざりき。然るに此の爾の子、妓と共に爾の産業を耗しし者の來りし時は、爾彼の爲に肥えたる積を宰れり。父彼に謂へり、子よ、爾は常に我と借に在り、我に屬する者は皆爾に屬す。惟此の爾の弟は死して復生さ、失はれて又得られたるが故に、我等喜び樂しむべきなり。

(二三五) 不正なる管理者。譬其教訓。(一カ一八六)

主イエスマ又其門徒に謂へり、或富める人に管理者ありて、其主の産業を耗すと彼に訴へられたり。主彼を呼びて曰へり、我が爾に付きて聞く事は斯れ何ぞや、管理の報告を出だせ、蓋爾は仍管理するを得ず、管理者意に謂へり、我が主我より管理の職を奪ふ我何を爲さんか、鋤くには力なく、乞には耻づ。我爲すべき事を知る、我が管理の職を解かれん時、人人に我を其家に受けしめん爲なりと。乃其主の負債者を一一呼びて、其第一の者に謂へり、爾我が主に負ふこと幾何ぞ。曰へり、油百斗なり。彼に謂へり、爾の券を取り、亟に坐して、五十と書け。次に他の

者に謂へり、爾負ふこと幾何ぞ。曰へり、麥百解なり。彼に謂ふ、爾の券を取りて、八十と書け。

主は不義なる管理者を譽めたり、其爲しし事の巧なるが故なり、蓋此の世の諸子は、其族類に於て、光の諸子に較ぶれば更に巧なり。

我も爾等に語く、不義の財を以て己の爲に友を求めよ、爾等の既からん時、彼等が爾等を永遠の宅に接けん爲なり。少き事に於て忠なる者は、多き事に於ても忠なり、少き事に於て不義なる者は、多き事に於ても不義なり。

故に爾等若し不義の財に於て忠ならずば、誰か爾等に眞の財を託せん。若し他に屬する者に忠ならずば、誰か爾等に屬する者を爾等に與へん。

僕は二人の主に事ふる能はず、蓋或は此を惡み、彼を愛し、或は此を重んじ、彼を輕んせん。爾等は神と財とに兼ね事ふる能はず。

利を好む、フリセイ等も悉く之を聞き、而して彼を晒へり。彼は之に謂へり、爾等人の前に己を義と爲す、然れども神は爾等の心を知れり、蓋人人の中に高しとする事は、神の前に惡むべきなり。



律法と預言者とはイオアンに至りて止れり、其時より神の國は福音せられ、人人力を用ゐて之に進む。然れども天地の廢するは、律法の一畫の闕くるに較ぶれば、更に易し。  
凡そ其妻を出だして、他に娶る者は、姦淫を行ふなり、夫に出だされたる婦を娶る者も、亦姦淫を行ふなり。

(二三六) 富者とラザリの譬 (ルカ一三六)。

富める人あり、紫袍と細布とを衣、日日奢り樂めり。亦貧しき者ラザリと名づくるあり、全身塵物を病みて、富める人の門に臥し、其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其塵物を舐れり。  
貧しき者死して、天使等に因りて、アウラアムの懷に送られ、富める者も死して葬られたり。地獄に苦の中に在りて、彼其目を舉げて、遙にアウラアム及び其懷に在るラザリを見たり、乃呼びて曰へり、父アウラアムよ、我を憐み、ラザリを遣して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の饑の中に苦しむ。  
然れどもアウラアム曰へり、子よ、爾は存命の時、爾の善を受け、ラザリは同じく其惡

聖 福 音 史

を受けたりしを憶へ、今彼は此に慰み、爾は苦しむ。第此のみならず、爾等と我等との間に巨なる淵は限れり、故に此より爾等に涉らんと欲する者は、能はず、彼よりも我等に涉るを得ず。

彼曰へり、然らば父よ、請ふ、ラザリを我が父の家に遣せ、蓋我に五人の兄弟あり、彼をして其前に證を爲さしめよ、彼等も此の苦の處に來らざらん爲なり。アウラアム之に謂ふ、彼等にモイセイ及び預言者あり、之に聽くべし。彼曰へり、否、父アウラアムよ、然れども、若し死の中より、彼等に往く者あらば、彼等悔改せん。アウラアム曰へり、若しモイセイ及び預言者に聽かずば、縱ひ死より復活する者ありとも言せざらん。

(二三七) 門徒に對する諸教訓 (ルカ一三七)。

主イエスキリヤス又其門徒に謂へり、誘惑は來らざるを得ず、惟之を來す者は禍なる哉。人此の小子の一人を罪に誘はんよりは、擧磨石を其頸に懸けられて、海に投せられん。  
己を慎め、若し爾の兄弟、爾に罪を獲ば、彼を戒めよ、若し悔いば、彼に免せ。若し一日



に七次爾に罪を獲、亦一日に七次自ら省みて、我悔ゆと曰はば、彼に免せ。  
使徒等主に謂へり、我等に信を益せ。主曰へり、若し爾等に芥種の如き信あらば此

の粟に抜けて海に植われと言ふとも、爾等に聴かん。  
孰か爾等の中に耕し、或は畜を牧ふ僕あらんに、其田より歸りて彼之に直に來りて  
席坐せよと云ふ者あらんや、豈彼に曰はずや、我が晚餐を備へ、我の食飲する間帯を  
束ねて我に事へ、後爾食飲せよと。彼は其僕が命せられしことを行ひし爲に、之に  
謝せんか、我之を意はず。是くの如く爾等も、凡そ爾等に命せられし事を行ひし時  
には謂へ、我等は無益の僕なり行ふべき事を行ひしのみと。

(二三八) 十人の癩病者を醫さる。(一〇一七九)。

主イエスイエエルサレムに往くに、サマリヤとガサレヤとの間を經たり。或る村  
に入る時、癩病者十人彼を迎へ、遠く立ちて聲を揚げて曰へり、イエス夫子よ、我等  
を憐れ。主イエス彼等を視て曰へり、往きて己を司祭等に示せ。彼等往く時、潔  
まれり。其中一人己の愈されしを見て、返りて大聲を以て神を讚榮し、主イエス  
の足下に俯伏して感謝せり、彼はサマリヤの人なり。主イエス曰へり、潔まりし

(二三九) 神國の來臨の事。(一〇一七九)。

者は十人に非ずや、其九は何處に在るか、此の異族人の外如何を返りて光榮を神に  
歸せざる。又彼に謂へり、起ちて往け、爾の信は爾を救へり。  
主は「フリセイ等に、神の國は何の時に来ると問はれて、彼等に答へて曰へり、神の國  
は顯に來らず、人人視よ、此處に在り、或は視よ、彼處に在り」と曰はざらん。蓋視よ、神  
の國は爾等の裏に在り。  
又門徒に謂へり、爾等人の子の一日を見んと欲する時、至らん而して之を見ざらん。  
人人爾等に視よ、此處に在り、或は視よ、彼處に在り」と謂はん、往く勿れ、從ふ勿れ。蓋  
電が天の此の涯より閃きて、天の彼の涯にまで光るが如く、人の子も其日に是くの  
如くならん。

然れども彼は先づ多く苦を受けて、此の世に棄てらる可し。  
ノイの日に在りし如く、人の子の日にも是くの如くならん。人人食ひ飲み、娶り嫁  
ぎて、ノイの方舟に入る日に至り、洪水來りて、盡く彼等を滅せり。同じく又ロドの  
日に在りしが如し、人人食ひ飲み、買ひ賣り、樹を構造せり、然れどもロドがソドムよ



り出でし日天より火と硫黄と雨りて盡く彼等を滅せり。

人の子の顯るる日にも亦是くの如くならん。

當日屋の上に在らん者は其器家に在らば之を取らん爲に下る可からず田に在ら

ん者も同じく後へ歸る可からず。ロトの妻を記憶せよ。己の生命を救はんと求

ひる者は之を喪はんと之を喪ふ者は之を存せん。

我爾等に語り其夜二人榻を同じくせん一人は取られ一人は遣されん。二人の

婦共に磨を旋かんに一人は取られ一人は遣されん。二人田に在らん一人は取

られ一人は遣されん。

聖 福 音 史

彼等問ひて曰く主よ何處にか之れ有る。彼は之に謂へり屍の在る所には、鷲集ら

ん。

(二四〇) 不義なる裁判官の譬 (ルカ一八)

主イエス又譬を設けて彼等に恒に祈禱して倦むべからざることを言へり曰く

或邑に裁判官あり神を畏れず人に耻ぢず。其邑に一の婆あり彼に來りて曰へり

我を我が仇より援けよ。彼久しく肯はざりしが其後自ら思ひて曰へり我神を畏

れず人に耻ぢずと雖此の婆我を煩はすに因りて我之を援けん其恒に來りて我に

聴しくせざらん爲なり。

主曰へり不義なる裁判官の言ふ所を聴け。神は晝夜彼に籲ふ所の其選びたる者

を久しく忍ぶども終に援けざらんや。我爾等に語り速に彼等を援けん。然れど

も人の子來りて信を地に見んや。

(二四一) 「フリセイ」と税吏との譬 (ルカ一四)

又己を義なりと信じて他人を藐する者に此の譬を語れり。二人所禱せん爲に殿に

登れり。一は「フリセイ」一は税吏なり。「フリセイ」立ちて己の裏に斯く禱れり神よ我

爾に感謝す我他人の殘酷不義姦淫なる如く或は此の税吏の如くならざるを以て

なり。我一七日に二次齋し凡を得る所の十分の一を獻ぐ。税吏は遠く立ちて

敢て目を擧げて天を仰がず乃磨を打ちて曰へり神よ我罪人を憐め。

(二四二) 主張幕節に當りてイウデヤに往く (イオアン七ノ二一〇)

イウデヤ人の節筵なる張幕節近づけり。主イエスの兄弟彼に謂へり此を去り

て

て

て

て

て

て

て

て



てイウデヤに往け爾の門徒も爾が行ふ處の事を見ん爲なり。蓋人自ら顯れんと欲して隠に事を行ふ者あらず。若し爾此等の事を行はば己を世に顯せ。蓋其兄弟も亦彼を信せざりき。

主イエスス彼等に謂ふ、我の時未だ至らず爾等の時は恆に備はれり。世は爾等を惡む能はず、然れども我を惡む、我其行ふ所の惡しきを證すればなり。爾等は此の節筵に上れ、我は未だ此の節筵に上らず、蓋我の時未だ盈たざるなり。

之を彼等に言ひて、ガリレヤに留れり。然れども其兄弟の節筵に上りし後、彼も亦上れり、昭然ならずして乃隠然なるが如し。  
主イエススガリレヤを出でて、イオサダンの外よりイウデヤの境に來れり。

(一四三) 張幕の節筵の半に主イエスス聖殿に上る。(イオアン三六)

節筵の時、イウデヤ人主を尋ねて曰へり、彼は安に在るか。民の中に彼の事に於て多くの論ありき、或は善なりと曰ひ、或は否、乃民を惑はすと曰へり。然れどもイウデヤ人を懼るるに由りて、顯に彼の事を言ふ者なかりき。

節筵已に半にして、主イエスス殿に上りて教へたり。イウデヤ人奇として曰へり、

此の人學ばざるに如何にして書を識れるか。主イエスス彼に答へて曰へり、我が教は我に屬するに非ず、乃我を遣しし者に屬するなり。人若し彼の旨を行はんと欲せば、斯の教の神よりするか、或は我が己に由りて言ふかを知らん。己に由りて言ふ者は、己の榮を求む、之を遣しし者の榮を求むる者は、斯れ眞なる者にして、其衷に不義なし。

聖 福 音 史

モイセイ、豈律法を爾等に與へしに非ずや、而して爾等の中に律法を守る者なし。

爾等胡爲れぞ我を殺さんと謀る。民答へて曰へり、爾魔鬼に憑らる、誰か爾を殺さんと謀る。主イエスス答へて彼等に謂へり、我一の事を行ひしに、爾等皆之を奇む。

モイセイ、爾等に割禮を授けたり、此れモイセイに由るに非ずして、先祖に由ると雖、

而して爾等安息日に於て人に割禮を行ふ。モイセイの律法の壞られざらん爲に、

人安息日に割禮を受くるに、爾等我が安息日に於て人の全身を愈ししに因りて、我に怒るか。外貌に依りて審する勿れ、乃義の審を以て審せよ。

是に於て、イエルサラムの或人、人曰へり、此れ彼等が殺さんと謀る者に非ずや。視よ、彼明に語る、而して彼等は之に言ふ所なし、豈有司等は彼を賊にハリストスなり。



と承け認めしか。然れども我等は斯の人の奚れよりするを知る惟ハリストス來らん時は其奚れよりするを知る者なからん。

厥時主イエス殿に於て教へて呼びて曰へり爾等我をも知る亦我の奚れよりするを知る然れども我は己に由りて來りしに非ず乃我を遣しし異なる者あり爾等の知らざる者なり。我は彼を知る蓋我は彼よりし彼は我を遣せり。

是に於て彼等主イエスを執へんと謀りたれども手を彼に措く者なかりき彼の時未だ至らざればなり。民の中多くの者彼を信じて曰へり主ハリストス來らん時は豈斯の人の行ひしより多くの休徴を行はんや。

「フアリセイ等は民が主の事を斯く論ずるを聞けり乃フアリセイ等及び司祭諸長は彼を執へん爲に下吏を遣せり。

主イエス曰へり我尙暫く爾等と偕に在りて我を遣しし者に往かん。爾等我を尋ねて遇はざらん且我が在る所には爾等來る能はず。

イウデヤ人相語りて曰へり彼は何に往きて我等をして彼に遇はざらしめんか豈彼はエリシヤ民の中に散じ處る者に往きてエリシヤ人を救へんと欲するか。

(二四四)

主イエス節筵の末日に聖殿に上る。(イサア八七)

節筵の末の大なる日に主イエス立ちて呼びて曰へり人渴かば我に來りて飲め我を信する者は聖書に云へる如く其腹より活ける水の川は流れん。之を言ひしは彼を信する者の受けんとする神を指せるなり蓋聖神未だ降らざりき主イエス未だ榮を受けざればなり。

民の中多くの者此の言を聞きて曰へり斯の人は誠に預言者なり。他の者は曰へり斯れ主ハリストスなり又他の者は曰へり豈ガリレヤよりハリストス來らんや。聖書にはハリストスはダワイドの裔より且ダワイドの居りし處なるワイレムより來ると云へるに非ずや。是に於て民の中に彼の事に縁りて紛論起りたり。其中

の或る者彼を執へんと欲したれども手を彼に措く者なかりき。下吏は司祭諸長及びフアリセイ等に返りたれば彼等之に謂へり爾等何ぞ彼を曳き來らざる。下吏答へて曰へり人未だ曾て斯の人の如く言ひしことあらず。フアリセイ等は彼等に答へて曰へり豈爾等も惑はされしか。有司或はフアリセイ等の中には彼を信せし者あるか。惟此の民律法を識らざる者は阻はるなり。



夜主イエスに來りしニコデム、彼等の中の一人なる者は、彼等に謂ふ、豈我が律法は、未だ人の詛を聽かず、其行ふ所を知らざる先は、人を罪するか。彼等答へて曰へり、爾も亦ガリレヤよりするか、尋ねて見よ、預言者はガリレヤより起るなし。是に於て各其家に歸れり。主イエス橄欖山に往けり。

(二四五) 節筵の末日の朝に、主悔改せる罪人を赦す。(イオア一八)。

聖朝早く復殿に來れるに、民皆彼に就き、彼坐して之を教へたり。福爰に學士等及び、フリセイ等は、淫に於て執へられたる婦を主に曳き來り、之を中立たてて、彼に謂ふ、師よ、此の婦は今淫に於て執へられたり。モイセイは律法に我等に是くの若き者を、石を以て撃ち殺すを命じたり、爾は何を言はんか。彼等が之を言ひしは、主イエスを試みて、彼を詛ふる由を得ん爲なり。主イエス顧みずして、躬を鞠めて、指を以て地に畫けり。彼等問ひて、已まされば、主イエス起きて、彼等に謂へり、爾等の中罪なき者は、先づ石を以て之に投げよ。復躬を鞠めて、地に畫けり。彼等之を聞きて、其良心に責められ、長なる者より始めて、末なる者に至るまで、一



罪婦の赦免 (律五十四百第)



出で往き、主イエス獨遣り、及び婦中に立てり。

主イエス起きて、人無く、唯婦のみ在るを見て、之に謂へり、婦よ、爾を証ふる者安に在るか、誰も爾を罪せざりしか。彼答へて曰へり、主よ、誰もなし。主イエス之に謂へり、我も爾を罪せず、往け、是より罪を犯す勿れ。

(一四六) 衆民に對する主の教訓、我は世の光なり。(一ヨハ二〇八)

聖 其後、主イエス復衆に語りて曰へり、我は世の光なり、我に従ふ者は暗を行かず、乃生命の光を獲ん。

福音 フリセイ等彼に謂へり、爾自ら己の事を證し、爾の證は眞ならず。主イエス彼等に答へて曰へり、我自ら己の事を證すとも、我が證は眞なり、蓋我は何れより來り、何れに往くを知る、爾等は我が何れより來り、何れに往くを知らず。爾等は肉に循ひ

て審す、我は何人をも審せず。若し我審せば、我が審は眞なり、蓋我獨在るに非ず、乃我及び我を遣しし父在るなり。爾等の律法にも録せるあり、二人の證は眞なりと、我は己の事を證す、我を遣しし父も亦私の事を證するなり。彼等曰へり、爾の父は安に在るか。主イエス答へて曰へり、爾等我をも我が父をも證らす、若し爾等我



を識らば、我が父をも識るならん。此等の言は主イエス殿に在りて教へし時、  
賽所に於て之を言へり、彼を執ふる者なかりき、彼の時未だ至らざればなり。

(二四七) 同上、ロ「主己の死の事を告ぐ。(一〇一―三二八)。

主イエス復彼等に謂へり、我は往く、爾等我を尋ねん、而して爾等の罪の中に死せ  
ん。我が往く所には爾等來る能はず。

イウデヤ人曰へり、豈彼は己を殺さんか、蓋云ふ、我が往く所には爾等來る能はずと、  
主イエス彼等に謂へり、爾等は下に屬し、我は上に屬す、爾等は斯の世に屬し、我は  
斯の世に屬せず。故に我爾等に謂へり、爾等の罪の中に死なんと、蓋若し爾等は是  
れ我なりと信せずば、乃爾等の罪の中に死なん。

彼等曰へり、爾は誰たる。主イエス彼等に謂へり、我は始より爾等に言ふ所の如  
き者なり。我には爾等の事に於て語り、且審すること多くあり、然れども我を遣し  
し者は眞なり、我彼より聞きし事を以て世に語り、彼等は其父を指して言ひしを  
悟らざりき。

故に主イエス彼等に謂へり、爾等人の子を擧ぐる後、是れ我なりと知り、且我が己  
に由りて何事をも行はず、乃我が父の我に教へし如く之を語るを知らん。我を遣  
しし者は我と偕にす、父は我を遣して獨在らしめず、蓋我常に其悦ぶ所を行ふなり。  
主が此を語れる時、多くの者我を信せり。時に主イエス彼を信せしイウデヤ人  
に謂へり、爾等若し常に我が言に居らば、誠に我が門徒たるなり。爾等眞實を識ら  
ん、眞實は爾等を自由の者と爲さん。

(二四八) 同上、ハ「罪の奴隷の事。(一〇一―五〇八)。

彼等主に答へて曰へり、我等はアウラムの裔なり、未だ曾て人の奴隷と爲らざり  
き、爾何ぞ自由の者と爲らんと言ふ。主イエス彼等に答へて曰へり、我誠に誠に  
爾等に語り、凡そ罪を行ふ者は罪の奴隷なり。然れども奴隷は永く家に居らず、子  
は永く居るなり。

故に若し子、爾等を自由たらしめば、爾等は誠に自由の者と爲らん。我爾等がアウ  
ラムの裔たるを知る、然れども爾等我を殺さんと謀る、蓋我が言は爾等の衷に容  
れられず。我は我が父に於て見し事を言ひ、爾等は爾等の父に於て見し事を行ふ。





聖 福 音 史

彼に答へて曰へり、我等の父はアウラムなり。主イエス彼等に謂ふ、爾等若しアウラムの子ならば、アウラムの事を行ふならん。然るに爾等今我即神より聞きたる眞實を爾等に語りし人を殺さんと謀る、アウラムは之を行はざりき。爾等は爾等の父の事を行ふ。

主イエス此に答へて謂へり、我等は落に由りて生れしに非ず、我等に一の父あり、即神なり。主イエス彼等に謂へり、若し神爾等の父ならば、爾等我を愛するならん、我神より出でて來りしに因る、蓋我已に由りて來りしに非ず、乃彼は我を遣せり。爾等何ぞ我が語れることを悟らざる、我が言を聴く能はざる故なり。爾等は爾等の父惡魔に屬し、爾等の父の怒を行はんと欲す。彼は始より殺人者にして眞實に立たざりき、眞實其衷に在らざればなり。彼は証を言ふ時己に屬する者を言ふ、蓋彼は証者且証の父なり。然れども我眞實を言ふに困りて、爾等我を信せず。爾等の中誰か罪を以て我を責めん、若し我眞實を言はば、爾等何ぞ我を信せざる。神に屬する者は神の言を聴く。爾等の聴かざるは、神に屬せざる故なり。

イウヂヤ人彼に答へて曰へり、我等爾がサマリヤ人にして、且魔鬼に憑らるる者なり。



聖 福 音 史

りと言ふは宜ならずや。主イエス答へて曰へり、我は魔鬼に憑らるるに非ず、乃我は我が父を尊び、爾等は我を辱む。然れども我は己の榮を求めず、一の求むる者、且審判する者あるなり。

(二四九) 同上、主己の永在を説く、イウヂヤ人此れが爲めに激す。  
(一〇一、一五九、一八〇)。

我誠に誠に爾等に語ぐ、人若し我が言を守らば、世に死を見ざらん。イウヂヤ人彼に謂へり、今我等は爾が魔鬼に憑らるるを知れり。アウラム死し、諸預言者も亦然り、而して爾言ふ、人若し我が言を守らば、世に死を言めざらんと。爾豈我が父アウラム、己に死せし者より大なるか、諸預言者も亦死せり、爾は己を誰と爲す。

主イエス答へて曰へり、若し我已を榮せば、我が榮は無に歸す。我を榮する者は我が父、即爾等が我等の神と言ふ所の者なり。爾等は彼を識らず、我は彼を識る若し我彼を識らずと言はば、爾等の如き証者ど爲らん。然かれども我は彼を識り、且彼の言を守る。爾等の父アウラムは、甚我の日を見んことを望めり、彼且之を見



而して喜べり。

イウデヤ人彼に謂へり、爾年尙五十に及ばざるに、アウラアムを見しか。主イス  
ス彼等に謂へり、我誠に誠に爾等に語ぐ、アウラアムの未だ有らざる先に我在るな  
り。  
是に於て彼等石を取りて、彼を撃たんとせり、然れども主イスス隠れて、其中を過  
ぎ、殿を出て去れり。

(二五〇) 生れながらの替者を啓さる。(イオアセン九)

主イスス行く時、生ながら替なる人を見たり。門徒彼に問ひて曰へり、夫子、斯の  
人の替にして生れしは、是れ孰か罪を獲たる彼か、抑其親か。主イスス答へて曰  
へり、彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃彼に於て神の作爲の顯れん爲なり。我尙查な  
る間、我を遣しし者の作爲を爲すべし、夜來る、其時は誰も爲す能はず。我世に在る  
時は、世の光なり。

之を言ひて、地に唾し、唾を以て泥を成し、其泥を替の目に塗りて、之に謂へり、往きて、  
シロアムの池に洗へ。(シロアム、譯すれば、遣されし者なり。彼往きて洗ひ、見るを

史音福聖

得て來れり。

(二五一) 此事の衆民の風説及び「フアッセイ」人の説明。(イオアセン九)

其隣の人及び先に彼が替なるを見し者曰へり、此れ坐して乞ひし者に非ずや。或  
曰へり、是は彼なり、或曰へり、彼に似たる者なり、彼は曰へり、是は我なり。彼等之に  
謂へり、爾の目は如何にして啓けたるか。彼答へて曰へり、主イススと名づくる  
人、泥を成して、我が目に塗りて、我に謂へり、シロアムの池に往きて、洗へと、我往きて、  
洗ひて見るを得たり。彼等曰へり、其人安に在るか。曰く我知らず。

此の替たりし者を「フアッセイ」等に携へ至る。主イススが泥を成して、其目を啓き  
し日は、安息日なり。「フアッセイ」等も亦其如何に見るを得たるを問ひたれば、答へて  
曰へり、泥を我の目に置き、我洗ひて見るを得たり。「フアッセイ」等の中の或者曰へり、  
斯の人は神よりするに非ず、安息日を守らざればなり。他の者曰へり、罪ある人は  
安んず、是くの如き奇蹟を行ふを得ん。是に於て彼等の中に紛論ありき。復替者に  
謂ふ、爾は彼の事に於て何を言はんか、蓋彼は爾の目を啓きたり。曰く、是れ預言者  
なり。



イウヂヤ人は其素替にして後に見るを得たるを信せずして此の見るを得たる者の二親を呼び至らしむるを待ちて之に問ひて曰へり此れ爾等の子爾等が替にして生れたりといふ者なるか今如何にして見るか 其親彼等に答へて曰へり此れ我が子なること又其替にして生れたることは我等之を知る然れども今如何にして見るか我等之を知らず或は誰か其目を啓きしを我等知らず 彼は年長せり彼に問ふべし自ら己の事を語らん 親の斯く言ひしはイウヂヤ人を懼れしに因りてなり蓋イウヂヤ人已に相謀りて若し人彼を主ハリストスと認めば會堂より驅けらるべしと定めたり 是の故に其親は彼は年長せり彼に問ふべしと曰へり 是に於て替たりし人を再呼びて之に問へり光榮を神に歸せよ我等は此の人の罪人たるを知る 彼答へて曰へり其罪人たりや否や我之を知らず唯一の事を知る 即我本替たりしに今は見る 又之に謂へり彼は何を爾に爲ししか如何にして爾の目を啓きし 答へて曰へり我既に爾に言へり而して爾等聴かざりき何を復聞かんと欲する豈爾等も彼の門徒と爲らんと欲するか 彼等之を語りて曰へり爾は其門徒我等はモイセイの門徒なり 我等は神がモイセイに語りしを知る然れ

せも斯の人の奚れよりするを知らず 其人答へて彼等に謂へり此は奇しき事なり爾等は彼の奚れよりするを知らず然るに彼は我が目を啓きたり 我等は神が罪人に聴かざるを知る然れども若し人神を敬ひ其旨を行はば斯の人に聴く 世の始より以來未だ人の生ながら替なる者の目を啓きしを聞かざりき 若し斯の人神よりせしに非ずば何事をも行ふを得ざりしならん 彼等之に答へて曰へり爾は全く罪の中に生れたり而して爾我等を教ふるか 遂に彼を外に逐ひ出だせり (一五二) 醫されし替者の表信 (一ナアン九ノ) (三五―四一) 主イイスは其替者を逐ひ出だししを聞きて彼に遇ひて曰へり爾神の子を信するか 彼答へて曰へり主よ是れ誰なるか我が彼を信せん爲なり 主イイス之に謂へり爾已に彼を見たり且爾と語る者は是なり 彼曰へり主よ我信す乃彼を拜せり 主イイス曰へり我審判の爲に斯の世に來れり見ざる者は見見る者は替と爲らん爲なり 彼と偕に在りしフリセイ等の中の或者之を聞きて彼に謂へり豈我等



も警なるか。主イエス彼等に謂へり爾等若し警ならば罪なからん然れども今爾等は我等見ると言ふに因りて爾等の罪尙存す。

(一五三) 善牧者の事の教訓 (イオアン二一〇)。

我誠に誠に爾等に語く羊の牢に入るに門よりせずして他の處より躍ゆる者は竊盗なり強盗なり。門より入る者は羊の牧者なり。門を守る者は彼の爲に啓き羊は其聲を聴く彼己の羊の名を呼びて之を引き出だす。己の羊を出だす時之に先だちて行き羊彼に従ふ其聲を識るが故なり。疎き者に従はず乃之より逃ぐ疎き者の聲を識らざるが故なり。

聖 福 音 史

主イエス此の譬を彼等に謂へり然れども彼等は其語りしことの何たるを悟らざりき。故に主イエス復彼等に謂へり我誠に誠に爾等に語く我は羊の門なり。凡そ我より先に來りし者は竊盗なり然れども羊は彼等に聴かさりき。我は門なり我に由りて入る者は救を得且入り且出でて草場を得ん。盗の來るは唯盗み殺し滅さん爲のみ。我の來りしは其生命を有ち且豊に之を有たん爲なり。我は善き牧者なり善き牧者は己の生命を羊の爲に捐つ。牧者なら

聖 福 音 史

ざる備者羊の己に屬せざる者は狼の來るを見て羊を棄てて逃ぐ狼は羊を奪ひ又之を散す。備者は逃ぐ其備者たるを以てなり羊を顧みず。我は善き牧者にして我に屬する者を識り我に屬する者も亦我を識る。父の我を識るが如く我も亦父を識る且我が生命を羊の爲に捐つ。

我に又他の羊此の牢に屬せざる者あり我は彼等をも引くべし彼等は我が聲を聴かん而して一の群一の牧者と爲らん。父の我を愛する所以は此れ蓋我は我が生命を捐つ復之を受けん爲なり。孰も之を我より奪ふなし乃我自ら之を捐つ。我に之を捐つる權あり復之を受くる權あり。我は此の賊を我が父より受けたり。此の言に縁りて復イウヂヤ人の間に紛論起れり。其中多くの者曰へり彼は魔鬼に憑られて狂ふなり何ぞ彼に聴く。他の者曰へり此れ魔鬼に憑らるる者の言に非ず豈魔鬼は替者の目を啓くを得んや。

(一五四) 主重修飾に臨むる。 (イオアン二一九)。

イエルサリムに重修飾あり時方に冬なり。主イエス殿に在りてソロモンの廊を歩めるにイウヂヤ人彼を環りて曰へり爾何時までか我等を疑惑せしむる若し



爾ハリストスならば明に我等に告げよ。主イエス彼等に答へて曰へり、我爾等に告げたり。而して爾等信せず、我が父の名に因りて行ふ事は、我が爲に證を作す。然れども爾等信せず、蓋爾等は我に屬する羊に非ず、我が爾等に言ひしが如し。我が羊は我の聲を聴く、我は彼等を識り、彼等は我に従ふ。我は彼等に永遠の生命を與ふ、彼等は世に滅びず、誰も彼等を我が手より奪はざらん。彼等を我に與へし、我が父は萬有より大なり、誰も我が父の手より彼等を奪ふ能はず。我と父とは一なり。

時にイウデヤ人復石を取りて、主を撃たんとせり。主イエス彼等に答へて曰へり、我は多くの善き事を我が父より爾等に示せり、其中何の事に由りて石を以て我を撃つか。イウデヤ人彼に答へて曰へり、我等は善き事の爲に石を以て爾を撃つに非ず、乃藝演の爲、爾が人として己を神と爲すが爲なり。

主イエス彼等に答へて曰へり、爾等の律法に録されしに非ずや、我曰へり、爾等は神なりと。若し神の言を奉せし者を神と名づけ、而して聖書廢する能はずば、爾等は父が成聖して世に遣しし者に、其我は神の子なりと云ひしに因りて、爾演すと曰

ふか。若し我我が父の事を行はずば、我を信する勿れ。若し之を行はば、我を信せずども、我が事を信せよ、父の我に在り、我も父に在るを知りて、信せん爲なり。是に於て復彼を執へんと謀りたれども、彼は其手を避けたり。

(一五五)

主イエス彼等の外に往き、彼處に居らる。

(イオアン一四二〇)。

主は復イエス彼等の外に、イオアンが先に洗を授けし處に往きて、彼處に居たり。

多くの者彼に來り、且曰へり、イオアンは何の休徵をも行はざりき、然れどもイオアンが彼を指して言ひし事は、皆眞なり、彼處に於て多くの者彼を信せり。

(二五六)

離婚の事の問は答へらる。

(マコ一九二一九)。

「アラセイ等就きて、主を試みて曰へり、人何の故を論せず、其妻を出だすは宜しきか、彼答へて曰へり、モイセイは爾等に何を命せしか。彼等曰へり、モイセイは離婚を書きて、之を出だすを許せり。主イエス彼等に答へて曰へり、彼は爾等の殘忍なるに因りて、爾等の爲に此の誠を書せり。

彼答へて曰へり、爾等元始に人を造りし者は、之を男女に造れりと讀まざりしか。又曰へり、是の故に人は其父母を離れ、其妻に着きて、二の者一體と爲らん。然らば



聖福音史

彼等は既に二人に非ず、乃一體なり、故に神の耦せし者は、人之を分つ可からず。彼等曰く、然らばモイセイが離書を與へて、之を出だすと命せしは何ぞや。主は之に謂ふ、我は既に前に謂ひたる如く、モイセイは爾等の殘忍なるに因りて、爾等に妻を出だすを容せり、然れども元始には斯くあらざりき。我爾等に語く、海の故に非ずして、其妻を出だし、他に娶る者は、姦淫を行ふなり、出だされたる婦を娶る者も、姦淫を行ふなり。

家に在りて其門徒彼に復此の事を問へり。彼は再び之に謂ふ、其妻を出だして他に娶る者は、妻に對して姦淫を行ふなり。妻も若し其夫を棄てて他に適かば、姦淫を行ふなり。

(二五七) 無妻の事の教訓 (マトフエイ一九)。

其門徒彼に謂ふ、若し人の其妻に於ける本分是くの如くば、棄妻らざらん。彼曰へり、此の言は、人皆納るるに非ず、乃賦へられたる者のみ。蓋母の胎より生れつきたる閨者あり、又人より閨せられたる閨者あり、又天國の爲に自ら閨せし閨者あり。之を納るることを能する者は納るべし。

聖福音史

(二五八) 幼児を祝福せらる。 (マトフエイ一九ノ一三―一五、マコ一〇)。

時に幼児を主イエスに携へ來りて、彼等に其手を按せて、購らんことを求むる者ありしに、門徒之を戒めたり。

然れども、主イエス之を見て、愠りて彼等に謂へり、幼児の我に就くを容せ、之に禁する勿れ、蓋神の國は是くの如き者に屬す。我誠に爾等に語く、幼児の如くに神の國を承けざる者は、之に入るを得ず。

乃彼等を抱き、手を其上に按せて、彼等に祝福して、彼處を去れり。

(二五九) 富める少年に一切を舍つる事を説かる。 (マトフエイ一九ノ一八―二七、マコ一)。

主が途に出づる時、富める或人少年趨り前みて、彼の前に跪きて問へり、善なる師よ、我永遠の生命を嗣がん爲に何を爲すべきか。主イエス彼に曰へり、爾は何ぞ我を善と稱ふる、獨神より外に善なる者なし。爾若し生命に入らんと欲せば、誠を守れ。彼曰く、何の誠ぞ。主イエス曰へり、殺す母れ淫する母れ、竊ひ母れ、妄證する母れ、爾の父母を敬へ、又爾の鄰を愛すること己の如くせよ。少き者彼に謂ふ、我幼



聖福福音史

より、皆之を守れり、尙足らざる者は何ぞや。  
 主イエスマス之に謂へり、爾完全ならんぞ欲せば、往きて爾の所有を售りて、貧者に施せ。然らば財を天に有たん且來りて我に従へ。少き者此の言を聞きて色沮み憂ひて去れり、大なる資産を有てる故なり。  
 主イエスマス其甚愛ひたるを見て、主は環視して、其門徒に謂ふ、富を有つ者の神の國に入るは難き哉。門徒其言に駭けり。主イエスマス復答へて、彼等に謂ふ、小子よ富を恃む者の神の國に入るは難き哉。駑駘が針の孔を穿るは、富める者が神の國に入るより易し。彼等甚驚きて互に言へり、然らば誰か能く救はれん。主イエスマス彼等に目を注ぎて曰く、此れ人には能せざる所なれども、神には然らず。善神には能せざる所なし。人には能せざる所なり、惟神には能せざる所なし。

(二六〇) 主の爲に一切を捨てし者の許約 (マトフイ一九ノ二七—三〇。カ—ス〇。)

其時ペトル答へて彼に謂へり、視よ我等一切を捨てて爾に従へり、然らば我等何を  
 得んか。主イエスマス彼等に謂へり、我誠に爾等に語ぐ、爾等我に従へる者は、復生の

聖福福音史

時、人の子が其光榮の位に坐するに及びて、亦十二の位に坐して、イスラヰの十二支派を審判せん。  
 凡そ我が名の爲に家或は兄弟或は姉妹或は父或は母或は妻或は子或は田疇を舍つる者は、百倍を受け、且永遠の生命を嗣がん。我及び福音の爲に此の如きものを舍て、而して今斯の時、窘途の中に在りては、家と兄弟と姉妹と父と母と子と田疇とを百倍多く受け、又未來の世に在りては、永遠の生命を受けざる者あらず。惟多く先なる者は後に、後なる者は先にならん。

(二六一) 葡萄園に働く事の譬 (マトフイ一六〇。)

主謂へり、天國は其葡萄園に工人を傭はん爲に、朝早く出でたる家主の如し。工人と一日に銀一枚を約して、彼等を其葡萄園に遣せり。第三時の頃出でて、別に市に空しく立てる者を見て、之に謂へり、爾等も我が葡萄園に往け、我至當の者を爾等に與へん、彼等往けり。又第六時及び第九時の頃に出でて、是くの如く行へり。第十  
 一時の頃出でて、別に空しく立てる者に遇ひて、之に謂ふ、爾等何を終日此に空しく  
 立てる、彼等曰く、我等を傭ふ者なかりし故なり。彼は之に謂ふ、爾等も我が葡萄園



に往け至當の者を受けん。

暮に及びて、葡萄酒の主家幸に謂ふ、工人を呼びて、其値を給せよ、後なる者より始めて先なる者に及び。第十一時の頃の者來りて、各銀一枚を受けたり。先の者來りて意へらく、是より多く受くるならん、然れども、彼等も各銀一枚を受けたり。之を受けて家主を怨みて曰へり、此の後なる者は一時のみ勞さしに、爾は彼等を終日の苦勞と暑とを忍びたる我等と等しくせり。彼其一人に答へて曰へり、友よ、我爾に義ならざることを爲さず、爾は我と銀一枚を約せしに非ずや、爾の物を取りて往け、我此の後なる者にも、爾と等しく與へんと欲す。或は我の物を以て、我が欲する如く行ふは宜しからずや、抑我が善きに因りて、爾の目悪しきか。是くの如く後なる者は先になり、先なる者は後にならん、蓋召されたる者は多けれども、選ばれたる者は少し。

(一六二) 主ラザリを復活させんとて往かる。(イオアン一六二)

病める者あり、ラザリと云ふ、ワイフアニア、即マリヤ及び其姉妹マルファの村の人なり。マリヤは即香膏を主に膏り、髪を以て其足を拭ひし者にして、病めるラザリは彼

史音福聖

の兄弟なり。姉妹は主イエスマに人を遣して曰へり、主よ、爾の愛する者は病めり、主イエスマ之を聞きて曰へり、此の病は死を致さず、乃神の光榮を致さん、神の子が之に由りて榮せられん爲なり。

主イエスマはマルファ及び其姉妹とラザリとを愛せり。既に彼病めりと聞きて、仍其在りし處に留れること二日なり。其後門徒に謂ふ、我等復イウデヤに住かん。門徒彼に謂ふ、天子イウデヤ人近ごろ石を以て爾を撃たんと謀れり、爾復彼處に往くか。主イエスマ答へて曰へり、一日には十二時あるに非ずや、人若し晝に行かば、厥かず、此の世の光を見るに因りてなり。人若し夜に行かば、厥く、彼に光なきに因りてなり。

此を言ひし後、彼等に謂ふ、我等の友ラザリ寝ねたり、然れども、我往きて彼を醒ますん。門徒曰へり、主よ、彼若し寝ねたらば愈えん。主イエスマ彼の死の事を言ひしに、彼等は其寝ねて臥める事を言ふと意へり。其時主イエスマ明に彼等に謂へり、ラザリは死せり。而して我は、我が彼處に在らざりしを、爾等の爲に喜ぶ、爾等を信せしめん爲なり、然れども、彼に往かん。フォーマ又アディムと名づくる者、同門徒に謂へ



り我等も往きて彼と偕に死なん。

(一六三)

主己の前途の死と復活の事を説く。

(マトフエイ二〇ノ一七一  
九。マルコー〇ノ三二一  
三。ルカ一八。)

主及び其門徒等イエルサリムに上る時途中主イエス先だちて行き彼等駭き且懼れて之に従へり。彼復十二徒を召して己に及ばんとする事を語り視よ我等イエルサリムに上る。而して預言者に因りて人の子を指して録されし事皆成らん。人の子は司祭諸長及び學士等に付されん彼等之を死に定め之を異邦人に付して辱め鞭ち十字架に釘せしめん而して彼第三日に復活せん。然れども彼等少しも之を曉らざりき斯の言は彼等の爲に隠れて彼等聞はれし事を知らざりき。

(一六四)

ゼワエデイの子の母及び其子の願ひ主の此に對する教訓。

(マトフエイ二〇ノ二一八。  
マルコー〇ノ三五―四五。)

主はゼワエデイの子の母に謂へり爾何を欲するか。曰く我が此の二人の子が爾の國に於て一は爾の右に一は爾の左に坐せんことを許せ。其後ゼワエデイの子イア

コフ及びイオアン自ら彼に就きて曰く師よ我等の求むる所願はくは爾我等の爲に之を行へ。彼は之に謂へり我が爾等の爲に何を行はんことを欲するか。彼等曰へり我等に爾が光榮の中に於て一人は爾の右に一人は爾の左に坐せんことを賜へ。主イエス答へて曰へり爾等求むる所を知らず爾等我が飲まんとする爵を飲むことを能くするか我が受くる洗を受くることを能くするか。彼等曰く能す。彼は之に謂ふ爾等は我が爵を飲み我が受くる洗を受けん然れども我が右及び我が左に坐することは我が與ふべきに非ず乃我が父より備へられたる者に與へられん。十門徒之を聞きて二人の兄弟イアコフとイオアンとを慥れり。主イエス彼等を召して曰へり諸民の王侯其民を主り大人等其上に權を執るは爾等の知る所なり惟爾等の中には斯くあるべからず乃爾等の中に大ならんと欲する者は爾等の役者と爲る可し爾等の中に首たらんと欲する者は爾等の僕と爲るべし蓋人の子の來りしは人を役はん爲に非ず乃人に役はれ且己の生命を與へて衆くの者の願を爲さん爲なり。

を爲さん爲なり。



百九十 (一六五) イエリホンに入る時一人の警者を念さる。(三五一四三)

彼がイエリホンに近づける時或警者道の旁に坐して乞へり。民の過ぐるを聞きて是れ何事ぞと問へば、人々彼に主イエイスナゾレイの過ぐるなりと告げたり。彼呼びて曰へり、ダワドの子イエイスよ我を憐め。前に行く者彼を禁めて黙さしむれども、彼愈大に呼べり、ダワドの子よ我を憐め。

主イエイス止りて彼を携へ來るを命じ、其近づきし時之に問ひて曰へり、我が爾に何を爲さんことを欲するか。彼曰へり、主よ我が見るを得んことを。主イエイス彼に謂へり、見るを得よ、爾の信は爾を救へり。彼直に見るを得、神を讚榮して、主イエイスに従へり。衆民是を見て、讚美を神に歸せり。

(一六六) 主ザクヘイを悔改に導く。(二一〇九)

主イエイスイエリホンに入りて過ぎ行けり。視よザクヘイと名づくる者あり、税吏の長にして富める者なり。主イエイスの如何なる人たるを見んと欲したれば、人の衆きに因りて見るを得ざりき、身の長短ければなり。乃趨り前みて彼を見ん爲に無花果樹に昇れり、彼此の旁を過ぎんとすればなり。

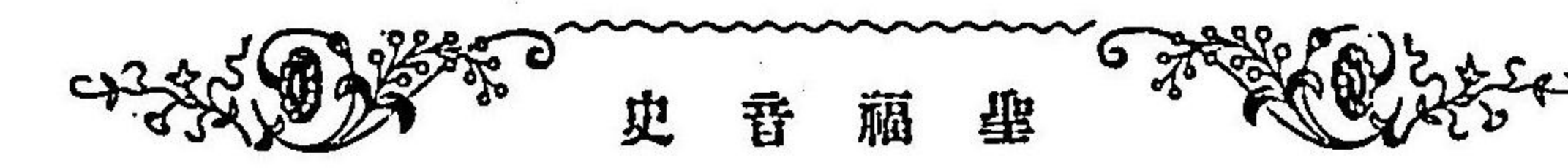
聖福福音史

主イエイス此の處に來りし時仰ぎて之を見て曰へり、ザクヘイよ速に下れ蓋我今日爾の家に寓るべし。彼急ぎ下り喜びて主イエイスを接けたり。人皆之を見て、怒みて曰へり、彼往きて罪人の客と爲れり。ザクヘイ立ちて、主に謂へり、主よ我所有の半を以て、貧しき者に施さん、若し爾ひて人より收りしことあらば四倍にして之を償はん。主イエイス彼に謂へり、今日救は此の家に臨めり、此の人もアウラムの子なればなり。蓋人の子は亡びし者を尋ねて救はん爲に來れり。

(一六七) ザクヘイの家にて、銀十斤の譬。(二一〇九)

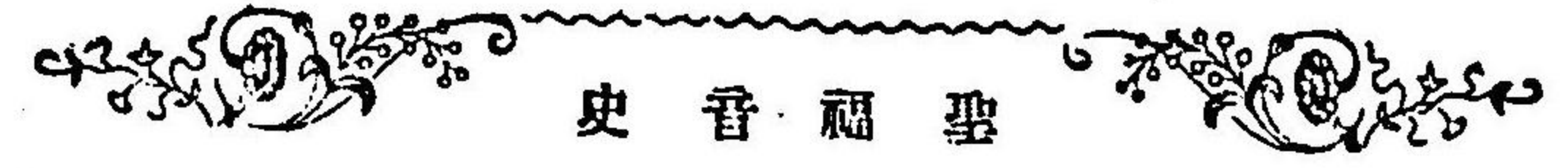
彼等が之を聞く時、主イエイス又譬を設けたり、蓋彼已にイエリサリムに近づき、彼等は神の國直に顯るべしと意へり。故に彼曰へり、或貴き人遠き地に往けり、國を受けて歸らん爲なり。往く時十人の僕を召して、彼等に銀十斤を與へて曰へり、我が歸るまで貿易せよ。其國民彼を憎みて、後より使を遣して曰へり、我等は斯の人の我等に王たるを欲せず。





聖 福 音 史

彼が國を受けて歸りし時、彼の銀を興へし諸僕を召すことを命じたり、各幾何か利を獲たるを知らん爲なり。第一の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は十斤を獲たり。主彼に曰へり、善い哉、善なる僕よ、爾は小き者に於て忠なりしに因りて、十の邑を宰れ。其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は五斤を獲たり。之にも曰へり、爾も五の邑を宰れ。又其次の者來りて曰へり、主よ、爾の一斤は此に在り、我巾に裏みて之を護れり、爾を畏れし故なり。蓋爾は嚴酷なる人にして置かざりし者を取り播かざりし者を穫る。主彼に謂ふ、惡しき僕よ、我爾の口に依りて爾を鞠かん、爾は我が嚴酷なる人にして置かざりし者を取り播かざりし者を穫るを知りたらば、何を我が銀を免錢肆に預けざりし、然せば我來りて、之を利と興に受けしならん。遂に前に立てる者に謂へり、彼より一斤を取りて、十斤を有てる者に興へよ。彼等曰へり、主よ、彼已に十斤を有てり。曰く、我爾等に語く、凡そ有てる者には興へられ、有たざる者よりは其有てる物も奪はれん。且彼の我が敵、我が彼等に王たるを欲せざりし者を、此に曳き來りて、我が前に誅せよ。



聖 福 音 史

(二六八) イエリホンを出る時、二人の替者を愈さる。  
(ルカ一三九ノ二八。マトフイニ〇ノ二)。  
(九一三四。マルコ一〇ノ四六。一〇ノ二)。

之を言ひ畢りて、主イエイス前に行き、イエリホンに向ひて上れり。彼が其門徒及び衆くの民と偕に、イエリホンを出づる時、タイムイの子ワルタイムイと云ふ替者道の旁に坐して乞へり。是れ主イエイスナゾレイなりと聞きて、彼呼びて曰へり、ワイドの子、主イエイスよ、我を憐め。多くの者彼を禁めて、黙さしむれども、彼愈大に呼べり、ワイドの子よ、我を憐め。

主イエイス止りて、彼を呼ばしめられたれば、人人替者を呼びて之に謂ふ、心を安んせよ、起て、爾を呼ぶ。彼上衣を棄てて、起ちて主イエイスに就けり。主イエイス答へて彼に謂ふ、我が爾に何を爲さんことを欲するか。曰く、夫子、我が目啓かれ、見るを得んことを。主イエイス憫みて、彼等に謂へり、往け、爾の信は、爾を救へり、而して彼等の目に觸れたれば、目直に見るを得て、彼等主イエイスに従へり。

(二六九) ラザリの復活 (イオア一七五七)。  
 主イエイス、ウィニアに來りて、ラザリの已に墓に葬られて、四日なるに遇へり。引





活復のリザラる友の主  
(章九十六百第)

聖 福 音 史

フニヤはイエリサリムに近し、相去ること約十五小里なり。イウデヤ人多くマル  
 フ及びマリヤに來れり、其兄弟の事に縁りて彼等を慰めん爲なり。マルフは主イ  
 イスズの來るを聞き、往きて彼を迎へたり。マリヤは仍家に坐せり。マルフは主  
 イイスズに謂へり、主よ、爾若し此に在りしならば、我が兄弟は死せざりならん。  
 然れども我知る、今も爾が凡そ神に求めん者は神爾に賜はん。主イイスズ之に曰  
 ふ、爾の兄弟は復活せん。マルフ曰く、我は末の日の復活の時に、彼が復活せんこと  
 を知る。主イイスズ之に曰へり、我は復活なり、生命なり、我を信する者は死すも雖  
 生さん。凡そ生きて我を信する者は、世に死せざらん。爾此を信するか。曰く、  
 主よ、然り、我は爾が世に來るべき主ハリストス神の子たるを信せり。  
 之を言ひて後、往きて、潛に其姉妹マリヤを呼びて曰へり、師來りて、爾を呼ぶ。マリ  
 ヤ此を聞き、亟に起ちて、彼に往けり。時に主イイスズ未だ村に入らずして、仍マル  
 フが彼を迎へし所に在り。マリヤと偕に家に在りて、之を慰めし、イウデヤ人は、其  
 亟に起ちて出でしを見て、之に隨へり、曰ふ、彼は墓に往きて、彼處に哭かんと。  
 マリヤは主イイスズの在りし所に來り、彼を見て、其足下に俯伏して曰へり、主よ、爾



聖 福 音 史

若し此に在りしならば我が兄弟は死せざりしならん。主イエス彼が哭き又彼と偕に來りしイウヂヤ人の哭くを見て心に哀みて自ら側めり曰く爾等何處に彼を置きしか。彼に謂ふ主よ來りて觀よ。主イエス泣けり。イウヂヤ人曰へり觀よ其彼を愛せしこと如何ばかりぞ。其中の或者曰へり替者の目を啓きたる此の人は我をも死せざらしむる能はざりしか。

主イエス復哀に哀みて墓に來る。是れ洞にして其上に石の置けるあり。主イエス曰く石を去れ。死者の姉妹マルツァに謂ふ主よ已に臭し蓋彼死して四日なり。主イエス之に謂ふ我爾に若し信せば神の光榮を見んと云ひしに非ずや。是に於て彼等石を死者を置きたる所より去れり。主イエス目を上に擧げて曰へり父よ爾が我に聽きしを我爾に感謝す。我は爾が恒に我に聽くを知れり然れども環り立てる民の爲に之を言へり彼等の爾が我を遣ししことを信せん爲なり。之を言ひて大なる聲を以て呼べりラザリよ外に出でよ。死せし者出でたり手足は布に纏かれ面は巾に裹まれたり。主イエス彼等に謂ふ之を釋きて行かしめよ。



其時マリヤに來りて主イエスの行ひし事を見たるイウデヤ人の中の多くの者彼を信せり。然れども其中の或者は「ファリセイ等に往きて之に主イエスの行ひし事を告げたり。」

(二七〇)「シネドロオン」主を殺さんと決議す。主エフライムに往く。

(イオア一五四)。

是に於て司祭諸長及び「ファリセイ等は公會を集めて曰へり我等何を爲さんか、蓋此の人は多くの奇蹟を行ふ。若し是くの如く彼を舍かば、人皆彼を信せん而して、  
人來りて、彼等の地をも民をも奪はん。其中の一人なるカイアフ、是の歳司祭長たる者は、彼等に謂へり、爾等何を知らず、又一人民の爲に死して、全民滅びざらん事の我等に益あるを思はず。彼の之を言ひしは、己に由るに非ず、乃是の歳の司祭長として、主イエスの民の爲に死せんとするを預言せしなり。是れ特斯の民の爲のみならず、乃亦散じたる神の諸子を一に集めん爲なり。  
是の日より彼等相讎して、主イエスを殺さんと決せり。故に主イエスはより顯にイウデヤ人の中を行かず、乃彼處より野に近き地、エフタイムと名づくる邑に

往きて、此に門徒と偕に居たり。

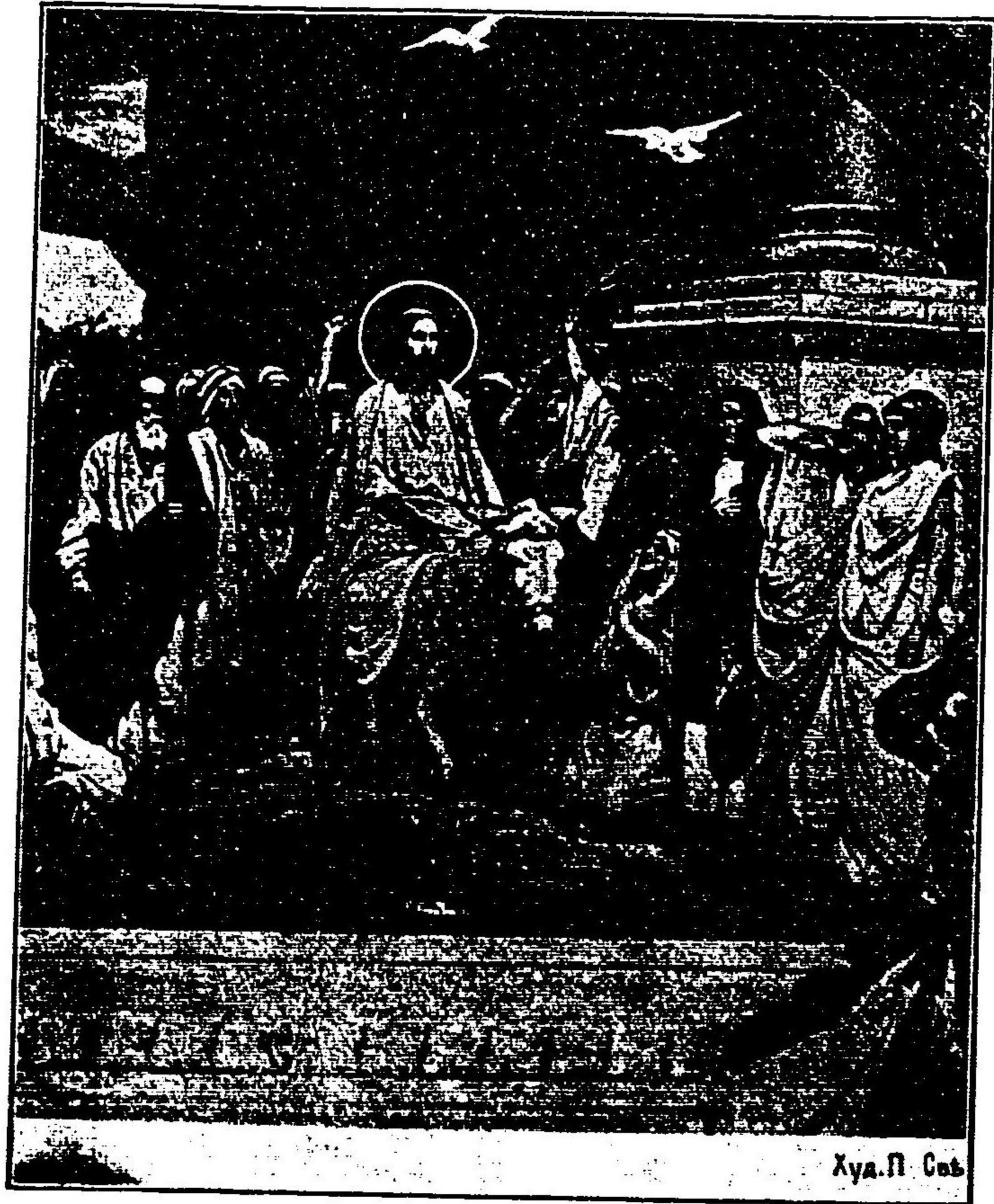
(二七一) 衆民主を尋ね、逾越節の六日前、ワイフアニヤに於ける晩餐。

(イオア二二)。

イウデヤの逾越節近づきたれば、多くの者は、己を潔めん爲に、逾越節に先だちて、地方よりイエルサリムに上れり。衆主イエスを尋ね、殿に立ちて、相語りて曰へり、爾等如何に意ふか、彼は節筵に來らざらんか。司祭諸長及び「ファリセイ等は命を出だして云へり、若し人彼の在る所を知らば、之を告ぐべし、彼を執へん爲なり。  
逾越節の前六日、主イエスワイフアニヤに來り、即ラザリ會て死して、彼が死より復活せしめし者の居る所なり。彼處に於て彼の爲に晩餐を設けたり、マルファ供事しラザリは彼と偕に席坐せし者の一たり。マリヤは純良なる「ナルド」の價貴き香膏一斤を執りて、主イエスの足に膏り、己の髪を以て其足を拭へり、家は香膏の香氣に満たされたり。

其門徒の一、シモンの子イウグイスカリオド、即彼を賣らんとする者曰く、何ぞ此の香膏を銀三百に售りて、貧しき者に施さざりし。彼の之を言ひしは、貧しき者を慮





主の入城  
(第百七十七章)

聖 福 音 史

る爲に非ず、即竊者たるに因りてなり。彼は金匣を持ち、其内に藏たる者を携へた

百九十八

り。主イエス曰へり、彼を舍け、彼は我が葬の日の爲に此を貯へたり。蓋貪しき者は

常に爾等と偕にす、我は當に爾等と偕にするにあらざるや。

イウデヤの衆くの民は彼の彼處に在るを知りて、獨主イエスの爲のみならず、乃

其死より復活せしめしラザリをも見ん爲に來れり。司祭諸長はラザリをも殺さ

んことを謀りたり、蓋彼の故に因りて多くのイウデヤ人往きて、主イエスを信せ

り。 (二七三) 主殿かにイエルサリムに赴かる。(マトフ二二〇。ルカ一九ノ二

九一四。イェアン。一ノ四。一ノ九。)

明日、ワイフニヤの晚餐の後、主イエルサリムに往けり。橄欖山と名づくる山に運さ、

ワイフニヤ及びワイフギヤに近づきし時、彼二人の門徒を遣して曰へり、前なる村に往

け、其内に入らば繋ぎたる牡驢及び小驢人の未だ會て乗らざりし者に遇はん之を

解きて牽き來れ。



聖 福 音 史



イエルサリムに近づき橄欖山に遡り、ツツギヤに來りし時、主イエス二人の門徒を遣して之に謂へり、爾等の前なる村に往け、直に繋ぎたる牝驢及び之と偕に在る小驢に遇はん、之を解きて、我に牽き來れ。若し爾等を詰り、何を解くと言ふ者あらば、主之を需むと云へ、然らば直に之を遣さん。

遣はされし者往きて、彼が言ひし如き事に遇へり。主イエスの命せし如く行ひたり、街の門に繋ぎたる牝驢とそれと偕にせる小驢を解けり、小驢を解く時、其主及び彼處に立てる或人彼等に謂へり、爾何を小驢を解く、彼等主イエスの命せし如く、主之を需むと對へたり、乃之を許せり。

乃之を主イエスに牽き來り、己の衣を小驢に掛け、主イエスを其上に乗せたり、主イエス之に乗り、城に赴けり、此れ皆成りしは預言者を以て言はれし事に應ふを致す、曰く、シオンの女に告げて、云へ、視よ、爾の王は溫柔にして、牝驢及び重任を負ふ者の子なる小驢に乗りて、爾に臨む。門徒等始め、之を解せざりき、然れども主イエス榮せられし時、彼の事に就きて書さらし事は、彼に應ぜるを解せり。彼が往く時、多くの者は己の衣を途に布き、他の者は樹の枝を伐りて途に布けり。



已に橄欖山より下路に近づける時大衆の門徒は喜びて其見し所の悉くの異能の爲に大聲に神を讚美して曰へり主の名に因りて来る王は祝福せらるる天には和平

至高きには光榮と。節筵の爲に來りし衆くの民は主イエスキのイエルサリムに來るを聞きて樓閣の枝を取り出でて彼を迎へ呼びて曰へりオサンナ主の名に因りて來るイズライ

の王は祝福せらるると。且前に行き後に從ふ人々呼びて曰へりオサンナ主の名に因りて來る者は祝福せ

らる我が父ダウイドの國主の名に因りて來る者は祝福せらる至高きに「オサンナ」先に主イエスキと偕に在りし民は彼がラザリを墓より呼び出だして之を死より復活せしめし事を證せり。此に縋りて民は彼を迎へたり蓋彼が此の奇蹟を行ひしを聞けり。

「アラセイ」等相語りて曰へり豈爾等が謀る所の一も益なきを見ざるか視よ世は皆彼に從へり。民の中より或アラセイ等主に謂へり師よ爾の門徒を禁めよ。彼は之に答へて曰へり我爾等に語ぐ若し彼等黙さば石は呼ばん。

主は既に近づきし時城を見て之が爲に哭きて曰へり嗚若し爾も此の爾の日にだに爾の平安に關する事を知りたらんには然れども此れ今爾の目に隠れたり。蓋日爾に至りて爾の敵は壘を築きて爾を繞り四方より爾を攻め爾及び爾の中に爾の諸子を滅し爾の中に石を石の上に遺さざらん爾の眷顧の時を爾知らざりに因りてなり。

(二七三) 全城の騒擾 聖殿を淨めらる。 磔を施す。 童子の譏揚。

(マトフエイニ一〇九ノ四五六、四六〇)

彼がイエルサリムに入りし時城舉りて騒ちて曰へり此れ誰ぞや。 民曰へり此れ主イエスキガリレヤのナザレトの預言者なり。

主イエスキ神の殿に入りて其中に貿易する者を悉く逐ひ出だし兌換する者の案ど、鴿を鬻ぐ者の椅とを倒して彼等に曰へり我が家は祈禱の家と稱へられんと録されたるに爾等之を盜賊の巢窟と爲せり。

替者及び跛者殿に於て彼に就きたれば彼之を醫せり。 司祭諸長と學士等とは其行ひし奇蹟を見又童子等が殿に呼びてダウイドの子に「オ



二百三  
サンナと云ふを見て憶りて彼に謂へり爾此の輩の言ふ所を聞くか。主イエス  
彼等に謂ふ然り爾等未だ爾は嬰兒と哺乳兒との口より讚美を備へたりと云へる  
を讀まざりしか。

(一七四) エルリン人主イエスを見んことを望む。(イオアン一五〇)

節筵に禮拜する爲に上りたる者の中にエルリン人あり。彼等はガリレヤのワイフサ  
イダの人なるフリップに就きて之に請ひて曰へり君よ我等主イエスを見んこと  
を望む。フリップ來りてアンドレイに告げ、アンドレイ及びフリップは又之を主イ  
スに告ぐ。

主イエス彼等に答へて曰へり人の子の榮せらるる時到来り。我誠に誠に爾等  
に語ぐ、麥の粒若し地に遺ちて死なずば獨存す、若死なば多くの實を結ぶ。己の生  
命を愛する者は之を喪はん己の生命を斯の世に惡む者は永世の爲に之を護らん。  
人若し我に事へば我に従ふべし我が在る所は我に事ふる者も亦彼處に在らん。  
人若し我に事へば我が父彼を賞せん。今我が靈は傷めり我何をか言はん父よ我  
を斯の時より救へ然れども我は特に斯の時の爲に來れり。父よ爾の名を榮せよ。

聖 福 音 史

時に天より聲來りて云ふ我已に之を榮せり且復之を榮せん。旁に立ちて聞きし  
民は曰へり雷の震ひしなり他の者は曰へり天使の彼に語りしなり。主イエス  
答へて曰へり此の聲の存りしは我の爲に非ず乃爾等の爲なり。今斯の世は審判  
せらる今斯の世の君は外に逐はれん。我が地より擧げられん時は衆を引きて我  
に就かしめん。

聖 福 音 史

彼が此を言ひしは其何の死を以て死せんとするを示ししなり。民彼に答へて曰  
へり我等律法に主ハリストスは世世に存すと云へるを聞けり爾何ぞ人の子は擧  
げらるべしと言ふ此の人の子は誰ぞ。主イエス彼等に謂へり尙少時光は爾等  
と偕に在り光ある間に行け暗の爾等を蔽はざらん爲なり暗に行く者は何へ往く  
を知らず。爾等光ある間に光を信せよ光の子と爲らん爲なり。主イエス既に  
此を言ひ彼等を離れて隠れたり。  
彼は斯く多くの休徴を彼等の前に行ひたれども尙彼を信せざりき預言者イサイ  
ヤの言に應ふを致す云く主よ誰か我等より聞きし事を信じたる主の聲は誰にか  
顯れたると。彼等が信すること能はざりしは蓋イサイヤの復言ひしが如く其目



を替にし其心を頑にせり恐らくは目にて視心にて悟り轉じて我ら彼等を醫さん  
 ど。イサイヤの之を言ひしは彼の光榮を見彼を指して語りし時に在り。然るに  
 有司の中にも多くの者は彼を信せり惟フアセイ等の故に因りて之を顧さざりき  
 會堂より逐はれざらん爲なり。蓋人の光榮を愛せしこと神の光榮に過ぎたり。  
 主イエス呼びて曰へり我を信する者は我を信するに非ず乃我を遣しし者を信  
 するなり。我を見る者は我を遣しし者を見るなり。我は光にして世に來れり凡  
 そ我を信する者の暗に居らざらん爲なり。若し人我が言を聞きて信せず我彼  
 を定罪せず蓋我が來りしは世を定罪せん爲に非ず乃世を救はん爲なり。我を拒  
 みて我が言を納れざる者には之を定罪する者あり即我が語りし言なり此れ末の  
 日に於て彼を定罪せん。蓋我は己に由りて語りしに非ず即我を遣しし父は彼我  
 に言ふべき事語るべき事を命せり。我は其命の永遠の生命なるを知る。故に我  
 が語る所は父の我に言ひし如く語るなり。

(二七五) 主遂に城外に宿らる。(マテフイニ一ノ一七。ルカ一ノ四八。)

主之を謂ひ遂に司祭諸長と學士等と衆民とを離れたり。徧く圍視し時已に曉く

なりしに因りて十二使徒と偕にフイフニヤに出でたり。

此の如く日日殿に在りて教を宣べ夜はフイフニヤ又はエレオン山に離れたり。司  
 祭諸長學士等及び民の長老等彼を滅さんと謀りたれども爲す可き所を知らざり  
 き蓋民皆離れずして彼に聽けり。

(二七六) 無花果樹を詛はる。及び其教訓。(マテフイニ一ノ一八。ルカ一ノ四九。)

聖 明日平旦彼等がフイフニヤを出でイエルサリムに還る時主イエス飢ゑたり。遂  
 に葉の有る無花果樹を見て之に往けり其上に得る所なきかど既に來れば葉の外  
 に得る所なかりき無花果樹の時未だ至らざればなり。主イエス之に對ひて曰  
 へり今より後人永く爾の果を食ふ可からず。其門徒之を聞けり。無花果樹立に  
 枯れたり。

門徒之を見て奇として曰へり無花果樹何ぞ立に枯れたる。主イエス答へて彼  
 等に曰へり我誠に爾等に語り爾等若し信ありて疑はずば唯無花果樹に於ける事  
 を行はんのみならず乃此の山に移りて海に投せよと云ふとも亦成らん。且凡そ  
 祈禱の時信じて求むる所は悉く之を得ん。







主イエスマに答へて曰へり、奚れよりせしを知らず。  
主イエスマも亦彼等に謂へり、我も何の權を以て是を行ふを爾等に語げざらん。

(二八〇) 同上、二人の子の譬、(三二、三三、三六、三九、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇)。

遂に譬を以て彼等に語りて曰へり、爾等如何に意ふか、或人に二人の子あり、其第一の者に就きて曰へり、子よ、往きて今日我が葡萄園に工作せよ。彼答へて曰へり、我欲せず、然れども後悔いて往けり。又第二の者に就きて是くの如く言ひしに、彼答へて曰へり、主よ、我往く而して往かざりき。

二人の中、孰か父の旨を行ひたる。曰く、第一の者なり。主イエスマ彼等に謂ふ、我誠ニ爾等に語り、税吏と娼妓とは爾等に先だらて、神の國に往く。蓋イオアン義の道を以て爾等に來りしに、爾等彼を信せざりき、然れども税吏と娼妓とは彼を信せり、爾等は之を見たる後も、仍悔いせず、又彼を信せず。

(二八一) 同上、葡萄園丁の譬、(二二、二四、二六、二八、三〇、三二、三四、三六、三八、四〇、四二、四四、四六、四八、五〇、五二、五四、五七、五九、六一、六三、六五、六七、六九、七一、七三、七五、七七、七九、八一、八三、八五、八七、八九、九一、九三、九五、九七、九九、一〇〇)。

今爾等彼一の譬を聽け、家主あり、葡萄園を植ゑ、之に籬を環らし、其中に酒榨を掘り、塔を建て、之を園丁に託して、他方に往き久しく居れり。

史音福聖

果期近づきたれば、彼は僕を園丁に遣して、彼に葡萄の實を與へしめんとせしに、園丁之を打ちて、空しく返らしめたり。復他の僕を遣ししに、彼等之をも打ち辱しめて、空しく返らしめたり。又第三の者を遣はししに、之をも傷つけて、逐ひ出だせり。又多くの他の者を遣したるに、之を殺せり、其他の多くの者を或は打ち、或は殺せり。園主は猶、其一の至愛の子あり、卒に是をも彼等に遣はして曰へり、我が子に愧ぢんと。然れども彼の園丁は相語りて曰へり、此れ嗣子なり、往きて彼を殺さん、然らば其嗣業は我等の有となり。乃之を執へて殺し、葡萄園の外に棄てたり。然らば葡萄園の主來らん時、何と此の園丁に行はん。彼等曰く、此の惡しき者を情なく滅し、葡萄園を以て他の園丁即時に及びて、彼に果を收めん者に托せん。

主は力言して曰へり、彼來りて、其園丁を滅し、葡萄園を他の者に托せん。之を聞きし者曰へり、願はくは此れ有らざらん。然るに主イエスマ彼等に目を注ぎて曰へり、爾等聖書に、工師が棄てたる石は、屋隅の首石となれり、此れ主の成す所にして、我等の目に奇異なりとす、云ふを未だ讀まざりしか。故に我爾等に語り、神の國は爾等より奪はれて、其果を結ぶ民に與へられん。且此の石の上に倒るる者は壞ら



れ此の石の其上に墜つる者は碎かれん。司祭諸長と、フリセイ等と彼の譬を聞きて其彼等を指して言ふを悟り彼を執へんと謀りたれども民を懼れたり蓋良は彼を以て預言者とせり。

(一八三) 同上。三王子の婚筵に招かれたる者の譬。(マトフエイニニ)。

聖 王の如し。彼其諸僕を遣はして召されし者を婚筵に招きたれども彼等來るを欲せざりき。又他の僕を遣して曰へり召されし者に告げて云へ視よ我已に餐を具へ我が牛と肥えたる畜と已に宰りて一切備はれり婚筵に來れ。然れども彼等は顧みずして或者は其田に或者は其貿易に往けり餘の者は彼の諸僕を執へ辱しめて之を殺せり。

王之を開きて怒り其軍を遣して彼の兇人を滅し彼等の邑を燬けり。時に彼其諸僕に謂ふ婚筵備はりたれども召されし者は堪へず故に爾等通衢に往きて遇はん者を悉く婚筵に招げ。其僕途に出でて凡そ遇ひたる者惡しきと善きとを問はず之を集めたれば婚筵に席坐する者滿ちたり。

聖 王は席坐する者を觀ん爲に入りて彼處に一人の婚禮の服を衣ざる者あるを見て之に謂ふ友よ爾何ぞ婚禮の服を衣すして此に入りたる彼默然たり。其時王は役者に謂へり彼の手足を縛りて彼を取りて外の幽暗に投せよ彼處に哀哭と切齒とあらん。蓋召されたる者は多けれども選ばれたる者は少し。

(一八三) 聖殿に於ける説教。税をケサリに納むるは宜しきや否や。

(マトフエイニニノ一五〇一ニニ〇マルコ二)。

聖 其時フリセイ等往きて如何にして彼を其言に因りて罾せんと謀れり。乃彼を窺ひて義者の爲をなせる問者を遣して言に因りて彼を羅せんと欲せり彼を有司に及び方伯の權威に解さん爲なり。遂にフリセイ己の門徒をイロドの黨と偕に彼に遣して曰く師よ我等は爾が眞なる者にして誠に神の道を教へ何人にも偏らざるを知る蓋爾は貌を以て人を取らず。故に我等に語げよ爾如何に意ふか税をケサリに納むるは宜しきや否や。

主 イイスス其惡意を知りて曰へり偽善者よ何ぞ我を試みる税金を我に示せ。彼等銀一枚を携へ來れるに彼曰く斯れ誰の像と號なるか。曰くケサリの。是に於







の神に非ず、乃生者の神なり、故に爾等大に迷へり。  
或學士等答へて曰へり、師よ、爾の言ひし所善し。民間きて、其訓を奇とせり。

(二八五)

聖殿に於ける説教、何の誠か大なる。

(マトフエニ二ノ三四一  
四〇マエコー二ノ二ノ二)

二八〇三四〇カ)

「ラアセイ」等は、彼が「サドフケイ」等に言なからしめたりと聞きて相集れり。其中なる一人の律法師彼を試みて問ひて曰へり、師よ、律法の中に何の誠か大なる。

聖 福 音 史

主イエイスス之に答へて曰へり、一切の誠の中第一なる者は云く、イスラエリよ、聴け、我等の神は一の主なり、又爾心を盡し、靈を盡し、意を盡し、力を盡して、主爾の神を愛せよ、此れ第一の認なり。第二は是に同じき者、即爾の隣を愛すること己の如くせよ。斯の二の者より大なる誠は有らず。斯の二の誠には、悉くの律法と預言者と繋れり。

學士彼に謂へり、善い哉、師よ、爾が神は一にして、其外に神なしと謂ひしは實なり、又心を盡し、智を盡し、靈を盡し、力を盡して、彼を愛し、又己の如く隣を愛するは、悉くの全燔と祭祀とに愈れり。主イエイスス其智を以て對へしを見て、之に謂へり、爾は神



の國に遠からず。  
是より敢て復彼に問ふ者なかりき。

(二八六) ハリストスは誰の子なるか。(一ニノフエイニ二ノ四一四六。ノ四〇

四一四)。

又「ファリセイ等の集りし時、主イエス又殿に於て教を宣べて曰へり、學士等何ぞハ  
リストスはダワイドの子なりと云ふ、爾等ハリストスの事を如何に意ふか、彼は誰の  
子なるか。曰くダワイドの子なり。

彼曰く、然らば如何ぞダワイドは、聖神に由りて彼を主と稱ふる云く、主我が主に謂へ  
り、爾我が右に坐して、我が爾の敵を爾の足の発と爲すに迄れど、然らばダワイド彼  
を主と稱ふれば、如何ぞ彼は其子たる。

一人も之に言を答ふる能はず、是の日より敢て復彼に問ふ者なかりき、衆くの民は  
樂みて彼に聞けり。

(二八七) 聖殿に於ける説教、學士、ファリセイ等を詰めらる。(三ノフエイニ

九。ノカニ。一ノ三。八。一四)。

史音福聖

史音福聖

主イエス、民皆彼のことを聴きし時、其教に於て門徒に謂へり、謹みて學士等を  
防げ、彼等は長き衣にて遊ぶを好み、街衢には向安會堂には首座、筵には上席を喜ぶ、  
彼等は羨の家を呑み、伴りて長き所を爲す、彼等尤重き定罪を受けん。

其後、主イエス、民及び其門徒に語りて曰へり、モイセイの位に學士及びファリセイ  
等は坐せり。故に彼等が凡そ爾等に守らんことを命ずる者は守りて之を行へ、然  
れども彼等の行に效ふ勿れ、蓋彼等は言ひて行はず。彼等は重く且負ひ難き任を

縛りて、人の肩に負はすれども己は一の指を以てすら、之を動かすを欲せず。凡そ  
彼等が行ふ所は、人に見られん爲に行ふ、其佩經を闊くし、其衣の裾を大にす。又筵

には上席、會堂には首座、街衢には向安人々よりは、夫子夫子と稱へらるるを好む。  
然れども爾等は夫子と稱へらるる勿れ、蓋爾等の師は即ハリストスなり。爾等の

中に大なる者は、爾等の役者となるべし。蓋自ら高くする者は、卑くせられ、自ら卑  
くする者は、高くせられん。

禍なる哉、爾等、偽善なる學士及びファリセイ等よ、蓋爾等は天國を人の前に閉ぢて自  
ら入らず、入らんと欲する者にも入るを許さず。



禍なる哉爾等偽善なる學士及び「フアリセイ」等、蓋爾等は婆の家を呑み伴りて長き祈を爲す、是に由りて更に重き定罪を受けん。

禍なる哉爾等偽善なる學士及び「フアリセイ」等、蓋爾等は一人をも教に進ましめん爲に、海陸を巡り、既に進めば彼を爾等に倍したる地獄の子と爲す。

禍なる哉爾等誓なる嚮導者よ、爾等は云ふ人若し殿を指して誓はば、事なし、殿の金を指して誓はば、償ふべしと。愚にして誓なる者よ、孰か大なる金か、抑金を蓄ならしむる殿か。又云ふ人若し祭壇を指して誓はば、事なし、其上の禮物を指して誓はば、償ふべしと。愚にして誓なる者よ、孰か大なる禮物か、抑禮物を蓄ならしむる祭壇か。

故に祭壇を指して誓ふ者は、殿及び其中に居る者を指して誓ふなり、又殿をさして誓ふ者は、殿及び其中に居る者を指して誓ふなり、又天を指して誓ふ者は、神の寶座及び其上に坐する者を指して誓ふなり。

禍なる哉爾等偽善なる學士及び「フアリセイ」等、蓋爾等は薄荷、茴香、馬芹の十分の一を納めて、律法の尤重き義と仁と信とを遺てたり、此れ行ふ可きなり、彼も亦遺づ可からず。誓なる嚮導者よ、爾等は蚊を濾して、駱駝を呑む者なり。



聖 福 音 史

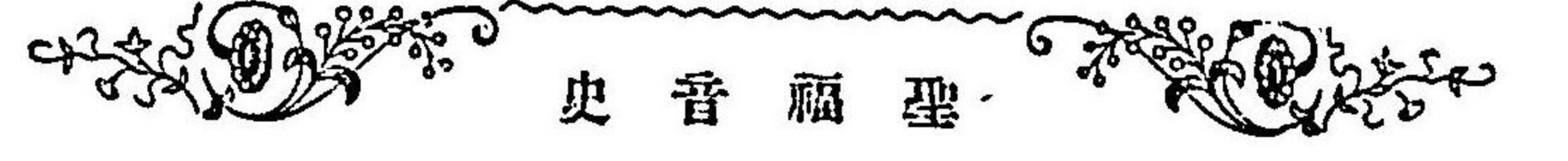
禍なる哉爾等偽善なる學士及び「フアリセイ」等、蓋爾等は杯と皿との外を潔むれども、其内には貪婪と不義と充てり。誓なる「フアリセイ」よ、先づ杯と皿との内を潔めよ、其外も潔くならん爲なり。

禍なる哉爾等偽善なる學士及び「フアリセイ」等、蓋爾等は白く塗りたる壁に似たり、外は美しく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢と充てり。是の如く爾等も、外は人人に義なる者と見ゆれども、内は偽善と不法と充てり。

禍なる哉爾等偽善なる學士及び「フアリセイ」等、蓋爾等は豫言者の壁を建て、義者の墓を飾り、且云ふ我等若し我が先祖の日に在りしならば、彼等が豫言者の血を流すことに與せざりしならん。是の如く爾等は自ら己が豫言者を殺しし者の子たるを證す。爾等先祖の量を充たせ。

蛇虺の類よ、爾等安ぞ地獄の定罪を遣れん。

故に視よ、我爾等に豫言者と智者と學士とを遣す、而して爾等は其中或者を殺し、又は十字架に釘し、或者を爾等の食堂に鞭ち、又は邑より邑に逐はん、凡そ地上に流されし義人の血、義なる「アエリ」の血より、爾等が殿と祭壇との間に殺しし「ワラヒヤ」の



聖 福 音 史





子ザハリヤの血に至るまで、皆爾等に歸せん爲なり。我誠に爾等に語り、此等皆斯の代に歸せん。

イエルサリムよ、イエルサリムよ、預言者を殺し、爾に遣されし者を石にて撃つ者よ、我幾度か母雞が其雛を翼の下に集むる如く、爾の諸子を集めんと欲したれども、爾等は欲せざりき。視よ、爾等の家は虚しくして、爾等に遺さる。蓋我爾等に語り、今より後、主の名に因りて來る者は祝福せらるると云ふに至るまで、爾等我を見ざらん。

(二八八) 羨の献賽 (マルコ二〇ノ四一―四二)。

其後、主イエス、献賽函に對ひて坐し、民が金錢を献賽函に投ずるを見たり。多くの富める者は多く投じたり。一人の貧しき羨來りて、二レフタを投じたり。即ち五錢なり。主イエス、其門徒を召して、之に謂ふ、我誠に爾等に語り、此の貧しき羨は、凡そ献賽函に投ずる者より多く投じたり。蓋皆其美餘より投じ、彼は其乏しき所より。凡の有てる者、即ち其生計を盡く投じたり。

(二八九) エレオン山の途にて、聖殿の運命を預言せらる。

(マテ二四ノ一―二、マルコ二一ノ一―五、ルカ二一ノ一―六)。



寡婦の献賽 (第百八十八章)



主イエス 献賽國の處を出でて殿より往けるに其門徒彼に就きて殿の造構を觀さんとせり。其門徒の一人彼に謂ふ師よ此の石の若何此の造構の若何を觀よ。又或人が殿の事其美しき石と奉納品とを以て飾りたる事を語れる時主イエス彼に答へて曰へり爾此等の大なる造構を見るか日至らん此には一の石も石の上には遺らずして皆圮されん。

(二九〇) エレオン山に於ける説教 主の來臨及び世末の徴候。  
(マトフエイ二四ノ三一―三三ノ一四。マルコ一三ノ三一―三三ノ九。)

其後主が橄欖山に坐せる時ペトル、イアコフ、イオアン、アンドレイ及び其他の門徒私に彼に就きて曰へり師よ請ふ我等に告げよ何れの時に此事あらん又此れ皆成らんとする時爾の降臨と世の終末との兆は如何なるか。主イエス彼等に答へて曰へり慎みて人に惑はさるる勿れ。蓋多くの者は我が名を冒して來り是れ我なりと云ひて多くの者を惑はさん彼等の後に從ふ勿れ。又爾等戦と戦の風聲を聞かん爾等此の戦ひと戦の風聲を聞かん時懼るる勿れ。蓋此れ有るべし惟此れ尙末期には非ず。蓋民は民を攻め國は國を攻めん饑饉疫



病地震處處にあらん及び大なる休徵天よりするあらん  
凡そ此等の事の先に福音は必先づ萬民に傳へらるべし。人人其手を爾等に措き、  
爾等を窘逐して、會堂及び獄に解し、人人爾等を艱苦に付し、爾等を殺さん。惟終に至  
るまで忍ぶ者は救はれん。

爾等を曳きて解さん時先づ何を云ふべきを慮る勿れ、又預め籌るなかれ、乃其時爾  
等に與へられんことを言へ、蓋我爾等に口と智慧とを與へて、凡そ爾等の仇をして  
辨駁敵對する能はざらしめん。

其時多くの者は蹟さ相付し、相憎まん。又多くの偽預言者起りて、多くの者を惑は  
さん。不法の増すに因りて、多くの者の愛は冷にならん。爾等亦父母兄弟親戚朋  
友より解され、且爾等の中或者は殺されん。爾等我が名の爲に衆人に憎まれん。  
然れども爾等の首の髮の一も曳びざらん。忍耐を以て爾等の靈を救へ。終に至  
るまで忍ぶものは救はれん。  
又此の天國の福音は徧く天下に傳へられん、萬民に證をなさん爲なり、然る後末期  
至らん。

聖福音史



(二九一) 同上、イエルサリムの運命の預言。(マテ二四ノ一五―二二、  
ルカ二四ノ一三―二〇、ヨハネ一ノ一四、二ノ一四)。

故に爾等預言者ダニエルを以て言はれたる荒廢の惜むべき物の聖處に立つを見  
ば、讀む者悟るべし、其時イウデヤに在る者は山に遁るべし、屋の上うゑに在る者は、其家  
より物を取らん爲に下るべからず、田に在る者は、其衣を取らん爲に、歸るべからず。  
當日には妊める者と乳を哺ます者と禍なるかな。爾等の遁ぐるここの冬或は  
安息日に在らざらんが爲に祈れ。

爾等イエルサリムが軍に圍まれたるを見る時は、其亡の近づきしを知れ。其時イ  
ウデヤに在る者は山に遁るべし、城の中に在る者は此より出づべし、郷に在る者は  
其中に入るべからず。蓋此れ復讐の日なり、凡そ録されし事の應はん爲なり。蓋  
其時大なる患難あらん、世界の始より今に至るまで、未だ此くの如きはあらざりき。  
後も亦あらざらん。當日は大なる雷は地に在りて、怒は斯の民に及ばん。彼等は  
劍の刃に斃れ、又諸民の中に擄にせられん、イエルサリムは異邦民に蹂躙うみにられて、異邦  
民の期の満つるに迄らん。若し主其日を滅せざりしならば、凡の肉身は救はれざ

聖福音史









自ら慎め、恐らくは爾等の心は發發沈沈及び度生の慮に鈍くせられて、彼の日突然爾等に至らん。蓋期の日は網の如く、一切全地の面に住む者に臨まん。故に恒に儆醒して祈れ、此等來らんとする事を悉く遁れて、人の子の前に立つに堪へん爲なり。

聖福音史

然れどもノイの日の如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。蓋洪水の先の時ノイの方舟に入る日まで、人人食ひ飲み、娶り嫁ぎて、洪水の來りて、盡く彼等を滅すに至るまで知らざりし如く、人の子の來るも亦是くの如くならん。其時二人田に在らんに、一人は取られ、一人は遺さる。二人の婦磨を旋かんに、一人は取られ、一人は遺さる。故に儆醒せよ、爾等の主の何の時に來るを知らざればなり。若し家主盜賊の何の更に來るを知らば、儆醒して、其家を穿つを許さざらん、是れ爾等の知る所なり、是の故に爾等も己を備へよ、蓋爾等が意はさる時に人の子來らん、孰か忠にして智なる僕、其主が諸僕の上に立ちて時に隨ひて彼等に糧を與へしむる者たる。主の來る時、彼が斯く行ふを見れば、其僕福なり。我誠に爾等に語り、彼を立てて其一切の所有を督らしめん。然れども若し其惡しき僕、心の中に我が主の

聖福音史

來るは遅からんと曰ひて、其同僚を打ち、酒徒と偕に食飲せば、乃俟たざる日知らざる時に、其僕の主來りて、彼を斷ち、彼を偽善者と同じき分に處せん、彼處に哀哭と切齒とあらん。厥時天國は燈を執りて、出でて新娶者を迎ふる十人の處女の如くならん。其中五人は智く、五人は愚なり。愚なる者は其燈を執りて己と偕に油を取らざりき。智き者は其燈と偕に其器に油を取れり。新娶者の遅はるに依りて、皆假寐して眠れり。中夜呼ぶ聲ありて曰く、祝よ、新娶者來る、出でて彼を迎へよ。其時處女皆起きて、其燈を整へたり。愚なる者は智き者に謂へり、爾等の油を分け、我等に與へよ、蓋我等の燈は熄ゆ。智き者答へて曰く、恐らくは我等と爾等とに足らざらん、賣る者に往きて己の爲に買へ。彼等往きて買ふ時、新娶者來り、備を爲しし者、彼と偕に婚筵に入りて、門閉されたり。後其餘の處女も來りて曰ふ、主よ、主よ、我等の爲に啓け。彼答へて曰へり、我誠に爾等に語り、我爾等を識らずと。故に儆醒せよ、蓋爾等は何の日の時に人の子の來らんことを知らず。蓋彼は他の地に往かんとして、其諸僕を召し、彼等に其所有を託したる人の如し。



一人には銀五千、一人には二千、一人には一千、各其才能に應じて、之を興へて直に起ち行けり。

五千を受けし者は往きて、之を用ひて、他に五千を獲たり。二千を受けし者も亦他に二千を獲たり。惟一千を受けし者は往きて、之を地に埋めて、其主の銀を藏せり。久しくして、後此の諸侯の主歸りて、彼等と會計せり。五千を受けし者は他に五千を携へて就きて曰く、主よ、爾五千を我に託せり、視よ、我之を以て他に五千を獲たり。其主彼に謂へり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なり、我爾に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。

二千を受けし者も亦就きて曰へり、主よ、爾我に二千を託せり、視よ、我之を以て他に二千を獲たり。其主彼に謂へり、善い哉、善にして忠なる僕よ、爾は寡き者に於て忠なり、我爾に多くの者を督らしめん、爾が主の歡樂に入れ。一千を受けし者も亦就きて曰へり、主よ、我爾が嚴酷なる人にして、播かざりし處に獲り、散らざりし處に聚ひるを知れり、是を以て我懼れて往きて、爾の銀を地に藏せり、視よ、爾の物は爾之を有てり。主彼に答へて曰へり、惡しくして憎れる僕よ、爾は我が播かざりし處に

聖福音史

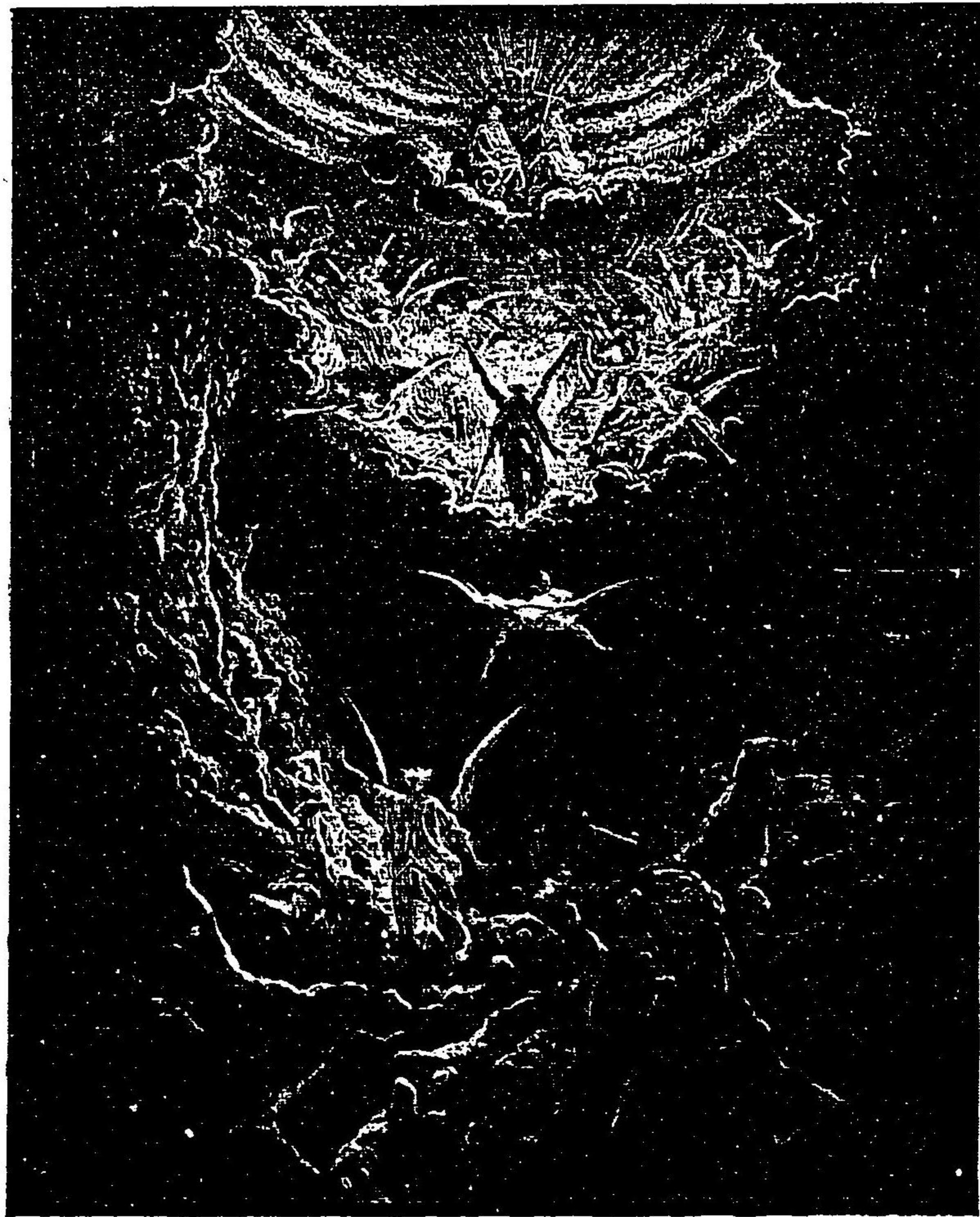
獲り、散らざりし處に聚ひるを知れり、故に我が銀を貿易者に託すべかりしなり、然らば我來りて、本銀と利とを受けしならん。故に彼より一千を取りて、十千を有てる者に興へよ。蓋凡そ有てる者には興へて、餘わらしめ、有だざる者よりは、其有てる物も亦はれん。無益なる僕を外の幽暗に投せよ、彼處に哀哭と切齒とあらん。言ひ畢りて呼べり、耳ありて聽くを得る者は聽くべし。

(一九四) 同上怖る可き審判の狀 (マ三―四六)

聖福音史

人の子は其光榮を以て、諸の聖なる天使と偕に來らん時、其光榮の寶座に坐し、萬民彼の前に集り、而して彼は、牧者の綿羊を山羊より別つが如く、彼等を相別ちて、綿羊を其右に山羊を其左に置かん。其時、王は右に在る者に謂はん、我が父に祝福せられし者よ、來りて、創世以來、爾等の爲に備へられたる國を嗣げ。蓋爾等我が飢ゑし時、爾等我が食はせ、我が渴きし時、我が飲ませ、我が旅せし時、我を宿らせ、我が裸なりし時、我に衣せ、我が病みし時、我を顧み、我が獄に在りし時、我に來れり。時に義人等彼に答へて曰はん、主よ、我等何時、爾の飢うるを見て、食はせ、或は渴くと





世の審判の状  
(上の章四十九頁第)

見て、飲ませしか。何時爾の旅するを見て宿らせ、或は裸なるを見て、衣せしか。何時爾の病み、或は獄に在るを見て、爾に來りしか。

王彼等に答へて曰はん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を我が此の至ど、小き兄弟の一人に行ひしは、即我に行ひしなり。

其時、又左に在る者に謂はん、詛はれし者よ、我を離れて、惡魔及び其使等の爲に備へ

られたる、永遠の火に往け。蓋我が飢ゑし時、爾等我に食はせず、我が渴きし時、我に飲ませず、我が旅せし時、我を宿らせず、我が裸なりし時、我に衣せず、我が病み、又は獄

に在りし時、我を顧みざりき。

時に彼等も答へて曰はん、主よ、我等何時、爾の飢ゑ、或は渴き、或は旅し、或は裸なる、或は病み、或は獄に在るを見て、爾に事へざりしか。

其時、彼等に答へて曰はん、我誠に爾等に語ぐ、爾等が之を此の至ど、小き者の一人に行はざりしは、即我に行はざりしなりと。

此等の者は、永遠の苦に往き、義人等は、永遠の生命に往かん。

(二九四) 十字架に釘せらるる三日前の主ハリストス。



(マトフエイニ六ノ一三二) カニ一ノ三七一三八。

主イエス悉く此等の言を竟りて、其門徒に謂へり、爾等知る、二日の後は、逾越節なり、人の子は十字架に釘せらるる爲に付されん。

主イエスは晝は殿に在りて、教を宣べ、夜は殿及び街を出でて橄欖山或はワフアニヤに宿れり。民皆朝早く殿に來り、彼に就きて聴けり。

(二九五)

主を殺さんとのシネドロオンの謀議。

(マトフエイニ六ノ三二五、イコノ一四ノ一三二)。

除酵節即逾越と名づくる節は近づけり。其時、司祭諸長と學士等と民の長老等とはカイアフと名づくる司祭長の中庭に集り、如何に主イエスを殺さんと謀れり。詭計を用ひて主イエスを執へて、之を殺さんと謀れり。惟日へり、節期に於てすべからず、恐らくは民の中に亂は起らん。

(一九六)

ワフアニヤのシモンの宅に於る晚餐。(マトフエイニ六ノ六一)。

然るに、ワフアニヤに於て、主の爲に晚餐を設けられたり。主イエス、ワフアニヤに於て、癩者シモンの家に在りし時、一の婦、價貴き香膏を盛れる玉の盒を携へ、彼の席坐



に就きて、其首に沃げり。

門徒之を見て、愠りて曰へり、此の糜費を爲すは何の爲ぞ、蓋此れ銀三百餘の價に賣りて、貧しき者に施すを得しならん。乃婦を咎めたり。

主イエスマス之を知りて、彼等に謂へり、何ぞ婦を擧す之を舍け、彼は我が爲に善き功を爲せり。蓋貧き者は常に爾等と借にし、爾等欲する時之に善を行ふを得、我は常に爾等と借にするにあらず。彼は能する所を行へり、即我が體に膏ぬりて、之を葬に備へたり。我誠に爾等に語ぐ、全世界の中凡そ此の福音の傳へられん處には、此の婦の爲しし事も述べられて、其記念と爲らん。

(二九七) 主を賣りしイウダ。(マトフエイニ六ノ一四一―一六〇。マルコ一四ノ三六。)

時にサタナは十二の一なるイウダ稱して、イスカリオトと云ふ者に入れり。彼主イエスマスを付さん爲に、司祭長及び庶司に往きて曰へり、爾等我に幾何と與へんと欲するか、我彼を爾等に付さん。彼等聞きて喜び、銀を彼に與へんことを約したれば、彼は如何にして好き機に於て之を付さんと謀れり。

聖 福 音 史

(二九八) 機密の晩餐。―逾越節の準備。

(マトフエイニ六ノ一七一―一九。マルコ一四ノ二二。)

逾越節の節筵の前に、除酵節の首の日、即逾越節の羔を宰る時、門徒主イエスマスに謂ふ、我等が何處に爾の爲に逾越節筵を備へんことを欲するか。主イエスマス二門徒ベトム及びイオアンを遣して曰へり、往きて我等が食せん爲に、逾越節筵を備へよ。彼等曰へり、何處に之を備へんことを欲するか。

彼は之に謂へり、市に往け、視よ、爾等が城に入る時、水と盛れる瓶を携ふる人、爾等に遇はん、之に隨ひて、其入る所の家に入りて、家の主に語げよ、師、爾に謂ふ、我が門徒と借に逾越節筵を食すべき室は何處に在るか。彼爾等に敷き飾りたる大なる機密を示さん、彼處に備へよ。

門徒出でて、城に來りしに、其言ひし若き事に遇へり、乃逾越節筵を備へたり。

(二九九) 機密の晩餐―其始め。(マトフエイニ六ノ一四一―一四四。)

暮に及びて、彼十二門徒と借に備へられたる室に、席坐せり。時至りて、主イエスマス席坐し、十二使徒彼と借にせり。彼等に謂へり、我は苦を受くる先に、此の逾越節筵





ОМОВЕНІЕ НОГЪ.

主が門徒の足を洗ひ給ふ  
(第百二章)

福音史

を爾等と偕に食せんことを甚望めり。蓋我爾等に語り我復之を食せずして其神の國に成るに至らん。乃爵を執りて感謝して曰へり此を取りて互に分て。蓋我爾等に語り我復葡萄の實より飲ますして神の國の臨むに至らん。

(二〇〇) 同上。主門徒の足を洗ひ給ふ。(イオア一三)。

其後主イエス既に己が此の世を離れて父に近く時の至りしを知りて世に在る己に属する者を愛して終に至るまで之を愛せり。晚餐の時惡魔己にシモンの子イウダ・イスカリオドの心に彼を賣る意を入れしに主イエスは父が萬物を其手に授け且己が神より出でて亦神に近くを知りて晚餐より起ち其衣を釋き手巾を取りにて自ら帶にし次ぎて水を盥に盤りて始めて門徒の足を濯ひ帶にしたる手巾を以て之を拭へり。

シモン・ペトルに來れるに彼曰く主よ爾我が足を濯ふか主イエス之に答へて曰へり我が行ふ所は爾今知らず後に之を悟らん。ペトル彼に謂ふ爾永く我が足を濯はざらん。主イエス答へて曰へり若し我爾を濯はせば爾は我と分なし。シモン・ペトル彼に謂ふ主よ止我が足のみならず乃亦手と首と。主イエス之に謂



聖 福 音 史

ふ既に洗はれたる者は、足の外に濯ふを要せず。蓋し身皆潔し、爾等も潔し、然れども、  
く然るには非ず。蓋し彼は己を濯らんとする者を知れり、故に盡く深きには非ずと  
云へり。

既に彼等の足を濯ひて己の衣を衣復、席座して、彼等に謂へり、我が爾等に行ひし事  
を知るか。爾等我を呼びて師と爲し、主と爲す、爾等の言ふ所善し、蓋し我は是なり。

故に若し我主又師たるに、爾等の足を濯ひしならば、爾等も互に足を濯ふべし。蓋し  
我爾等に模範を興へたり、我が爾等に行ひし如く、爾等も行はん爲なり。

我誠に誠に爾等に語り、僕は其主より大ならず、使者は之を遣しし者より大ならず。  
爾等若し此を知りて、之を行はば、福なり。

我盡く爾等を指して言ふに非ず、我は選びたる者を知る。然れども、聖書の言ふ所  
に應ふを致す云く、我と與に餅を食ふ者は、我に向ひて其題を擧げたりと。未だ成

らざる先に、我預め、爾等に謂ふ、其成るに及びて、爾等の是れ我なりと、信せん爲なり。  
我誠に誠に爾等に語り、我が遣す者を接くる者は、我を接くるなり、我を接くる者は、  
我を遣しし者を接くるなり。



(二〇二) 同上—主己を付す者を告げらる。

(マトフエニ二六ノ二一—二五。イオアン一三ノ二一—二九。)

主イエス之を言ひし後、既に席坐して食する時、主イエス心傷みて證して曰へり、我誠に誠に爾等に語く、爾等の中の一人は我を賣らん、視よ、我を賣る者の手は我と偕に席上に在り。

聖 福 音 史

門徒相視て、其誰を指して言ふかと異めり。彼等憂ひて、一一彼に詣へり、是れ我に非ずや。又他の者云ふ、是れ我に非ずや。答へて曰へり、十二の中の一、我と偕に盃に蘸する者はなり。人の子は逝く之を指して録されしが如し、惟人の子を賣る者は禍なる哉、斯の人生れざりしならば、彼の爲に善かりしならん。彼と賣るイウダも問ひて曰へり、夫子、是れ我に非ずや。曰く、爾言へり。然るに他の門徒は、之に心を留めず、又互に誰か此を爲さんとすると問へり。門徒の一、主イエスの愛せし者は主イエスの懷に倚りて席坐せり。シモンベトル、彼に首を以て意を示して、其言ふ所の誰たるを問はしめたり。彼は主イエスの何に就きて言ふ、主よ、是れ誰なるか。主イエス答へて曰く、我が餅の片を煎して與へんとする者はなり。乃片を煎して、シモンの子イウダ、イスカリオトに與へたり。

聖 福 音 史

片を受けし後に、サナタ彼の中に入れり。主イエス彼に謂ふ、爾が爲す所の事は、速に之を爲せ。然れども席坐する者は、一も且何の意を以て之を言ひしを悟らざりき。蓋イウダが金匣を管れるに因りて、或者は、主イエス彼に、我等が節筵に需めるべき物を市へて云ひ、或は貧しき者に何をか施さしむると意へり。彼は片を受けて、直に出でたり、時正に夜なり。

(二〇三) 聖體血の機密を立てらる。

(マトフエニ二六ノ二六—二九。マルコ一四。)

彼等が食する時、主イエス餅を取り、祝福して之を擘き、彼等に與へて曰へり、取りて食へ、是れ我の體なり。爾等の爲に付さるる者なり、爾等此を行ふて、我を記念せよ。又爵を取り、感謝して彼等に與へしに、皆之を飲めり。此の爵は、乃新約爾等の爲に流さるる我が血を以て立つる者なり。



我爾等に語り、今より後我復此の葡萄の實より飲ませして我が父の國に於て爾等と偕に新しき者を飲む日に至らん。

(三〇三) 同上、誰か大なる。(三四一三〇)。

其處にて門徒等の中に孰か大なると互に争ふことあり。彼は之に謂へり、諸王は其諸民を主り、民の上に權を執る者は恩主と稱へらる。然れども爾等は斯くあるべからず、乃爾等の中に大なる者は、小き者の如く、首たる者は、役はるる者の如くなるべし。蓋孰か大なる席坐する者か、役はるる者か、席坐する者に非ずや、然れども

聖福音史

我は爾等の中に在りて役はるる者の如し。爾等我が患難の中に於て恒に我と偕にせり、我も亦爾等に國を遺し予ふ、我が父の我に遺し予へしが如し、爾等が我が國に於て、我が席に食飲し、且位に坐して、イメライの十二支派を審判せん爲なり。

(三〇四) 告別の教訓、一教訓の始め。(イオ一三三)。

主イエス曰く、今人の子は榮せられたり、神も亦彼の中に榮せられたり。若し神は彼の中に榮せられしならば、神も亦彼を己の中に榮せん、且速に彼を榮せん。



機 窓 の 晩 餐 (卷二百二第)





聖 福 音 史

小子よ、我向暫時爾等と偕にす、爾等我を尋ねん而して我が會てイウデヤ人に、我の往く所には爾等來る能はずと云ひし如く、今爾等にも亦云ふなり。我新なる誠を爾等に與ふ、即爾等相愛すべし、我が爾等を受するが如く、爾等も是くの如く相愛すべし。爾等若し相愛せば、人皆此に由りて、爾等の我が門徒たるを知らん。

シモンペトル彼に謂ふ、主よ、爾何にか往く。主イエスス之に答へて曰へり、我の往く所には、爾今我に従ふ能はず、然れども後我に従はん。ペトル彼に謂ふ、主よ、我胡爲れぞ、今爾に従ふ能はざる、我爾の爲に我が生命を捐てん。主イエスス之に答へて曰へり、爾の生命を我が爲に捐てんか、我誠に誠に爾に語く、雞の鳴かざる前に、爾三次我を諱まん。

(三〇五) 同上、門徒を慰めらる。(イオア一三・一四)

爾等の心擾るる母れ、神を信じ、亦我を信せよ。我が父の家に第宅多し、然らずば、我爾等に言ひしならん、我往きて、爾等の爲に所を備へん。往きて、爾等の爲に所を備へば、復來りて、爾等を接けて、我に就かしめん。



我が居る所に爾等も居らん爲なり。  
我が何處に往くを、爾等知り、其道をも知る。父に謂ふ、主よ、我等は爾の何處に往くを知らず、焉ぞ其道を知るを得ん。主よ、我は道なり、眞實なり、生命なり、人若し我に由らずば、父に來るなし。爾等若し我を識らば、我が父をも識らん。今より爾等彼を識り、且彼を見たり。

聖 福 音 史

フリップ彼に謂ふ、主よ、我等に父を示せ、然らば我等に足る。主よ、我は己を我等に足る。フリップよ、我斯く久しく爾等と偕にするに、爾未だ我を識らざるか。我を見し者は、父を見しなり、如何ぞ爾我等に父を示せと云ふ。我の父に居り、父の我に居ることを、爾信せざるか。我が爾等に言ふ所の言は、己に由りて言ふに非ず、我に居る父は、彼事を行ふなり。爾等我が父に居り、父も我に居ると云ふを、我に信せよ、然らずば、其事に縁りて我に信せよ。  
我誠に誠に爾等に語り、我を信する者は、我が行ふ所の事を、彼も亦行はん、且此より大なる者を行はん、蓋我は我が父に往く。爾等凡そ我が名に因りて求めん者は、我之を行はん、父が子の中に榮せられん爲なり。爾等の我が名に因りて求めん者は、



我行はん。  
爾等若し我を愛せば、我が誠を守れ、我父に求めん、彼は別に憐恤者を爾等に與へて、世世に爾等と偕に居らしめん、即眞實の神にして、世は彼を接くる能はず、其彼を見ず、又彼を識らざる故なり、爾等は彼を識る、蓋彼は爾等と偕に居り、且爾等の裏に在らん。

聖 福 音 史

我爾等を捨てて孤子とせず、我爾等に來らん。尙頃くして、世は復我を見ず、然れども、爾等我を見ん、蓋我は生く、爾等も亦生きん。其日に爾等は、我が父に居り、爾等の我に居り、我も爾等に居るを知らん。我が誠を有ちて之を守る者は、是れ即我を愛する者なり、我を愛する者は、我が父に愛せられん、我も彼を愛し、且己を彼に顯はさん。  
イウダ、イスカリオトならざる者、彼に謂ふ、主よ、胡爲れど爾は己を我等に顯さんと欲して、世には然せざる。主よ、我は己を我等に顯さんと欲して、我が父も彼を愛せん、且我等彼に來りて、彼に住居を爲さん。我を愛せざる者は、我が言を守らず、爾等が聞く所の言は、我が言に非ず、乃我を遣しし父の言な



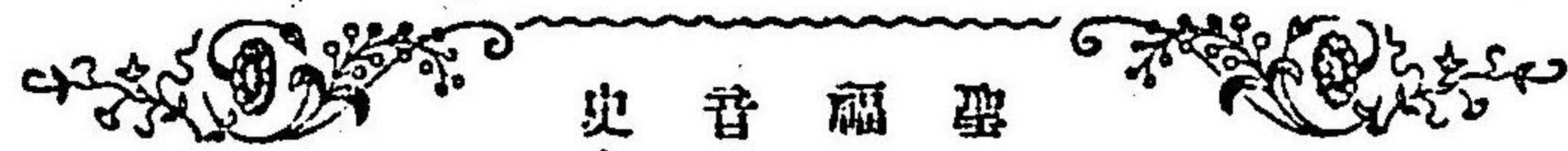




聖福音史

我爾等と偕に在りて、此を爾等に言へり。 撫恤者即聖神、父が我の名に縁りて遣さ  
 んとする者は、彼凡の事を爾等に教へ且我が爾等に言ひし事を皆爾等に記念せし  
 めん。  
 我平安を爾等に遣す、我が平安を爾等に與ふ、我が爾等に與ふるは、世の與ふるが如  
 きに非ず、爾等の心擾るる母れ、又懼るる母れ。 我往きて復爾等に來らんと、我が言  
 ひしことは、爾等之を聞けり。 爾等若し我を愛せば、我父に往くと云ひしに縁りて  
 喜ばん蓋我が父は我より大なり。  
 我今事の未だ成らざる先に、爾等に言へり、其成らん時に、爾等の信せん爲なり。 我  
 既に爾等と語らんこと多からず蓋此の世の君は來る、彼は我の中に有つ所なし。  
 然れども世の我が父を愛し、父が我に命せし如く行ふを知らん爲に、起ちて此より  
 往かん。  
 然れども尙此處にて教訓を續けられたり。

(二〇六) 同上—指導の教訓。(イオア一七五)。



聖福音史

我は眞の葡萄の樹、我が父は園師なり。 凡そ我に在りて實を結ばざる枝は、彼之を  
 去り、凡る實を結ぶ者は、之を潔む、其益繁く實を結ばん爲なり。 爾等既に我が爾等  
 に語りし言に由りて、潔められたり。 爾等我に居れ、我も爾等に居らん。 枝若し葡  
 萄の樹に居らずば、自ら實を結ぶ能はず、爾等も若し我に居らずば、亦是くの如し。  
 我は葡萄の樹、爾等は枝なり、我に居り、我も彼に居る所の者は、斯の者多くの實を結  
 ぶ蓋爾等我無くしては何事をも行ふ能はず。 人若し我に居らずば、枝の如く外に  
 棄てられて枯る、此くの如き枝を集めて、火に投ず、此れ乃焚く。 爾等若し我に居り、  
 我が言爾等に居らば、凡そ望む所を求めよ、然らば爾等に成らん。 爾等若し多くの  
 實を結ばば、我が父は此に由りて榮せられん。 爾等乃我が門徒と爲らん。  
 父の我を愛するが如く、我も爾等を愛す、爾等我が愛に居れ。 爾等若し我が誠を守  
 らば、我が愛に居らん、我が父の誠を守りて、其愛に居るが如し。 我が此を爾等に語  
 りしは、我が喜の爾等に居り、爾等の喜の全からん爲なり。  
 我が爾等を愛するが如く、爾等相愛すべし、此れ我の誠なり。 人其友の爲に生命を  
 捐つるは、愛此より大なるはなし。



爾等若し我が爾等に誠むる事を行はば、即我が友たり。我既に爾等を僕と曰はす、蓋僕は其主の行ふ所を知らず、乃爾等を友と曰へり、凡う我が父より聞きし所を爾等に告げしに誤る。

爾等我を選びしに非ず、我は爾等を選び、爾等を立てたり、爾等が往きて實を結び且爾等の實を存せん爲め、爾等が凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん爲なり。

史音福聖

我此を爾等に誠む、爾等相愛すべし。世若し爾等を惡まば、爾等に先だちて我を惡めりぞ知れ。爾等若し世に屬せば、世は己に屬する者を愛せん、然れども爾等は世に屬せず、乃我は爾等を世より選べり、此に由りて世は爾等を惡む。我が嘗て爾等に僕は其主より大ならずと云ひし言を憶へ。人若し我を容遂せば、爾等をも容遂せん、若し我が言を守らば、爾等の言をも守らん。然れども是皆我の名に因りて、爾等に行はん、我を遣しし者を識らざる故なり。我若し來りて、彼等に言はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今は其罪を辭するを得ず。我を惡む者は我が父をも惡む。我若し彼等の中に、他の者の未だ爲さざ

りし事を行はざりしならば、彼等罪なからん、然れども今彼等は我及び我が父を己に見、且惡めり。是くの如く、彼等の律法に故なくして我を惡めりぞ録せる言應へり。我が父より爾等に遣はさんとする撫恤者、眞實の神父より出づる者は來らん時、彼等の事を證せん。爾等も亦證せん、始より我と偕に在るに因りてなり。

(三〇七) 同上 | 約束 (一ノ一三三三)

史音福聖

我が此を爾等に語りしは、爾等の蹟かざらん爲なり。人爾等を會堂より逐はん、且凡う爾等を殺す者は、此を以て神に奉事すと思ふ時至らん。此等の事を行はんとするは、父と我とを識らざるに因りてなり。然れども我が此を爾等に語りしは、爾等が時の至るに及びて、我が此を爾等に言ひしを憶ひ起さん爲なり、初より此を爾等に言はざりしは、爾等と偕に在りし故なり。

今我を遣しし者に往く、而して爾等の中我に何に往くと問ふ者なし。惟我が此を爾等に語りしに因りて、憂は爾等の心に盈てり。然れども我眞を爾等に語り、我が往くは爾等の爲に益あり、蓋若し我れ往かずば、撫恤者爾等に來らざらん、我往かば、



彼を爾等に遣さん。彼來りて罪に於て、義に於て、審判に於て世を責めん。罪に於ては、其我を信せざるに因りてなり、義に於ては、我は我が父に往き、爾等復我を見ざらんとするに因りてなり、審判に於ては、此の世の君の審判せられしに因りてなり。我尙多く爾等に言ふべき事あれども、爾等今容る能はず。然れども、彼即眞實の神來らん時、爾等を凡の眞實に導かん。蓋彼は己に由りて言はんとするにあらず。乃、聖聞かんとする事を言はん、且將來の事を爾等に示さん。彼は我を榮せん。蓋我に屬する者より取りて、爾等に示さん。凡そ父の有つ所の者は、我に屬す。故に我彼は我に屬する者より取りて、爾等に示さん。曰へり。

史 音 福 聖  
 頃して爾等我を見ざらん、復頃して我を見ん、蓋我父に往く。是に於て其門徒の成者相語りて曰へり、彼が我等に頃して我を見ざらん、復頃して我を見ん、且我父に往くと云ふは、是れ何ぞや。故に曰へり、彼が頃と云ふは、此れ何事ぞや、我等其言ふ所を知らず。

主イエスは其己に問はんと欲するを知りて、彼等に謂へり、我が頃して我を見ざらん、復頃して我を見んと云ひしを、爾等相尋ぬるか。我誠に誠に爾等に語り、爾等

は、哭き哀まん世は喜ばん、爾等は憂へん、然れども、爾等の憂は變じて喜となり。婦は産むに及びて、憂を懐く、其期至りたればなり、然れども、子を生みし後は、喜に因りて復苦を憶はず、人世に生れたればなり。是くの如く、爾等も今憂を懐く、然れども、我復爾等を見ん、而して爾等の心は喜ばん、且其喜を爾等より奪ふ者なし。其日に於て、爾等我に問ふ所なからん。我誠に誠に爾等に語り、凡そ我が名に因りて父に求むる所は、彼爾等に與へん。今に至るまで、爾等我が名に因りて求むる所なかりき、求めよ、然らば得ん、爾等の喜の全からん爲なり。我譽を以て此等の事を、爾等に語り、然れども、復譽を以て爾等に語らず、乃明に父の事を、爾等に示す時至らん。其日に於て、爾等我が名に因りて求めん、而して我爾等の爲に、父に願はんと曰はず、蓋父親ら、爾等を愛す、爾等が我を愛し、且我が神より出でしことを、信せしに因りてなり。我は父より出でて、世に來れり、復世を離れて、父に往く。

其門徒彼に謂ふ、視よ、今爾は明に語りて、一も譽を言はず。今我等は爾が知らざる所なく、且人の爾に問ふを待たざるを知る、此に縁りて我等は爾が神より出でたる



を信す。

主イエス彼等に答へて曰へり、今信するか、視よ、時は至る、今日に至れり、爾等各其所に散じて、我を獨遣さん、然れども我獨に非ず、蓋父我と偕に在るなり。我が此を爾等に語りしは、爾等が我に在りて平安を有らん爲なり。世に在りて爾等患難を受けん、然れども勇めよ、我は世に勝てり。

(二〇八) 救主の神父に對しての祈禱 (イオアン一七)

主イエス此を言ひ竟りて、其目を天に擧げて曰へり。  
父よ、時至れり、爾の子を榮せよ、爾の子も爾を榮せん爲なり、蓋爾は彼に凡の肉體の上の權を與へたり、彼が凡を爾の彼に與へし者に永遠の生命を與へん爲なり。永遠の生命とは、即爾獨一の眞の神及び爾が遣ししイエスハリストスを知ること是なり。我已に爾を地に榮し、爾が我に與へて行はしむる事を成せり。今爾父よ、我をして爾に在りて榮を享けしめよ、即創世の先に我が爾に在りて有ちたる榮なり。爾が世の中より我に與へし人人に我爾の名を顯はせり、彼等は爾に屬し、爾彼等を

聖 福 音 史

我に與へたり、彼等爾の言を守れり。今彼等は凡を爾が我に與へし者皆爾よりするを知れり。蓋我は爾が我に與へし言を彼等に與へたり、彼等之を受け、且我が爾より出でしを誠知り、又爾が我を遣ししを信せり。我は彼等の爲に祈る世の爲に祈らず、乃爾が我に與へし者の爲なり、蓋彼等は爾に屬す。凡そ我に屬する者は爾に屬し、爾に屬する者は我に屬す、我は彼等の中に榮せられたり。

我は是より世に在らず、彼等は世に在り、我爾に往く、聖なる父よ、爾が我に與へし者は、爾の名に因りて之を守りて、彼等を我等の如く一と爲らしめよ。我彼等と偕に世に在りし時、爾の名に因りて彼等を守れり、爾が我に與へし者は、我之を守り、其中一も亡びず、惟沈淪の子は亡びたり、聖書の應ふを致す。

今我爾に往く、我世に在りて之を言ふ、彼等が己の中に我の全き喜を有らん爲なり。我爾の言を彼等に與へたり、而して世は彼等を惡めり、蓋彼等は世に屬せず、我の世に屬せざるが如し。我が祈るは、爾が彼等を世より取らん爲に非ず、乃彼等を惡より護らん爲なり。彼等は世に屬せず、我の世に屬せざるが如し。爾の眞實を以て、彼等を聖にせよ、爾の言は眞實なり。爾が我を世に遣しし如く、我も彼等を世に遣



はせり。我彼等の爲に己を聖にす、彼等も眞實を以て聖にせられん爲なり。  
我惟彼等の爲にのみ祈るにわらず、乃亦彼等の言に縁りて、我を信する者の爲なり、  
願くは皆一と爲らん、父よ、爾が我に在り、我も爾に在るが如く、願くは彼等も我等に  
在りて一と爲らん、世が爾の我を遣ししを信せん爲なり。亦爾が彼に與へし榮を  
我彼等に與へたり、我等の一なるが如く、彼等の一と爲らん爲なり。我は彼等に在  
り、爾は我に在り、彼等をして一に成全せしめん爲、且世が爾の我を遣し又我を愛す  
る如く、彼等を愛することを知らん爲なり。

父よ、我は爾が我に與へし者の、我が居る所に我を偕に居らんことを望む、彼等が我  
の榮を見ん爲なり、即爾が我に與へし榮なり、蓋爾は創世の先より我を愛せり。  
義なる父よ、世は爾を識らず、然れども我は爾を識れり、彼等も爾が我を遣ししを識  
れり、我爾の名を彼等に示せり、復之を示さん、爾が我を愛する愛は彼等に在り、我も  
彼等に在らん爲なり。

(二〇九) 晩餐の終結 (三十一—三三)。

「バスハ」の筵より出るの前に、主ペトルに向ひて言へり、シモンよ、シモンよ、視よ、サタ

史音福聖

ナ爾等を麥の如く簸はんことを求めたり。然れども我爾の爲に爾の信の盡きざ  
らんことを禱れり、而して爾後に轉じて爾の兄弟を堅めよ。對へて曰へり、主よ、我  
爾と偕に獄にも死にも往かんことを備へたり。彼曰へり、ペトル、我爾に語く、今日  
鶏の鳴かざる先に、爾三次我を諱みて、識らずと言はん。  
次で又、主は凡ての門徒に曰へり、我が爾等を金囊も、行袋も履もなくして遣しし時、  
爾等缺けたることありしか。曰く、無かりき。彼曰へり、然れども今は金囊ある者  
は之を取れ、行袋も亦然り、劍なき者は、衣を賣りて之を買へ。  
蓋我爾等に語く、録して、罪犯者と偕に算へられたりと云へることも、我に於て應ふ  
べし、蓋我を指して録されし事は終あり。  
彼等曰へり、主よ、視よ、此に二の劍あり。彼曰へり、足れり。

(二一〇) ゲフシマニヤに赴かる。

(イオコフエイレ二六ノ三〇—三三、同、一八ノ一、カニ二二ノ三九)。

主よ、イスス、此を言ひて、後又門徒に向ひて曰へり、立ちて、此處より往かん。而して  
既に詠ひて、其門徒と偕に例の如く橄欖山に往けり、其門徒も彼に従へり。



途に於て、主は其門徒に謂ふ、爾等皆今夜我の爲に顯かん蓋録せるあり、我牧者を棄  
たん、而して羊は散らんと。我が復活の後、我爾等に先だちてガリレヤに往かん。  
ペトル彼に謂へり、皆蹟くども、我は然らざらん。主イエス彼に謂ふ、我誠に爾に  
語く、今日此の夜、鶏の再鳴かざる先に、爾三次我を諱まん。

(三一二) 主の苦み、一辭の事の祈禱。

(マトフイニ六ノ三六―四六、マルコ一四ノ三二―四、  
二ノ二二ノ四〇―四六、イオアン一八ノ一一―二二)。

其時、主イエス門徒と偕に、ゲフシマニヤと名づくる處に來れり、彼處に圍わり、彼  
及び彼の門徒は其中に入れり。彼を賣るイウダも此の處を識れり、若し主イエス  
厭其門徒と偕に彼處に集りたり。  
主は常に至る處に來りて、其門徒に謂へり、爾等此に坐して、我が彼處に往きて祈る  
を待て。祈禱して誘惑に入るを免れよ。

乃、ペトル及びゼブデイの二人の子、イアコフ、イオアンを携へて、憂、哀、畏を催せり。  
又彼等に謂ふ、我が靈憂ひて死に近づけり、爾等此に在りて、儆醒せよ。  
自ら石の投げらるる程に、彼等を難れ、膝を屈め、地に伏し、若し能すべくば、斯の時の

彼を過ぎんことを祈りて曰へり。我が父よ、若し能すべくば、願はくは此の辭は我  
を過ぎん、然れども我が欲する如くならずして、爾の欲する如くなるべし。  
「アウフ、父よ、爾には能せざる所なし、此の辭をして我を過ぎしめよ、然れども我が欲  
する所成らずして、爾が欲する所成るべし。」

父よ、嗚若し爾此の辭をして我を過ぎしめんことを肯じたらんには、然れども我  
の旨成らずして、爾の旨成るべし。

天使は天より現はれて、彼を堅めたり、彼痛く哀みて、禱ること愈切なり、其汗は血の  
滴の如く地に下れり。

祈禱より起きて、門徒に來り、其憂に依りて、寝ぬるを見て、ペトルに謂ふ、シモンよ、爾  
寝ぬるか、一時も儆醒する能はざりしか。又門徒等に謂ふ、爾等斯く一時も我と偕  
に儆醒する能はざりしか。儆醒せよ、祈禱せよ、誘惑に入らざらん爲なり、神は勇め  
ども、肉體は弱し。

再往きて、復祈りて曰へり、我が父よ、若し此の辭、我之を飲ますして、我を過ぐる能は  
ずば、爾の旨成るべし。



返りて、彼等の復寝ぬるを見たり、其目倦みたればなり、彼等何を以て彼に對ふべきを知らざりき。

彼等を雜れて復往き、同じき言を言ひて、三次祈れり。

其時門徒に來りて、之に謂ふ、爾等尙寝ねて休むか、視よ、時は通づけり、人の子は罪人の手に付さる。起きよ、往かん、視よ、我を付す者は近づけり。

(二二二) 同上、主己を罪人の手に付さる。

(マトフ、イニ、六、四七、五、六、マルコ、一四、三、一、五〇。)

聖 福 音 史

此時、イウダは兵卒一隊を、及び司祭諸長と、ファリサイ等より下吏を受けて、炬と燈と兵器とを以て、此の處に來れり。

彼が尙言ふ時、視よ、民至り、十二の一、イウダと名つくる者、之に先だちて行き、劍と棒とを持てる多くの民、司祭諸長、學士等、及び長老等より遣されし者は、彼と偕にせり。イウダ、彼等を導きて、主イエイスに就きて接吻せんとせり。蓋此の號を彼等に與へたり、我が接吻せん者は、即斯の人なり。彼を執へて、慎みて之を曳けど、直に主イエイスに就きて曰へり、夫子、慶べよ、乃彼に接吻せり。主イエイス之に謂へり、友

よ、胡爲れぞ來れる、イウダよ、爾接吻を以て人の子を付すか。

次で、イウダと偕にせる者來りし時、主イエイスは、凡そ己に及ぼんとする事を知りて出でて、彼等に謂へり、爾等誰を尋ぬるか。彼に答へて曰へり、イエイスナゾレイなり、主イエイス、彼等に謂ふ、我は是なり。彼を賣るイウダも、彼等と偕に立てり。

主イエイスが我は是なりと言ひし時、彼等後へ退きて、地に仆れたり。復彼等に問へり、爾等誰を尋ぬるか。彼等曰へり、イエイスナゾレイなり。主イエイス答へて

曰へり、我爾等に我は是なりと謂へり、故に若し我を尋ぬるならば、此の衆を容して去らしめよ、彼が言ひし言に應ふを致す云く、爾が我に與へし者の中、我一人をも亡さざりきと。

聖 福 音 史

其時、イウダと偕せる者、其手を主イエイスに措きて、彼を捕へんとせり。

彼と偕に在りし者、事の及ぼんとするを見て、彼に謂へり、主よ、我等劍を以て撃たんか。時にシモンペトル、劍ありて、之を抜き、司祭長の僕を撃ちて、其右の耳を削げり。僕の名はマルホなり。

主イエイス答へて曰へり、此に至りて止めよ、乃其耳に捫りて、之を割せり。主イエ



聖福音史

ス彼に謂ふ、爾の劍を其處に歸せ、蓋凡そ劍を執る者は劍にて亡びん。或は爾は我今我が父に求めて、彼をして我に十二軍餘の天使を遣さしむること能はずと意ふか。然らば聖書に斯くあるべしと、言へること如何ぞ應はん。

主イエスは己に向ひ來れる司祭諸長と殿の庶司と長老等とに謂へり、爾等は盜賊に向ふ如く、劍と棒とを持ちて我を捕へん爲に出でたり。我日爾等と偕に殿に在りしに、爾等我に手を措かざりき、然れども今は爾等の時及び黑暗の勢なり。此れ皆成りしは、諸豫言者の書に應ふを致す。

是に於て兵卒と千夫長と、イウヂヤの下吏と、主イエスを執へて、之を縛れり。其時、門徒之を見て、彼を遺てて奔れり。

(二一三) 同上アンナの館に於ける主イエス。

(五四) カニニ六ノ五七―五八、マルコ一四ノ五一。

主イエスを執へたる者、彼を曳きて、園より司祭長の許に至れり。一の少き者裸體に布を纏ひて、彼に従ひしに、兵卒之を執ふ、少き者布を棄てて、裸體にして奔れり。先づ之をアンナに曳き至れり、善彼は是の歳司祭長たるカイアフ、

の岳父なり。カイアフ、即イウヂヤ人に議りて、一人民の爲に死するは益ありと、云ひし人なり。

シモンペトル及び他の一人の門徒、遠く主イエスに従へり、此の門徒は司祭長の識る所の者にして、主イエスと偕に司祭長の中庭に入り、ペトルは門の外に立てり。後司祭長の識る所の門徒は出でて、門を守る女に言ひて、ペトルを内に入れた

聖福音史

り。司祭長アンナは、主イエスに其門徒及び其教の事を問へり。主イエス彼に答へて曰へり、我明に世に語れり、我常に會堂及び殿、即イウヂヤ人の恒に集る所に於て教を宣べて、隠に語りしことなし。何ぞ我に問ふ、聽きし者に我が彼等に何を語りしを問へ、視よ、此の輩は我が言ひし事を知る。

彼が此を言ひし時、旁に立てる下吏の一人、主イエスの頬を批ちて曰へり、爾は司祭長に斯く對ふるか。主イエス彼に答へて曰へり、若し我が言ひし事悪しくば、其惡しき事を證せよ、若し善くば、何ぞ我を批つ。

已にして、アンナは彼を縛りたるまゝ、司祭長カイアフに送れり。



(二一四) 同上、カイアフアの法庭に於ける主イエイス。

(マテウイニ六ノ五九一六八。イェコ一四ノ五三六六。)

主イエイスを曳きて、司祭長に至りしに、彼處には司祭諸長、長老等、學士等、咸く集ま

れり。

司祭諸長、長老等及び全公會は、主イエイスを死に致さん爲に、彼に對する妄證を求めたれども、得ざりき、多くの妄證者就きたれども、得ざりき。蓋多くの者彼に對して妄證したれども、其證は符はざりき。

終に二の妄證者就きて曰く、斯の言へり、我は神の殿を毀ち、三日にして之を建つるを能す。我手にて造られたる此の殿を毀ちて、三日の中に手にて造られざる

他の者を建てんと。但し此の證も亦符はざりき。

是に於て司祭長中に立ちて、主イエイスに問ひて曰へり、爾答ふる所なきか、彼等が、爾に對して證する所如何、然れども彼默然として、一も答へざりき、乃司祭長は彼に向ひて謂ふ、我活ける神を以て爾に誓はしむ、我等に告げよ、爾は神の子ハリストスなるか。

聖福音史

主イエイス之に謂ふ、爾言へり、且我爾等に語ぐ、此より後爾等は人の子が大能の右に坐し、天の雲に乗りて來るを見ん。

其時司祭長己の衣を裂きて曰へり、彼は神を瀆せり、何ぞ復證者を求めん、視よ、今爾等は其神を瀆すを聞けり、爾等如何に意ふか、彼等答へて曰へり、死に當る。

是に於て或者は彼に唾し、又其面を掩ひて彼を擊ちて曰へり、預言せよ、下吏等も亦其頬を批てり。

既にして主を戶外に曳き出し、兵卒に警護せしめて朝に及べり。

(二一五) 同上、カイアフア主を諱ひ、(第一)イオアン福音に依る。

(イオアン一七。)

ペトル司祭長の館に入りし時、門を守る婢ペトルに謂ふ、爾も此の人の門徒の一に非ずや、彼曰く、然らず。

時に諸僕及び下吏等寒さに因りて火を焚き、彼に立ちて暖まり、ペトルも亦彼等と偕に立ちて煖まれり。

主アンの處より、同じ館内に在るカイアフアの家に移されし時、シモン、ペトルは尙



他の門徒と偕に燃き火に暖されり或彼に謂へり爾も其門徒の一に非ずや。彼  
みて曰へり然らず。  
司祭長の僕の一人、ペトルが耳を削きたる者の親戚曰く我爾が彼と偕に園に在る  
を見しに非ずや。ペトル復諱みたり。

(三一六) 同上、ペトル主を諱む。(第二) マトフェイ及びマルコ福音に  
依る。(マトフェイ二六ノ五八―七セ)。

史音福聖

ペトル遠く彼に隨ひて司祭長の中庭に至り其竟を觀ん爲に内に入りて下吏等と  
偕に坐せり。時にペトル外に中庭に坐せるに一人の婢彼に就きて曰く爾もガリ  
レヤのイエスと偕に在りき。之を謂てペトル乃外に前庭に出でたれば鷄鳴け  
り。  
彼が門を出づる時他の婢彼を見て彼處に在る者に謂ふ此の人もイエスナブレ  
イと偕に在りき。彼復諱みて誓ひて曰へり我其人を識らず。  
少頃ありて彼處に立てる者近づきてペトルに謂へり誠に爾も其黨の一人なり蓋  
爾の言語も爾を顯はす。其時彼は屈ひ且誓へり我其人を識らずと。

(三一七) 同上、ペトル主を諱む。(第三) ルカ福音に依る。  
(ルカ二二ノ五五―六二)。

其後、ペトル再中庭に入り火に對して座せり。司祭長の僕等が中庭に火を燃きて、  
共に座せし時、ペトルも其中に座したり。一人の婢彼が火に向ひて座せるを見之  
に目を注ぎて曰へり此の人も彼と偕にありき。然れども彼諱みて曰へり女よ我  
彼を識らず。

少頃ありて他の者彼を見て曰へり爾も彼等の一人なり、ペトル曰へり人よ然らず。  
約一時を過ぎて又一人言を力めて曰へり實に此の人も彼と偕にありき、蓋是れガ  
リレヤの人なり。然れどもペトル曰へり人よ我爾が言ふ所を識らず。尙之を言  
ふ時、忽鷄鳴けり。

主身を轉じて、ペトルに目を注ぎたれば、ペトル主の彼に、雞の鳴かざる先に、爾三次  
我を諱まんと云ひし言を憶ひ起して、外に出でて、痛く哭けり。  
(二一八) 番卒主を辱かしむ。(ルカ二二ノ六三―六五)。

主イエスを執れる者慮れて、彼を朴てり、其目を蔽ひて、其面を批ち問ひて曰へり、

史音福聖

主身を轉じて、ペトルに目を注ぎたれば、ペトル主の彼に、雞の鳴かざる先に、爾三次  
我を諱まんと云ひし言を憶ひ起して、外に出でて、痛く哭けり。  
(二一八) 番卒主を辱かしむ。(ルカ二二ノ六三―六五)。

主イエスを執れる者慮れて、彼を朴てり、其目を蔽ひて、其面を批ち問ひて曰へり、



豫言せよ爾を撃ちし者は誰ぞ。其他多くの事を謂ひて彼を誦れり。

(二一九)

主の苦み、主ピラトに付さる。

(マトフエニセノ一ニ。マルコ一五ノ一。ルカ二二。ハトフエニセノ一。同ニ三ノ一。イオアン一八ノ二八。)

平旦に及びて、司祭諸長と民の長老等と皆相會して、主イエスの事を議せり。之を死に致さん爲なり。彼等は主を其公會に曳きて、曰へり、爾はハリストスなるか、我等に告げよ。彼曰へり、我若し爾等に告げば、爾等信せざらん。若し爾等に問はば、爾等應へざらん。又我を釋さざらん。今より後人の子は神の大能の右に坐せん。彼等僉主に曰へり、然らば、爾は神の子なるか。彼答へて曰へり、爾等言ふ、我は神の子なり。彼等曰へり、何ぞ復證を求めん。蓋我等自ら其口より聞けり。其後衆皆起ちて、彼をカイアフアより公廨に曳き至り、方伯ピラトに付せり。

(三二〇)

ピラトの法廷に於ける主イエス。

(マトフエニセノ一ノ一。マルコ一五ノ二五。ルカ二二ノ一。イオアン一八ノ二八。三。)

主をピラトに曳き往きしは、時已に平旦なり。主を曳き往きし者は、公廨に入らざり。汚されざらん爲、即逾越節筵を食するを得ん爲なり。

ピラト出でて、彼等に謂へり、爾等何事を以て、此の人を誦ふるか。答へて曰へり、彼若し惡を行ふ者に非ずば、我等彼を爾に解さざりしならん。ピラト彼等に謂へり、爾等彼を取りて、爾等の律法に循ひて、彼を審判せよ。イウデヤ人之に謂へり、我等には人を死に處する權なし。是れ主イエスが如何なる死を以て死なんとするを指して、言ひし言に應ふを致す。ピラト彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。彼答へて曰へり、爾言ふ。

其時ピラト復公廨に入り、主イエスを召し、主イエス方伯の前に立ちしに、方伯彼に問ひて曰へり、爾はイウデヤ人の王なるか。主イエス彼に答へて曰へり、爾己に由りて之を言ふか、抑他の者が我の事を爾に言ひしか。ピラト答へて曰へり、我豈イウデヤ人ならんや。爾の民と司祭諸長とは、爾を我に解せり。爾何を爲ししか。主イエス答へて曰へり、我が國は此の世に屬せず。若し我が國此の世に屬せば、我が諸僕は戰ひて、我がイウデヤ人に付さるるを免れしめしならん。然れども、今我が國は此に屬せざるなり。ピラト彼に謂へり、然らば、爾は王なるか。主イエス答へて曰へり、爾言ふ、我は王なり。我此が爲に生れ、此が爲に世に來れり。即眞實の事



聖福音史

を證せん爲なり凡そ眞實に屬する者は我の聲を聴く。  
 ピラト彼に謂ふ眞實とは何ぞや。此を言ひて後復出でてイウヂヤ人に謂ふ我は  
 彼に「も罪あるを見ず。司祭諸長と長老等と彼を訟へしに、」も答へざりき。  
 ピラト復彼に問ひて曰へり爾答ふる所なきか。觀よ爾に對して證すること幾何ぞ。  
 主イイスス仍一言も答へざりき。ピラト奇むに至れり。  
 然れども彼等益奮ひて曰へり彼民を亂し、全イウヂヤに效へて、ガリレヤより始め、  
 此の處に至れり。ピラトはガリレヤと聞きて、此の人はガリレヤ人なるかを問ひ  
 既にして其イロドの權下に屬するを知りて彼を當時同じくイエルサリムに在り  
 しイロドに遣はせり。

(二二二) 同上。主イイスス、イロド王の前に曳かる。(八二二二)。

イロド、主イイススを見て甚喜べり。蓋久しく彼を見んと欲せり。彼の事を多く聞き、  
 且彼に由りて行はるる休徴を見んことを望みたればなり。故に多くの言を以て  
 彼に問ひたれども、彼は何を答へざりき。司祭諸長と學士等と立ちて、彼を訟ふ  
 ること甚切なり。然れどもイロドは其士卒と共に彼を侮り、且嘲弄して、彼に解な

る衣を衣せて、復彼をピラトに遣せり。是の日に於て、ピラト及びイロド互に親し  
 くなれり。蓋先には相讎たりき。

(二二二) ピラト、主を釋かんと力めて遂に得ず。

(マカニ三ノ一七ノ一五―二三ノ一八ノ三九―四〇)。

聖福音史

主イロドより還りし時、ピラトは司祭諸長有司等及び民を呼び集めて、彼等に謂へ  
 り、爾等は此の人を以て民を惑はす者と爲して、我に曳き至れり。視よ、我爾等が訟ふ  
 る所を以て爾等の前に審べて、此の人に「も罪あるを見ざりき。」イロドも亦然り、  
 蓋我之を彼に遣したれども、其中に「も死に當る事を得ざりき。」故に我答うちて、  
 之を釋さん。

蓋節筵の爲に一の囚を彼等に釋すべき事ありき。節筵には、方伯が民に一人の囚、  
 其欲する所の者を釋す例ありき。民は此の事を念ひ、聲を揚げて、常に彼等の爲に  
 行ひし如く爲さんことを求めたれば、ピラトは此の事を冤罪に座せる者の爲に利  
 用せんとせり。而して彼等に答へて曰へり、我が爾等にイウヂヤ人の王を釋さんて  
 どを欲するか。蓋司祭諸長が嫉妬に因りて彼を解ししを知れり。而して司祭の



諸長に同じ言を以て曰へり、爾等には逾越節に於て、我が爾等に一人を釋す例あり、故に我が爾等にイウデヤ人の王を釋さんことを欲するか。

方伯が審判座に座せる時、其妻人を遣して、之に謂へり、爾此の義人に何事をも爲す勿れ、蓋我今日夢の中に彼の爲に多く苦めり。是に由りて、ピラトの心は少しく民より離れたり、然るに司祭諸長と長老等とは民に唆めて、フラウワを釋し、主イエ

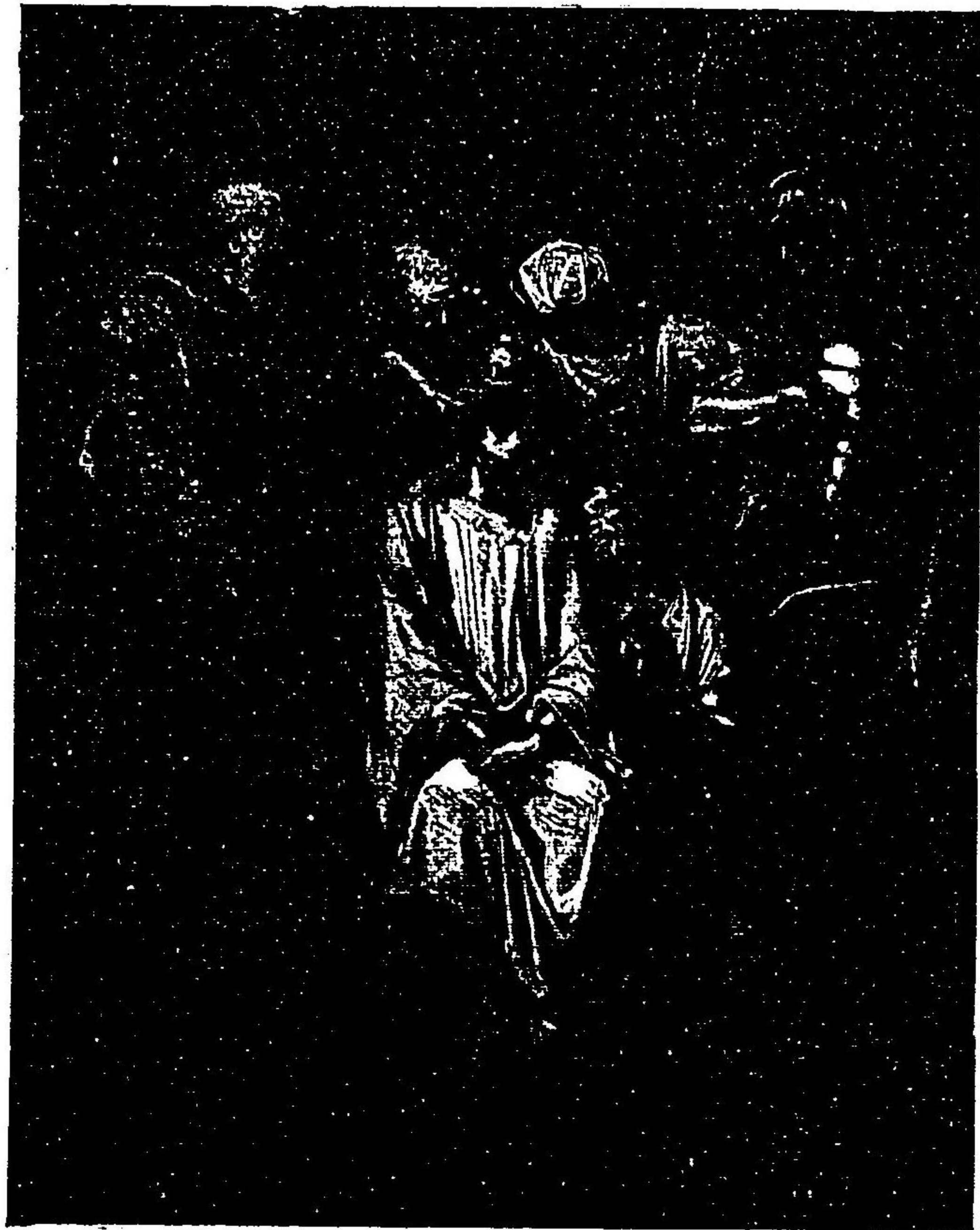
スを滅さんことを乞はしめたり。故にピラト更に答へを得んとて、民に向ひし時、衆民叫びて謂へり、彼に非ず、フラウワなりと。

此の人は城の中に亂を作し、人を殺ししに因りて、獄に下されたり。

ピラト、民の此の如き望みに困み、又彼等に問ひて曰へり、我れ爾等に誰をか釋さんことを欲するか、フラウワか又主ハリストスと名づくるイエスか。彼等又號びて曰へり、フラウワを釋せど。

ピラトは主イエスを釋さんと欲して、復聲を揚げたれども、彼等呼びて曰へり、彼を十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。

ピラト第三次曰へり、彼は何の悪を行しか、我一も其中に死に當ることを見ざりき。



冠の荆 (卒三十二百二第)



諸長に同じ言を以て曰へり爾等には逾越節に於て我が爾等に一人を釋す例あり、故に我が爾等にイウヂヤ人の王を釋さんことを欲するか。

方伯が審判座に座せる時其妻人を遣して之に謂へり爾此の義人に何事をも爲す勿れ蓋我今日夢の中に彼の爲に多く苦めり也。是に由りてピラトの心は少しく

民より離れたり然るに司祭諸長と長老等とは民に唆めてソラウツを釋し主イエ

ヌスを滅さんことを乞はしめたり。故にピラト更に答へを得んとて民に向ひし

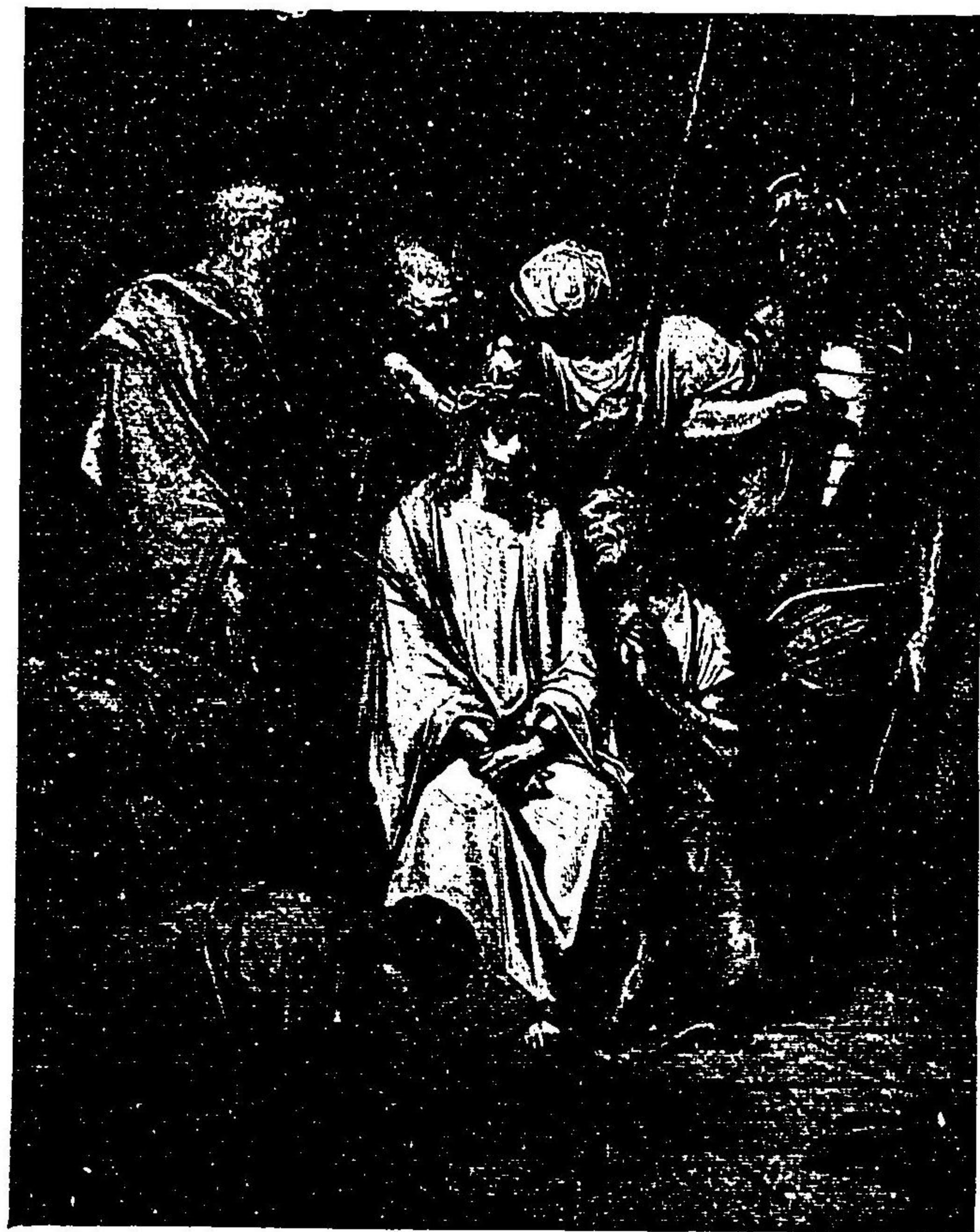
時衆民叫びて謂へり彼に非ずソラウツなりと。此の人は城の中に亂を作し人を殺ししに囚りて獄に下されたり。

ピラト民の此の如き望みに困み又彼等に問ひて曰へり我れ爾等に誰をか釋さん

ことを欲するかソラウツか又主ハリストスと名づくるイエヌスカ。彼等又號びて曰へりソラウツを釋せよ。

ピラトは主イエヌスを釋さんと欲して復辟を揚げたれども彼等呼びて曰へり彼

を十字架に釘せよ十字架に釘せよ。ピラト第三次曰へり彼は何の悪を行しか我一も其中に死に當ることを見ざりき。



冠の荆  
(章三十二百二第)



故に答うちて彼を釋さん。然れども彼等益聲を屬まして彼を十字架に釘せんことを求めたり。

彼等と司祭諸長との聲は勝てり。ピラト遂に其求の如く擬めて亂と殺人との爲に獄に下されたる人彼等が求めし者を釋せり。

(二二三) 同上、主を鞭つ。(マトフエニセノニセ一三〇、マルコ一五)。

聖 其時ピラト主イエスを取りて鞭てり。兵卒彼を曳きて中庭の内即公廨に至り、全營を集め、其衣を褫ぎて、絆糸袍を衣せ、棘の冕を編みて、其首に冠らせ、革を其右の手に持たせ、彼の前に跪きて、彼に戯れて曰へり、イウデヤ人の王慶べよ。又彼に唾し、革を取りて、其首を撃てり。

(二二四) 同上、視よ人なり。(イオアン二九)。

既にして、ピラト復外に出でて、彼等に謂ふ、視よ、我彼を曳きて、爾等の前に出だす。爾等が我の彼に、一も罪あるを見ざることを知らん爲なり。主イエス棘の冕を冠り、紫の袍を衣て、外に出でたり。ピラト彼等に謂ふ、視よ、人なり。司祭諸長と下吏等と彼を見て、號びて曰へり、十字架に釘せよ、十字架に釘せよ。



ピラト彼等に謂ふ、爾等彼を取りて、十字架に釘せよ。我彼に罪あるを見ず。イウ  
デヤ人答へて曰へり、我等に律法あり、我が律法に据れば、彼は死すべし。蓋己を神の  
子と爲せり。

聖 福 音 史

ピラト此の言を聞きて益懼れたり。復公廨に入りて、主イエスを以て謂ふ、爾は奚れ  
よりす。然れども主イエス彼に答を爲さざりき。ピラト彼に謂ふ、我に言はざ  
るか、爾豈我に爾を十字架に釘する權あり、亦爾を釋す權あるを知らざるか。主イ  
エス答へて曰へり、上より爾に與へられしに非ざれば、爾我に對して一も權ある  
なし、故に我を爾に解しし者の罪は更に大なり。  
是よりピラト彼を釋さんと謀れり。然れどもイウデヤ人號びて曰へり、爾若し此  
の人を釋さば、ケサリの友に非ず。凡る己を王と爲す者は、ケサリに叛く者なり。

(二二五) 同上、一裁判の宣告。

(マトフイニ二七ノ二四、一六。マルコ一五ノ一、一。ルカ二二ノ二五、イオアン一九ノ一、三、一六。)

ピラト此の言を聞きて、主イエスを外に曳き出だし、審判座に、リファストラトン、エ  
ウレノの言にガウワフと名づくる所に座せり。

聖 福 音 史

其日は逾越節の餅日にして、時は約六時なり。  
ピラトイウデヤ人に謂ふ、視よ、爾等の王なり。然れども彼等號びて曰へり、之を去  
れ、之を去れ、十字架に釘せよ。ピラト彼等に謂ふ、爾等の王を釘せんか。司祭諸長  
對へて曰へり、我等にはケサリの外に王なし。

ピラトは何事も益なく、惟亂の滋起るを見て、水を取りて、民の前に手を盥ひて曰へ  
り、我此の義人の血に對して罪なし、爾等自ら顧みよ。民皆對へて曰へり、其血は我  
等及び我等の子孫に歸すべし。

其時ワラウワを彼等に釋し、主イエスを鞭ちて、十字架に釘せん爲に付せり。

(二二六) コルゴフに曳かる。

(マトフイニ二七ノ三一、三二。マルコ一五ノ二〇、二一。ルカ二二ノ二六、二七。イオアン一九ノ一、一、一七。)

時に兵卒、主イエスをとり、其紫袍を褫き、彼の衣を衣せ、十字架に釘せん爲に彼を  
曳き往けり。  
彼己の十字架を負ひ出でて、禰の處にエウレノの言にコルゴフと名づくる所に  
至れり。



彼を曳き往く時或キリネヤの人シモンが田より來り過ぐるを執へ之に十字架を

負はせて主イエスに從はしめたり。

衆くの民は彼に隨ひ又多くの婦ありて彼の爲に哭き哀めり。主イエス彼等を

顧みて曰へり、イエルサリムの女よ、我の爲に哭く勿れ己及び爾等の子の爲に哭け、

蓋視よ、日至りて、人人曰はん、妊まざる者未だ産まざる胎未だ哺はせざる乳は福な

りと。其時人人山に對ひて我等の上に倒れよ、陵に對ひて我等を掩へと曰はん。

蓋若し青き木に斯く爲さば、枯木は如何にせられん。

主イエスと偕に亦二人の犯罪者を死に處せん爲に曳けり。

(三二七) 主の苦み、主十字架に釘せらる。

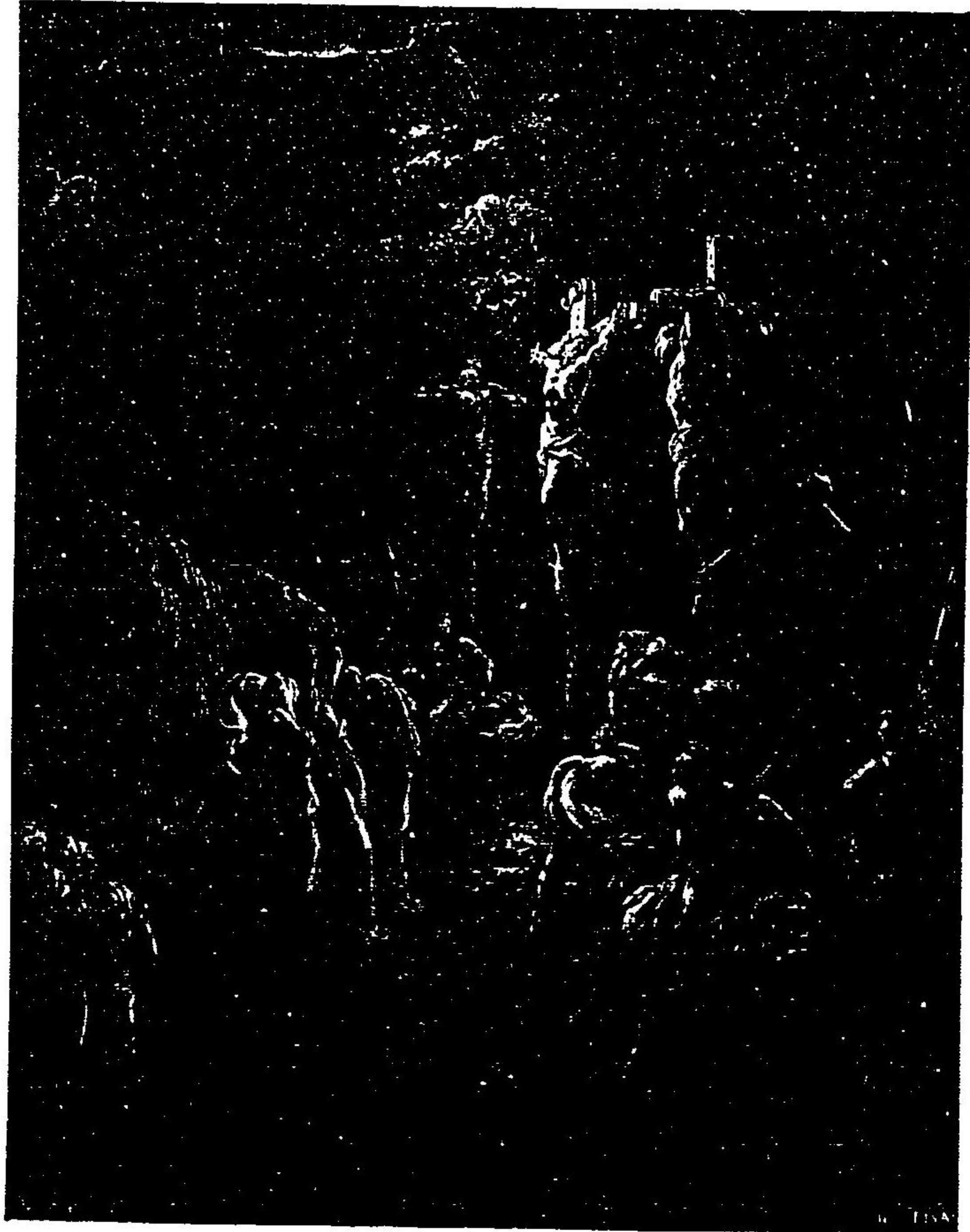
(マトフイニセノ三三三三九。マコ一五ノ二二二七。)

既にして主をゴルゴツと云ふ處譯すれば、髑髏の處に來り曳きて、醋に膽を和へて、

彼に飲ましめたるに、之を背めて飲むことを欲せざりき。没藥を和へたる酒を彼

に飲ませしに、彼受けざりき。

第三時に在りて、彼を十字架に釘せり。彼と偕に二人の盜賊を十字架に釘せり、



主が十字架に釘せらるる (第二章七十二節)



彼を曳き往く時或キリネヤの人シモンが田より來り過ぐるを執へ之に十字架を

負はせて主イエスに從はしめたり。

衆くの民は彼に隨ひ又多くの婦ありて彼の爲に哭き哀めり。主イエス彼等を

顧みて曰へり、イエルサリムの女よ、我の爲に哭く勿れ己及び爾等の子の爲に哭け、

蓋視よ、日至りて、人人曰はん、妊まざる者未だ産まざる胎未だ哺はせざる乳は福な

りと。其時人人山に對ひて我等の上に倒れよ、陵に對ひて我等を掩へと曰はん。

蓋若し青き木に斯く爲さば、枯木は如何にせられん。

主イエスと偕に亦二人の犯罪者を死に處せん爲に曳けり。

(三二七) 主の苦み、主十字架に釘せらる。

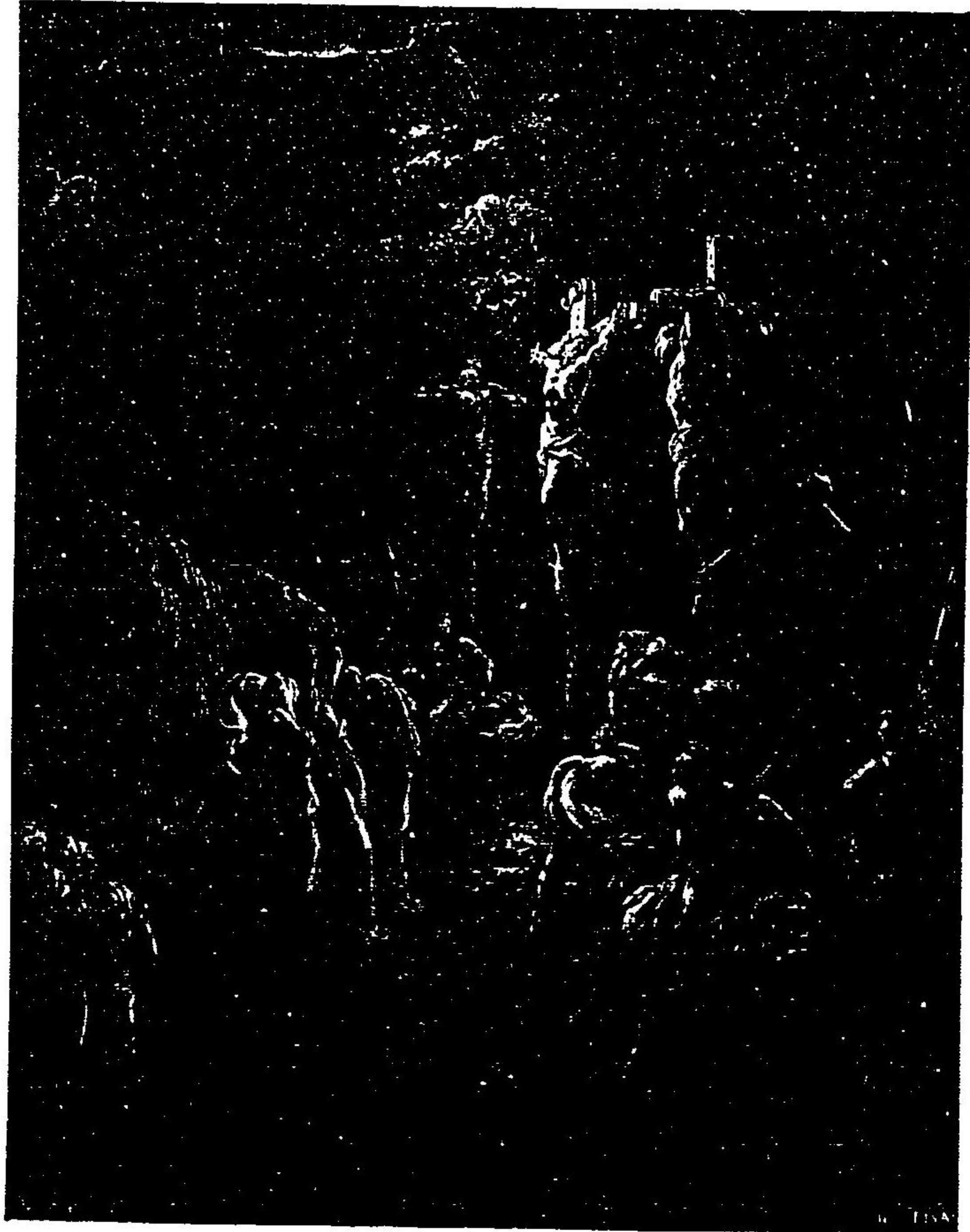
(マトフイニセノ三三三三九。マコ一五ノ二二二七。)

既にして主をゴルゴツと云ふ處譯すれば、髑體の處に來り曳きて、醋に膽を和へて、

彼に飲ましめたるに、之を背めて飲むことを欲せざりき。没藥を和へたる酒を彼

に飲ませしに、彼受けざりき。

第三時に在りて、彼を十字架に釘せり。彼と偕に二人の盜賊を十字架に釘せり、



主が十字架に釘せらるる (第二章七十七節)



聖 福 音 史

人は其右一人は其左なり。主イエスマ中に在り是に於て聖書の言應へり曰く、  
犯者と僭に算へられたり也。又其罪を書せる標を其首の上に置けり、ピラト標を書して十字架の上に置けり、書して云くイエスマナゾレイ、イウヂヤ人の王也。標はエリン、ロマ、エウレイの文字を以て書したり。イウヂヤ人の多くの者此の標を讀めり、蓋主イエスマの釘せられし處は城に近かりき。  
イウヂヤ人の司祭諸長はピラトと謂へり、イウヂヤ人の王と書す勿れ、乃彼自ら我はイウヂヤ人の王なりと云へり、と書るせ。ピラト答へて曰へり、我が書ししことは書せり。  
兵卒は主イエスマを釘せし後其外衣を取り之を四分して、各一分を得たり、又裏衣を取れり、裏衣は縫なく、上より渾く織りたる者なり。故に彼等相語りて曰へり、之を裂かずして、之が爲に闘すべし、誰か之を得るを觀んど、是聖書に録して、共に我が外衣を分ち、我が裏衣を闘せりと云ふに應ふを致す、兵卒斯く行へり。



(二二八) 主の十字架上の七聖言(一)釘せし者の爲の祈禱

(マトフエイ三三ノ三九一四三。マルコ一五。)

民、十字架の前に立ちて觀たり。過ぐる者彼を誦り、首を搖かして曰へり、嘔殿と毀ちて三日に之を建つる者よ、己を救ひて十字架より下れ。有司等も衆と與に嘲りて曰へり、彼は他人を救へり、若し彼は主ハリストス、神の選びたる者ならば、己を救ふべし。主ハリストス、イスライリの王、今十字架より下るべし、我等が見て彼を信せん爲なり。神を恃めり、若し神彼を悦ばば、今彼を拯ふべし、蓋彼は我神の子なりと云へり。

主ハリストス是等の事を見、且聽きて曰へり、父よ、彼等を赦せ、蓋彼等は爲す所を知らず。

(二二九) 同上(二)敬虔なる盜賊に。(マトフエイ二七ノ四四。マルコ一五。)

彼と偕に十字架に釘せられたる盜賊も亦彼を誦れり。誦りて曰へり、爾若し主ハリストスならば、己と我等とを救へ。他の一人之を赦めて曰へり、爾豈神を畏れざるか、蓋爾も同じく定罪せられたり、惟我等に在りては當然なり、我が行に稱へる事を

受くればなり、然れども彼は一も不善を行はざりき。乃主ハリストスに對ひて曰へり、主よ、爾の國に來らん時、我を記念せよ。主ハリストス彼に謂へり、我誠は爾に語く、爾今日我と偕に樂園に在らん。

(二三〇) 同上(三)生神女及びイオアンに。(イオアン二七。九ノ。)

主ハリストスの母と母の姉妹クレヲバの妻マリヤと、マリヤ、マグダリナと、其十字架の旁に立てり。主ハリストスは其母及び愛する所の門徒の此に立てるを見て、母に謂ふ、婦よ、視よ、爾の子なり。次ぎて門徒に謂ふ、視よ、爾の母なり。其時より此の門徒彼を己の家に取れり。

(二三一) 同上(四)神父に向ひ。

(マトフエイ二七ノ四五。マルコ一五。)

第六時に及び晦冥は全地を蔽ひて、第九時に至れり。第九時の頃主ハリストス大聲に呼びて曰へり、イリ、イリ、ラマ、サリファニ、即我が神よ、我が神よ、何を我を遺てたる。彼處は立てる者の中、或人之を聞きて曰へり、彼はイリヤを呼ぶなり。



厥後主イエス一切の事已成りたるを知りて、聖書に應ひて曰ふ、我渴く。彼處に醋の満ちたる器の置けるあり、兵卒の一人直に走り、海絨を取りて、醋を盈たし、革を束ねて、彼に飲ましめたり。餘の者曰へり、姑く舍け、イリヤ來りて、彼を救ふや否やを觀ん。

(二三二) 同上(五)渴く。

(マトフエニヒノ四八、マルコ一五ノ三六、イオアン一八ノ二八、二九)。

(二三三) 同上(六)成れり。

(イオアン二ノ九ノ三〇)。

主イエス醋を受けし後曰く成れり。

(二三四) 同上(七)父よ、爾の手に我が靈を付す。及び死。

(マトフエニヒノ五〇、マルコ一五ノ三七)。

主イエス大聲に呼びて曰へり、父よ、我が神を爾の手に託す。之を言ひて首を俯して氣絶、神を神父に付せり。

(二三五) 主の死せし休徴。

(マトフエニヒノ五一、五二、五三、五四、マルコ一五ノ三八、三九、カニ三ノ四五、四八)。

視よ、殿の幔は上より下に至るまで裂けて、二となり、地震ひ、磐裂け、墓啓けて、寝ねたる聖人の身は多く復活し、彼の復活の後墓より出でて、聖なる城に入り、多くの者に

現れたり。

百夫長及び之と偕に主イエスを守る者は、地震と有りし事とを見て、甚しく懼れて曰へり、此れ誠に神の子なり。

百夫長の外にも之れと偕に主イエスを守る者、地震其の他行はれしことを觀、甚だ驚きて又曰へり、慎に彼は神の子なりと。

爾等は此等の事の證者なり。

(二三六) 主に從へる女徒の赤誠。

(マトフエニヒノ二七ノ五、五五、五六、マルコ一五ノ四〇、四一、四二、カニ三ノ四九)。

彼處に亦遙に望める婦等あり、其中にマリヤ、マグダリナ、小なるイアコフとイオシヤとの母マリヤ及びサロミヤ、即彼がガリレヤに在りし時にも彼に從ひて事へし者及び其他彼と偕にイエルサリムに上りし多くの婦ありき。今遠く立ちて有りし事を觀たり。

(二三七) 其脅を刺せり。

(イオアン一ノ三九)。

其日は備節日にして、彼の安息日は大なる日なるに因りて、イウヂヤ人は安息日に



屍を十字架に留めざらん爲、ピラトに彼等の脛を折りて、屍を取り下さんとを請へ

り。故に兵卒來りて、彼と偕に十字架に釘せられし第一の者の脛を折り、第二の者にも亦然せり。主イエスマに來りて、其已に死したるを見れば、彼の脛を折らざりき、然れども一人の兵卒、戈を以て、其脊を刺せり、忽血と水と出でたり。

見し者は證を作せり、其證は眞なり、彼は言ふ所の眞なるを知る、爾等をして信せしめん爲なり。蓋斯の事の成りしは、聖書の應ふを致す云く、其骨は折られざらんと、聖書の他篇に又云ふ、彼等は其刺しし者を觀んと。

(三三八) 墓に置く。

(マトフェイニセノ五七一六〇、マルコ一五ノ四二一四六、

ヨハネ一ノ三五〇一五四、イオアン一ノ九ノ三八一四二) 日已に暮れしに、是の日は備節日にして安息日の前日なりし故、時にイオンフと名づくる人、議士にして、善且義なる者、彼等の謀と所爲とに憚せず、イウヂヤの邑アリ、マフエヤに屬し、自らも神の國を俟てる者は、主イエスマの門徒にして、唯イウヂヤ人を懼るるに因りて、自ら隠したる者、ピラトに就きて、主イエスマの屍を求めたり。ピラト其已に死せしを奇み、百夫長を召して、彼死して久しきかど問ひ、百夫長より



主 聖 の 葬  
(第 二 百 三 十 八 章)



聖 福 音 史

之を知りて屍をイオシフに與へり。

又ニコデム爰に夜間主イイススに來りし者は、没薬と蘆薈とを合せたる者約百斤を携へて來れり。

彼等主イイススの屍を取り布を以て香料と與に之を裹めり、イウデヤ人の葬の例の如し。

彼が十字架に釘せられし所に園あり、園の中に未だ曾て人の葬られざる石を穿て、新なるイオシフの墓あり。其日はイウデヤ人の備節日なるに因りて主イイススを彼處に置きたり、墓の近かりし故なり。石を墓の門に轉せり。

(二三九)

墓に置かれし事を證するの女徒。

(マトフ、イニ、セ、ノ、六、マ、ル、コ、一、五、ノ、四、七、カ、ニ、三、ノ、五、五、〇、一、)

イオシフ、ニコデムと偕に主を埋りし處に、ガリレヤより主イイススと偕に來りし婦等、マリヤ、マグダリナ、及びイオシヤの母、マリヤ、イオアンナ、サロミヤ、其他後に隨ひて、墓及び如何に彼の屍を置きたるを觀たり。歸りて後、香料と香膏とを備へ、誠に遵ひて安息日を息みたり。



(二四〇) イウダの亡び。(マトフイニセ)。

時に彼を賣りしイウダは其定罪せられたるを見て悔いて銀三十を司祭諸長と長老等とに返して曰へり我幸なき血を付して罪を犯せり。彼等曰へり我等何ぞ與らん自ら願みよ。

彼銀を殿に擲ちて出で往きて自ら縊れたり。

聖 司祭諸長銀を取りて曰へり之を殿の庫に納るるは宜しからず是れ血の價なればなり。乃相議して此を以て陶人の田を買ひ賓旅を癒る地と爲せり。故に其田は

音 今日に至るまで血の田と稱へらる。

史 是に於て預言者イエレミヤを以て言はれしこと應へり曰く彼等銀三十乃値を附

けられし者即イスライリの諸子が値を附けし者の價を取りて之を陶人の田の爲に與へたり主の我に示ししが如しと。

(二四一) 安息日の夜に女徒等墓に至る。(マトフイニスノ一)。

安息日過ぎて七日の首の日の黎明にマリヤマグダリナと他のマリヤと墓を觀ん爲に來れり。彼等市に還りサロミヤと偕に香料を買ひたり往きて主イエイスに

覺らん爲なり。

(二四二) 墓に番兵を置く。(マトフイニセ)。

明日即備節日の翌日司祭諸長とフリセイ等とピラトの許に集りて謂へり主よ我等憶ひ起すに彼の惑はす者尙生ける時我三日の後に復活せんと言へり。是の故に命じて三日に至るまで墓を固めしめよ恐らくは其門徒夜來りて彼を竊み民に向ひて彼は死より復活せりと言はん然らば後の惑は先より更に甚しからん。

福 ピラト彼等に謂へり爾等に番兵あり往きて爾等の意に任せて之を固めよ。

音 彼等往きて石に封印し番兵をして墓を固めしめたり。

史 婦等のゴルフを去りし後に此の事行はれたり。

(二四三) 主ハリストスの復活。(マトフイニセ)。

主ハリストス一次我等の罪の爲に義者にして不義者に代りて苦を受けたり我等を引きて神に詣らん爲なり彼は身にて殺され神にて生かされ此の神を以て下りて獄に在る諸神に宣傳せり然れども神は死の縲を釋きて彼を復活せしめたり死は彼を留むること能はざりしに因るダウイドは主ハリストスの復活を指して彼の



靈は地獄に遣されず彼の肉體は朽つるを見ざりきと云へり。神は彼を第三日に復活せしめ彼をして衆民に非ず乃神が預め選びし證者たる我等其死より復活せし後彼と偕に食飲せし者に現れしめたり。主イエスは苦を受けし後其選びし者の前に多くの確證を以て彼等の前に己の活くるを視し四十日の間彼等に現れて神の國の事を語れり。

(二四四) 主復活後の現れの一般 (ハルコ一四六)

七日の首の日朝早く主イエス復活して先づマリヤマグダリナ即其曾て七の魔鬼を逐ひ出だしし所の者に現れたり。婦往きて先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれども彼等其生きて之に見られたりと聞きて信せざりき。其後彼等の中の二人が村に往く時主イエス變りたる容を以て之に途に現れたり。二人返りて餘の者に告げしに彼等をも信せざりき。卒に十一門徒に其席坐の間に現れて其信なきと心の頑なるを責めたり彼の復活したるを見し者を信せざりし故なり。

(二四五) 墓に於ける携香女「マグダリナ」のマリヤ。主始めて現はる。

(マトフエニ二八ノ二一四) (マコニ一八)

「ホタ」の夜七日の首の日視よ地大に震へり蓋主の使天より降り就きて墓の門より石を移して其上に坐せり。其容は雷の如く其衣は白きこと雪の如し。守る者は彼を懼れ戦きて死せし者の如くになり走りて市に去れり。

七日の首の日朝尙味き時マリヤマグダリナ墓に來りて石の墓より移されたるを見たり。其處に在りし神の使は己の顔を示さざりき故に趨りてシモンペトル及び主イエスの愛せし他の門徒に來りて彼等に謂ふ人主を墓より取れり我等其何處に彼を置きしを知らず。

ペトル及び他の門徒出でて墓に往けり。二人共に趨りしが他の門徒はペトルより疾く趨りて先に墓に來れり。俯して布の置けるを見たれども入ざりき。シモンペトル彼に次ぎて來り墓に入りて布の置けるを見又其首を裏みし巾の布と共に在らず乃捲きて別に他の處に置けるを見たり。其時先に墓に來りし他に門徒も入りて見而して信せり。蓋彼等は未だ其死より復活すべき事の聖書に載せたるを知らざりき。是に於て二の門徒復己の所に歸れり。

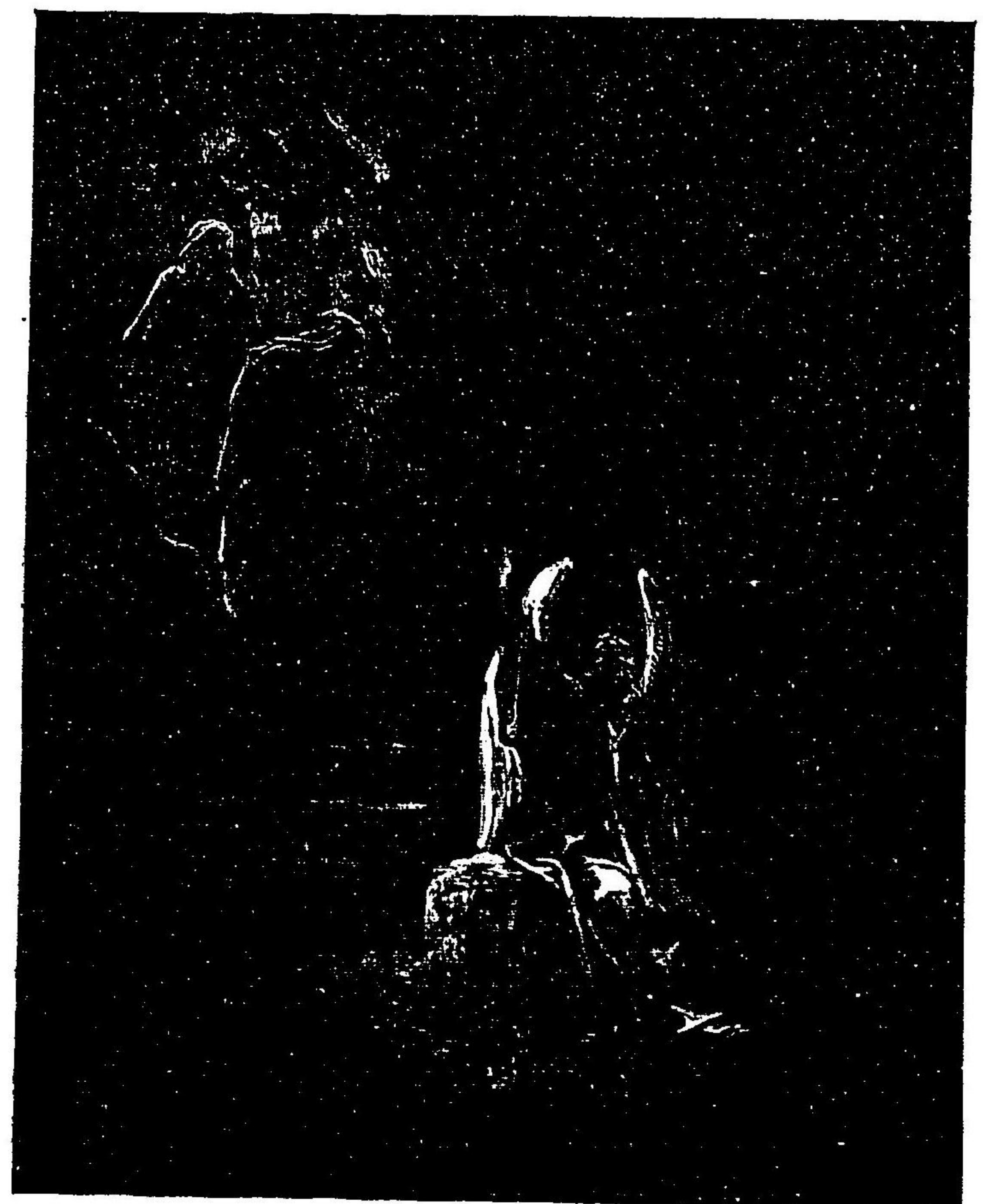
聖 福 音 史



マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時墓に俯して、二の天使が白衣にして主イエスの屍の置かれし處に、一は首に一は足に坐せるを見る。彼等之に謂ふ婦よ、何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其何處に彼を置ししを知らず。此を言ひて、願みて、主イエスの立てるを見る、然れども其主イエスなるを知らざりき。主イエス彼に謂ふ婦よ、何ぞ哭ける、誰を尋ぬるか。婦は園丁なりと意ひて、之に謂ふ、君よ、若し爾彼を移ししならば、何處に置ししを我に告げよ、我彼を取らん。主イエス之に謂ふ、マリヤよ、婦願みて、彼に謂ふ、ラウフニ譯すれば、夫子なり。

史 香 福 聖  
 主イエス之に謂ふ、我に捫る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざりき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰へ、我は我が父及び爾等の父、我が神及び爾等の神に升ると。  
 マリヤ、マグダリナ往きて、門徒に己が主を見しこと、及び其彼に之を言ひしことを告げたり。

(二四六) 携香女。イオアンナ其他の婦。神使の現れ。(ルカ二四)



主の復活後、神使と携香女



來れり、これイオアンナなり、他の婦も彼と偕にせり。

石の墓より移されしを見入りて、主イエスの屍を見ざりき。之が爲に惑へる時、

視よ輝ける衣を衣たる二人彼等の前に立てり。彼等懼れて面を地に伏せられたれば、

二人之に謂へり、何を生ける者を死者の中に尋ぬる。彼は此に在らず、乃復活せり、

彼が尙ガリヤに在りし時、如何に爾等に語けて、人の子が罪人の手に付され、十字

架に釘せられ、第三日に復活すべきことを云ひしを憶へ。

彼等其言を憶ひ起し、墓より歸りて、觀しこと聽きしことを悉く此を十一門徒及び

其餘の者に告げたり。

(二四七) 携香女。イヤコフの母マリヤ及びサロミヤ。主の第二の現

れ。 (マテ福音二八ノ五一―五二)。

七日の首の日甚早く、日の出づる頃、イヤコフの母マリヤ及びサロミヤ、他の婦も偕

に墓に來り、相語りて曰へり、誰か我等の爲に石を墓の門より移さん。目を舉げて、

石の已に移されたるを見たり、蓋其石は甚大なり。

彼等主の墓に近づき、轉されし石に坐せる神の使を見て怖れたり。天使婦に對て



て曰へり爾等懼るる勿れ我爾等が十字架に釘せられし主イエスを尋ねるを知  
 る。彼は此に在らず蓋其言ひし如く復活せり來りて主の置かれし處を觀よ且速  
 に往きて其門徒に告げて曰へ彼死より復活せり爾等に先だちてガリラヤに往く  
 爾等彼處に於て彼を見ん。  
 彼等墓に入りて白衣を衣たる少者が右の方に坐せるを見て駭けり。彼は之に謂  
 ふ駭く勿れ爾等は十字架に釘せられしナザレトの主イエスを尋ね彼は復活し  
 て此に在らず觀よ此は彼を置きし處なり。往きて其門徒及びベトルに詣けて言  
 へ彼は爾等に先だちてガリラヤに往く爾等彼處に於て彼を見ん。  
 婦急ぎて墓を離れ懼れ且大に喜びて其門徒に報せん爲に趨り往けり。彼等は心  
 さわぎし爲め石に坐せる天使には目をくれず戰き且驚きて一言も人に語げざり  
 き懼れしが故なり。  
 彼等が門徒に報せん爲に往ける時視よ主イエス之に遇ひて曰へり慶べよ彼等  
 就きて其足を抱きて彼を拜せり。主イエス之に謂ふ懼るる勿れ往きて我が兄  
 弟に報じてガリラヤに往かしめよ彼等彼處に於て我を見ん。

聖 福 音 史

(二四八) 婦の言に對する門徒の不信。主第三にベトルに現れる。

(ルカ二四ノ九一―二二。ヨハネ一六ノ一〇一。)

諸婦墓より歸りて觀しこと聽きしことを悉く此を十一門徒及び其餘の者に告げ  
 たり。使徒に之を告たる者はマグダリナマリヤ、イオアンナ、イアコフの母マリヤ、  
 サロミヤ及び其他彼等と僧に在りし者なり。イオアンナは他の門徒に告げたり。  
 使徒は彼等の言を空言と爲して之を信せざりき。  
 マグダリナのマリヤは往きて先に彼と僧に在りし哀み哭ける者に告げたり。イア  
 コフの母マリヤ及びサロミヤの言をも信せざりき然れどもベトル起ちて墓に趨  
 り往き俯して惟裏布の置けるを見其成りし事を心に異みて歸れり。其後主はシ  
 モン、ベトルに現れたり。

(二四九) イウデヤ人主の復活の眞實を覆はんと試む。(マトフ二一ノ二八。)

婦の往く時視よ番兵の中の或者城に入りて有りし事を以て悉く司祭諸長に告げ  
 たり。彼等は長老等と與に集り相談して多くの銀を兵卒に給へて曰へり爾等云  
 へ我等が寝ねたる時其門徒夜來りて彼を竊めりど若し此の事方伯に聞ねば我等



彼に勸めて爾等に憂なからしめん。彼等銀を取りて、教へられし如く行ひたり。是に於て斯の言はイウデヤ人の中に傳はりて、今日に至れり。

(二五〇) ま、エムマウスに於て第四に門徒等に現はる。(一三三三四五)

聖 福 音 史

七日の首の日に其中の二人、イエルサリムを去ること約六十小里なるエムマウスと名づくる村に往きしが互に凡そ此等の有りし事を語り、語り且論ずる時、主イエス親ら近づきて彼等と偕に行けり。然れども二人の目は捉められて彼を識らざるを致せり。彼曰へり、爾等は行きて何事をか互に論じ、又何を憂ふる色ある。其一人クレオパと名づくる者彼に對て曰へり、イエルサリムに來りし者の中爾獨近日其中に成りし事を知らざるか。問ひて曰へり、何の事ぞ。彼等曰へり、主イエスナゾレイ、即神及び衆民の前に行と言に能力ある預言者たりし者に在りし事如何に我等の司祭諸長及び有司等が彼を解して死に定め、十字架に釘せし事なり。我等は嘗て此の人はイズライリを贖ふべき者なりと望めり、然れども此れ皆成りしより、今己に第三日なり。然るに又我等の中の或婦等は我等を驚せり、彼等朝早く墓に在りしが其屍を見ずして、來りて天使等の現れて、彼は生くと言ふ

を見しことを語りたり。我等の中の數人墓に適さしに、果して婦の言ひし如き事を見たり、惟彼を見ざりき。

主イエス彼等に謂へり、噫、無知にして、凡そ諸預言者の言ひし事を信するに心の遅き者よ、主ハリストスは此くの如く苦を受けて、其光榮に入るべかりしに非ずや。是に於てモイセイより始めて、諸預言者に及ぶまで、凡そ聖書に彼を指して載する

聖 福 音 史

ことを彼等に説き明せり。往く所の村に近づきしに、彼は尙遠く行かんとする者の若し、二人彼を留めて曰へり、我等と偕に止れ、蓋時暮れんとし、日已に戻けり。彼入りて偕に止れり。席坐せる時、彼餅を取りて祝福し、擘きて彼等に與へたり。其時二人目啓けて、彼を識れり、而して彼忽見えずなりき。彼等互に言へり、途中彼が我等と語り、且我等に聖書を解き明しし時、我等の心我が衷に燃ゆしに非ずや。即時に起ちて、イエルサリムに歸り、十一門徒及び之と偕に聚れる者に遇へり。衆言ふ、主は實に復活せり、而してシモンに現れたり。二人も亦途中に在りし事及び如何に其餅を擘く時、彼等に識られし事を述べたり。



(二五一) 主、其夜にフマの外の諸門徒に現はる。

(ルカニ四ノ三六一四〇イナ。)  
(アンニ〇ノ九一二三。)

エムマウスの門徒等其有りし事を語りし七日の首の日の夜に門徒集れる處の門  
イウデヤ人を懼るるに因りて閉ぢたるに主イエイス來りて中に立ちて彼等に謂  
ふ爾等に平安。彼等驚き且懼れて見る所は神なりと意へり。  
主イエイス彼等に謂へり何ぞ懼れ惑ふ胡爲れぞ此の意は爾等の心に起れる。我  
が手我が足を見よ。是我自なり我に捫りて視よ。蓋神には骨肉なし其我に有るを見  
るが如し。此を言ひて彼等に己の手足及び脊を示せり。門徒主を見て喜べり。  
彼等は炙りたる魚一片と蜜房とを彼に與へたれば取りて彼等の前に食へり。  
又彼等に謂へり我猶爾等と偕に在りし時爾等に語りてモイセイの律法諸預言者  
及び聖詠に我を指して録されし事皆應ふべしと云ひしは爾是なり。其時彼等の  
智識を啓きて聖書を悟らしめたり。又彼等に謂へり斯く録されたり而して斯く  
ハリストスは苦を受け第三日に死より復活すべかりき且其名に因りて悔改と諸  
罪の赦とはイエエルサリムより始めて萬民に傳へらるべきなり。爾等は此等の事

聖福音史

の證者なり。

主イエイス復彼等に謂へり爾等に平安父が我を遣しし如く我も亦爾等を遣す  
此を言ひて氣を嘘きて彼等に謂ふ聖神を受けよ。爾等人に其罪を釋さば則釋さ  
る人に其罪を留めば即留めらる。

(二五二) 主(第六に)フマ及び諸門徒に現はる。(イオアンニ〇。)  
(イオアンニ〇。)

主イエイスの來りし時十二の一なるフマ稱してデイムと云ふ者彼等と偕に在ら  
ざりき。他の門徒彼に謂へり我等主を見たり。然れども彼は之に謂へり我若し  
其手に釘の迹を見ず我が指を釘の迹に入れず我が手を其脊に入れずば信せざら  
ん。

八日を越えて門徒復内に在りフマも彼等と偕にせり。門閉ぢたるに主イエイス  
來りて彼等の中に立ちて曰へり爾等に平安。次ぎてフマに謂ふ爾の指を此に伸  
べて我が手を視よ。爾の手を伸べて我が脊に入よ。信せざる勿れ乃信せよ。  
フマ答へて彼に謂へり我が主よ我が神よ。主イエイス彼に謂ふ爾は我を見しに  
緣りて信せり見ずして信する者は福なり。

聖福音史



(二五三) 主第七に(ライウリアダの海濱に於て現はる。奇蹟の魚漁。  
(イオアン二四)。

厥後主イエス復其門徒にライウリアダの海濱に現れたり。其現れたること左の如し、シモンペトル、フマ稱してデイテムと云ふ者、ガリレヤのカナのナフナイルゼヴェイの二子、及び他の二人の門徒共に在り。シモンペトル彼等に謂ふ我往きて漁せん。彼等曰ふ我等も爾と偕に往かん。出でて直に舟に登りしが、是の夜は獲る所なかりき。

聖福音史

既に明けて、主イエス岸に立てり、然るに門徒は其主イエスたるを知らざりき。主イエス彼等に謂ふ小子よ、爾等に食ふべき物あるか。彼等答へて曰へり無し。彼は之に謂へり、網を舟の右に施せ、然らば得ん。彼等施ししに、之を擧ぐることはざりき、魚の多き故なり。時に主イエスの愛せし所の門徒ペトルに謂ふ、是れ主なりシモンペトル、是れ主なりと聞きて、裸なりしに因りて、衣を束ねて、海に投せり。他の門徒は舟に乗り、魚の盈てる網を曳きて、至れり、蓋地を離るること遠からず、約二百尺なり。

聖福音史

地に上りし時、燃えたる火其上に置きたる、魚及び餅あるを見る。主イエス彼等に謂ふ、今爾等が獲たる魚、數尾を携へ來れ。シモンペトル往きて、網を地に曳き上げたり、中に大なる魚、一百五十三尾、盈てり、斯く多しと雖、網は裂けざりき。主イエス彼等に謂ふ、來りて食せよ。門徒一も、爾は誰たると、問ふことを敢てせざりき、其主たるを知らばなり。主イエス前みて、餅を取りて、彼等に與へ、魚も亦然り。

(二五四) 主の第七の現はれ。魚漁の後の教訓。(イオアン二四)。

主イエスが死より復活して後、其門徒に現れしこと、此れ其三なり。彼等の食せし時、主イエス、シモンペトルに謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること、彼等に過ぎたるか。彼曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。主イエス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。

又第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。主イエス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。第三次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル第三次に爾我を愛









主の昇天  
(第二五八章)

二五七 主の昇天 (第十の現れ)

(行賈一ノ二一四。マトフエ一ノ二八ノ一九。二〇。マルコ一六ノ一八。一五。及び一九。二〇。ルカ二四ノ四九。一五。マルコ一六ノ一八。一五。)

此の如く復活の日より天に昇りし日に迄るまで四十日の間門徒等に現はれ己の活くるを視し神の國の事を語り。

聖 福 音 史

此日彼等を集めて之に命じて曰へりイエルサリムを離れずして爾等が我に聞きし所の父の許約せし者を待て。蓋イオアンは水を以て洗を授けたり爾等は日久しからずして聖神に由りて洗を受けん。

是に於て彼等集りて彼に問ひて曰へり主よ爾は此の時に於てイズライリの國を興すか。彼は之に謂へり父が己の權内に置きし時及び期は爾等の知るべき所に非ず。然れども聖神の爾等に臨まん時爾等能力を受けてイエルサリム全イウデ

ヤサマリヤ及び地の極に至るまで我が爲に證者と爲らん。

故に爾等往きて萬民に教を傳へて彼等に父と子と聖神との名に因りて洗を授け、彼等を教へて我が一切爾等に命せしことを守らしめよ。視よ我恒に爾等と偕にして世の終末りまで在るなり。





聖 福 音 史

祝福する時彼等を離れ擧げられて天に昇れり。

此を言ひて後彼等の目の前に擧れり、雲彼を接けて彼等に見えざらしめたり。

其昇れる時彼等天を仰ぎたるに視よ二人白衣にして彼等の前に立ちて曰へり、

リレヤの人よ何を天を仰ぎて立てる爾等より天に昇りし此の主イエスは爾等

が其天に昇るを見し如く是くの如く復來らん。

其時彼等は彼を拜し大なる悦を以て橄欖山と名づくる山よりイエエルサリムに歸

れり。既に來りて樓に登れり、彼處に留れる者は、ベトル及ビイアコフ、イオアン及

ビアンドレイ、フィリッソフ及ビフオマ、ワルフォロメイ及ビマトフメイ、アルフメイの子イアコフ

及ビシモン、シロヤ及ビイアコフの兄弟イウダなり。

彼等皆心を一にして、婦等と主イエスの母マリヤと彼の兄弟と偕に祈禱祈願を

務めたり。恒に殿に在りて神を頌美祝讚せり。

此の如く主は天に昇りて神の右に坐せり、門徒等は聖神の降りて後彼等は出でて、

四方に教を傳へ主は彼等を相け之に従ふ休徴を以て其言を固めたり。



聖福音史

(二五八) 該 (イオアソニノニ五。一)  
 主イエスの行ひし事他に亦多く有り、若し一一之を書さば、我意人其書は世載するに勝へざらん。  
 此を載せたるは爾等が主イエスは神の子、主ハリストスなりと信じ且信じて其名に因りて生命を得ん爲なり。

— 卷「ア」 ミ 「ン」 —

明治三十四年十二月二十七日印刷  
 明治三十五年一月二十八日發行

發行者兼

石川喜三郎  
 東京市本郷區西片町十番地

印刷人

植原儀直  
 東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

發行所

正教會編輯局  
 東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

印刷所

建昇堂  
 東京市本郷區湯島切通坂町五十一番地

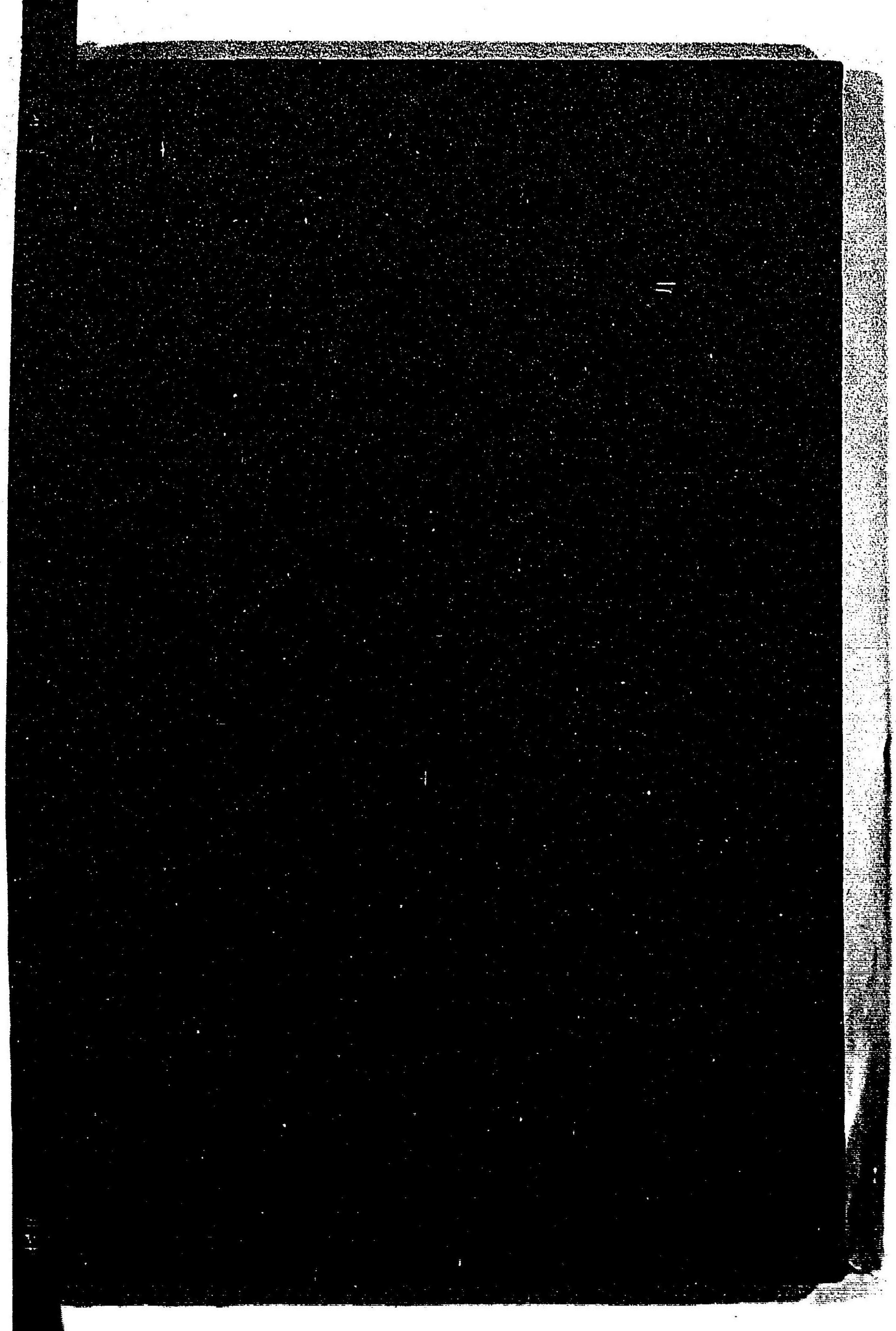






316  
49







316  
49

020737-000-8

316-49

主ハリストス一代記(聖福音史)

フェオ ファン師 / 編

M35

ABI-0557





